

県道筑紫野・三輪線関係埋蔵文化財調査報告書 1

仙 道 古 墳 群

朝倉郡三輪町所在古墳群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 78 集

1987

福岡県教育委員会

県道筑紫野・三輪線関係埋蔵文化財調査報告書 1

仙 道 古 墳 群

朝倉郡三輪町所在古墳群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 78 集

昭和62年

福岡県教育委員会

序

当委員会では、各種開発事業の企画・立案に際しては埋蔵文化財の保護についても十分な御配慮をいただくよう、広く関係各方面をお願いしているところであります。事業主体が公共団体ならびにこれに準ずる機関であればなおのことであり、県道筑紫野・三輪線建設に際しても、県土木部道路建設課とは当委員会指導第二部文化課を通じて、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の保護について協議を重ねてまいりました。この結果、三輪町に所在する仙道古墳群の一部については事前に発掘調査を行って記録保存するはこびとなり、ここにその成果の一端を刊行するにいたしました。

調査に際して御協力いただいた関係各位に対して心から御礼申し上げますとともに、本書が広く活用されますことを願ってやみません。

昭和62年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が、福岡県土木部道路建設課からの委託を受けて昭和58・59両年度に実施した、県道筑紫野三輪線建設予定地内に所在する埋蔵文化財についての事前の発掘調査結果についての報告書である。

2. 本書に収録した遺跡の名称と所在地は以下のとおりである。

第6地点

仙道7～9号墳 朝倉郡三輪町大字栗田字溝落110

仙道4号墳 朝倉郡三輪町大字久光字峯町383

第7地点

仙道2号墳 朝倉郡三輪町大字久光字仙道6—1

3. 図版のうち、遺構については石山勲が、出土遺物については九州歴史資料館の石丸洋技術主査が、各々撮影した。

4. 出土遺物の実測は、土器以外を佐土原逸男・向田雅彦両君が、土器については平田春美・原 富子・若松三枝子・鬼木ツヤ子の四君が各々行い、一部を石山が補訂した。

5. 出土遺物のうち、金属器の保存処理には、九州歴史資料館の横田義章技術主査が当たった。

6. 出土遺物のうち、土器の整理作業は、岩瀬正信整理指導員の指導の下、九州歴史資料館にて県文化課整理作業員が行った。

7. 挿図の浄書は、全て豊福弥生整理補助員が行った。

8. 図版・挿図作成の過程で、矢野明美・鶴田佳子両君の協力を得た。

9. 本書の執筆・編集は石山が行った。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の位置と環境	3
III	調査の内容	6
1	古墳の排列	6
2	仙道2号墳	
(1)	墳 丘	7
(2)	石 室	9
(3)	遺物出土状態	12
(4)	出土遺物	13
3	仙道4号墳	
(1)	墳 丘	24
(2)	石 室	27
(3)	遺物出土状態	27
(4)	出土遺物	27
4	仙道7号墳	
(1)	墳 丘	31
(2)	石 室	33
(3)	遺物出土状態	33
(4)	出土遺物	33
5	仙道8号墳	
(1)	墳 丘	35
(2)	石 室	38
(3)	遺物出土状態	38
(4)	出土遺物	38
6	仙道9号墳	
(1)	墳 丘	41
(2)	石 室	41
(3)	遺物出土状態	44
(4)	出土遺物	48

図 版 目 次

- 1—(1) 仙道2号墳全景(南から、後方は4号墳)
- (2) 仙道2号墳全景(北東から)
- 2—(1) 仙道2号墳第1トレンチ墳丘内列石(東から)
- (2) 仙道2号墳第1トレンチ墳丘内側列石
- 3—(1) 仙道2号墳第3トレンチ墳丘内列石(北東から)
- (2) 仙道2号墳第3トレンチ墳丘内列石(左半は玄室の奥壁)
- 4—(1) 仙道2号墳第2トレンチ墳丘内列石(北西から)
- (2) 仙道2号墳玄室奥壁
- 5—(1) 仙道2号墳玄室前壁と閉塞石
- (2) 仙道2号墳羨道部での遺物出土状態
- 6—(1) 仙道2号墳前庭部全景(南から)
- (2) 仙道2号墳前庭部全景(南西から)
- 7—(1) 仙道2号墳前庭部西半全景(東から)
- (2) 仙道2号墳前庭部西半土器出土状態(南西から)
- 8—(1) 仙道4号墳墳丘全景(東から)
- (2) 仙道4号墳墳頂部の陥没(前方・印は2号墳)
- 9—(1) 仙道4号墳石室残存状況(右手前が玄室)
- (2) 仙道4号墳の墓道と同肩部での土器出土状態(南西から)
- 10—(1) 仙道7号墳石室全景(左奥6号墳、その右8号墳、南から)
- (2) 仙道7号墳石室全景(北西から)
- 11—(1) 仙道8号墳墳丘全景(東から、左奥は6号墳)
- (2) 仙道8号墳石室全景(手前が玄室)
- 12—(1) 仙道8号墳の周溝と墓道(西から)
- (2) 仙道8号墳墓道土器出土状態(左端は周溝内側肩部)
- 13—(1) 仙道6号墳(左奥)、同7号墳(中央手前)、同8号墳(中央奥)、同9号墳(右奥)
全景(南から)
- (2) 仙道9号墳墳丘全景(南西から)

- 14—(1) 仙道9号墳墓道全景(南から)
- (2) 仙道9号墳石室全景(床と右側壁とは第3次)
- 15—(1) 仙道9号墳石室右側壁全景(第3次, 中央が補強壁)
- (2) 仙道9号墳石室右側壁全景(第3次, 北西から)
- 16—(1) 仙道9号墳石室左側壁全景(第3次)
- (2) 仙道9号墳石室横口部(床は第1・第2次)
- 17—(1) 仙道9号墳石室全景(補強壁除去後, 南西から)
- (2) 仙道9号墳第1・第2次(中央部)床面
- 18—(1) 仙道2号墳出土装身具類
- (2) 仙道2号墳出土金銅製品
- 19—(1) 仙道2号墳羨道部出土轡
- (2) 仙道2号墳出土刀子・馬具
- 20—(1) 仙道2号墳出土武器
- (2) 仙道4号墳出土装身具
- 21—(1) 仙道9号墳出土耳環
- (2) 仙道2・9号墳出土玉類(31~33は2号墳出土の土玉)
- 22—(1) 仙道9号墳出土刀子・両頭金具
- (2) 仙道9号墳出土鉄鏃
- 23 仙道2号墳出土土器(1)
- 24 仙道2号墳出土土器(2)
- 25 仙道2号墳出土土器(3), 仙道4号墳出土土器(1)
- 26 仙道4号墳出土土器(2), 仙道7号墳出土土器
- 27 仙道8号墳出土土器
- 28 仙道9号墳出土土器(1)
- 29 仙道9号墳出土土器(2)
- 30 仙道9号墳出土土器(3), 墳丘周辺出土石器(1—仙道2号墳, 2—仙道7号墳,
3—仙道8号墳)

挿 図 目 次

- 1. 仙道古墳群の位置と周辺の主要遺跡分布図(1/50,000「甘 木」) 4
- 2. 仙道古墳群全体図(1/200) 6

3. 仙道2号墳墳丘測量図 — 発掘前 (1/300)	7
4. 仙道2号墳墳丘測量図 — 発掘後 (1/200)	8
5. 仙道2号墳墳丘断面実測図 (1/60)	折りこみ
6. 仙道2号墳石室実測図 (1/60)	10
7. 仙道2号墳前庭部実測図 (1/60)	11
8. 仙道2号墳出土装身具類実測図1 (1/2)	13
9. " 2 (1/2)	14
10. 仙道2号墳出土馬具実測図 (1/3)	15
11. 仙道2号墳出土工具・武器実測図 (1/3)	16
12. 仙道2号墳出土土器実測図1 (1/3)	17
13. " 2 (1/3)	18
14. " 3 (1/3)	19
15. " 4 (1/3)	20
16. " 5 (1/3)	21
17. " 6 (1/6, 拓本は1/4)	折りこみ
18. " 7 (1/3)	23
19. 仙道2号墳出土土器の筧記号拓影集成 (1/3)	23
20. 仙道4号墳墳丘実測図 (1/300)	24
21. 仙道4号墳墳丘断面実測図 (1/60)	25
22. 仙道4号墳石室実測図 (1/60)	27
23. 仙道4号墳出土装身具実測図 (1/2)	27
24. 仙道4号墳出土土器実測図1 (1/3)	28
25. " 2 (1/3)	29
26. " 3 (1/6)	30
27. 仙道4号墳出土土器の筧記号拓影集成 (1/3)	30
28. 仙道5～10号墳墳丘測量図 (1/330)	折りこみ
29. 仙道7号墳墳丘断面実測図 (1/60)	31
30. 仙道7号墳石室実測図 (1/60)	32
31. 仙道7号墳出土土器実測図1 (1/3)	34
32. " 2 (1/6)	35
33. 仙道8号墳墳丘断面実測図 (1/60)	36
34. 仙道8号墳石室実測図 (1/60)	37
35. 仙道8号墳出土武器実測図 (1/2)	38

36.	仙道 8 号墳出土土器実測図 1 (1/3)	39
37.	" 2 (1/6)	40
38.	" 3 (1/3)	40
39.	仙道 8 号墳出土土器の筧記号拓影集成 (1/3)	41
40.	仙道 9 号墳墳丘測量図 — 発掘後 (1/200)	42
41.	仙道 9 号墳墳丘断面実測図 (1/60)	折りこみ
42.	仙道 9 号墳石室実測図 (1/60)	43
43.	仙道 9 号墳石室遺物出土状態実測図 (1/30)	45
44.	仙道 9 号墳出土装身具実測図 (1/2)	46
45.	仙道 9 号墳出土鉄器実測図 (1/2)	47
46.	仙道 9 号墳出土土器実測図 1 (1/3)	48
47.	" 2 (1/3)	49
48.	" 3 (1/3)	50
49.	" 4 (1/6)	51
50.	" 5 (1/3)	52
51.	仙道 9 号墳出土土器の筧記号拓影集成 (1/3)	53

I 調査に至る経過

甘木・朝倉地区と福岡市およびその近郊とを結ぶ唯一の幹線道路である国道386号線の交通渋滞は、地域住民の重大関心事であり、その解消策の一案として新しい道路建設の早期着工が強く要望されてきた。このため、県土木部道路建設課および主管の同部甘木土木事務所から、新設道路 — 筑紫野三輪線の路線決定に先立って建設予定地内の埋蔵文化財の分布状況について、県教育庁管理部文化課に照会があった（4月2日付55甘木発第2号）。

これを受けて、文化課では担当職員を現地に派遣して踏査を行い、その結果、三輪町内については、第3～8地点の計6ヵ所が再度の分布調査および発掘調査が必要との回答を行なった（7月17日付55教文第736号）。

その後、甘木土木事務所から文化課に対して、昭和59年度着工予定の第6～8地点についての事前の発掘調査を昭和58年度中に実施して欲しいとの要望があった。昭和58年度には、教育庁内部の機構改革が行われ、新設の北筑後教育事務所が事前の調査を担当することとなった。調査費用・期間などについての調整・協議を行うために伐開後に再度の現地踏査を実施した結果、第7地点（仙道2号墳）の他に、第6地点では仙道4・7～9号墳の計4基が建設予定地内に所在することが確認された。このため、昭和58年度中の調査完了は困難であるので、翌年度の着工直前までには終了させるとの合意の下で調査を開始するに至った。

なお、第8地点については、第7地点の調査期間中に、ユンボを使用して試掘を行った結果、二次堆積であり遺構が存在しないことが明らかとなった。このため、今回の報告書では、特に言及しないことを予めお断りしておきたい。

調査の期間および体制については、以下のとおりである。

調査期間

昭和58年度

自 昭和58年10月11日

至 昭和59年1月27日

昭和59年度

自 昭和59年4月16日

至 昭和59年6月11日

調査関係者

甘木土木事務所

所 長 佐々木昭英（昭和58年度）

〃 石松主基生（昭和59年度）

工務第二課長 今村和昭

〃 第一係長 西牟田外美

〃 技術主査 伊藤 謙（昭和58年度）

〃 深見政夫（昭和59年度）

福岡県教育委員会

総 括

教育長 友野 隆

管理部文化課長 藤井 功（昭和58年度）

〃 前田栄一（昭和59年度）

〃 課長補佐 中村一世（前 任）

北筑後教育事務所長 大平岩男（前 任）

〃 社会教育課長 藤 征弘（前 任）

〃 主任社会教育主事 矢永 信

庶 務

管理部文化課庶務係長 松尾 満（前 任）

〃 事務主査 竹内洋征

調 査

管理部文化課調査第一係長 宮小路賀宏（前 任）

北筑後教育事務所技術主査 石山 勲（調査担当・前 任）

調査補助

高田一弘・日高正幸・高山浩一・下村精一・向田雅彦

報告書作成（昭和61年度）

総 括

指導第二部文化課長 窪田康德

〃 課長補佐 平 聖峰

〃 課長技術補佐 宮小路賀宏

〃 参事補佐 栗原和彦

庶 務

〃 主任主事 沢田俊夫

担 当

甘木歴史資料館副館長 石山 勲

整理補助

佐土原逸男・向田雅彦・吉武憲章

II

なお、現地での発掘作業の円滑な進捗のため、今回も栗田在住の石川勝義翁には絶大なる御協力をいただいた。三輪町教育委員会の各位からも、種々の御高配を得た。町内在住の北筑後教育事務所社会教育主事中原敏隆氏からも、度々差入れの品を頂戴した。末筆ながら、心から御礼申し上げます。

また、足許の悪い山中に三輪小学校の児童の元気な声が響し、後日に見学の感想文を寄せていただいたことも忘れられない思い出となっている。

II 遺跡の位置と環境

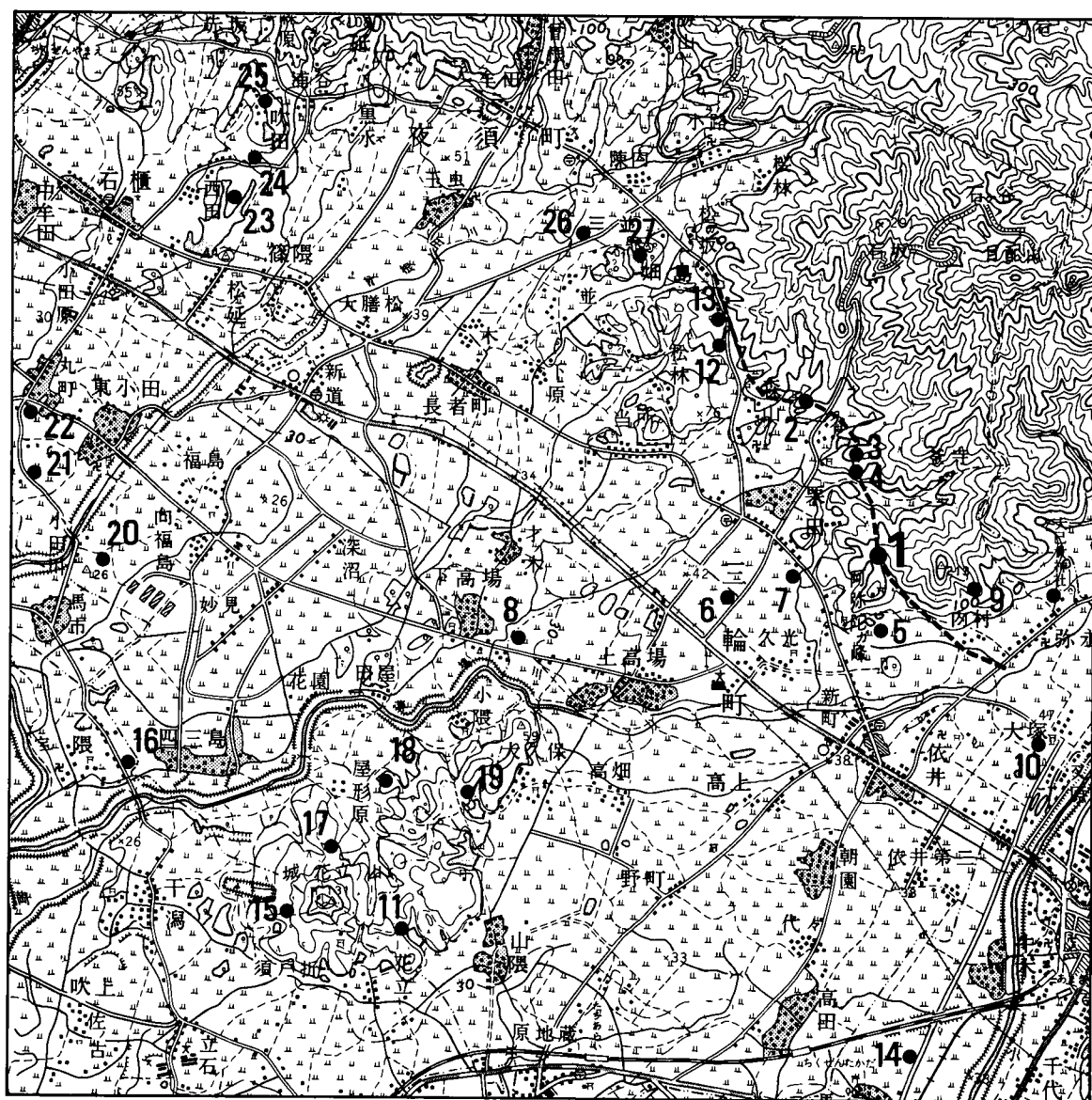
ここに報告する仙道古墳群は、朝倉郡三輪町大字久光字仙道から大字栗田字溝落にかけての山林中の、尾根筋から斜面にかけてのそこかしこに所在している。

三輪町は、旧筑前国夜須郡（旧秋月黒田家領）に属し、筑紫平野の北縁、郡の中心である甘木市の西隣に位置する。町の中央部を草場川が西走して小郡市域で宝満川と合流し、東縁は小石原川がこれを限る。同郡西端の夜須町ならびに小郡市（旧筑後国領）と境を接する南西隅は城山（立花山）で、同山は標高130 m余と高くはないが広大な平野にあっては一際目立つ格好の道標である。

北高南低の地形のせいもあってか、遺跡の分布密度は経田・旭ノ下など栗田遺跡群（第1図6・7）を含む草場川右岸——町の北半部の方が濃密である。群集墳の所在地は、地形的に目配山および城山の両山麓部に限定されるが、小石原右岸段丘上に大塚（第1図10）の字名が残っている。

これまで、当町が含まれる甘木・朝倉地方の考古学的調査は、現甘木市域が先行していた感があった。近年では、九川横断自動車道建設に伴う事前の発掘調査が県教委によって精力的に行われており、この結果、従来調査例が乏しかった郡東部の朝倉町・杷木町での実態が明らかにされつつある。また、郡西端の夜須町でも、数年来大規模な圃場整備工事が進捗しつつあり、これに伴う事前の発掘調査は県内でも屈指の面積を対象としており、調査はなお数年継続されるという。

厳しい状況下での懸命な調査が続けられている一方で、新知見が続々ともたらされている。ガラス甕を再利用した円板や、日光鏡・精白鏡などを副葬した夜須町・峯遺跡10号甕棺墓（第1図—21）、近年精力的な踏査が行われた三輪町・山隈（同11）、夜須町・小隈（同19）、同・八並（同27）の須恵器国産開始期とみられる窯跡群、甘木市・池の上6号墳出土の鍛冶工具な



第 1 図 仙道古墳群の位置と周辺の主要遺跡分布図 (1/50,000「甘木」)

- | | | | |
|--------------------|------------|-------------|---------------------|
| 1. 仙道2～9号墳(第6・7地点) | 2. 第3地点 | 3. 第4地点 | 4. 堂の浦古墳群
(第5地点) |
| 5. 仙道装飾古墳 | 6. 栗田・経田遺跡 | 7. 栗田・旭ノ下遺跡 | |
| 8. 大竹遺跡 | 9. 乃木松古墳群 | 10. 大塚遺跡 | 11. 山隈窯跡 |
| 12. 森山遺跡 | 13. 君ヶ原遺跡 | 14. 上川原遺跡 | 15. 穴観音古墳 |
| 16. 乙隈遺跡 | 17. 焼ノ峠古墳 | 18. 金山遺跡 | 19. 小隈古墳・窯跡 |
| 20. 東小田・七板遺跡 | 21. 峯遺跡 | 22. 中原前遺跡 | 23. 松延新池遺跡群 |
| 24. 吹田遺跡 | 25. 吹田古墳群 | 26. 琴の宮遺跡 | 27. 八並古墳群 |

どが、その代表例として挙げられる。

これらの諸例は、甘木・朝倉地方が大陸・半島への門戸である玄海灘沿岸部から30km近くも離れた内陸部にありながらも、世の動向に極めて敏感・迅速に対応したことを示している。しかも、今來の文物を単に入手・愛好するにとどまらずに、新しい生産技術の導入にも意欲的・積極的であった時期がこれらの地にあったことを物語る、とみていいだろう。

以下に、町内の主要遺跡について摘記する（冒頭の数字は、第1図に対応）。

5. 仙道装飾古墳（国指定史跡）

昭和52年9月、圃場整備事業に伴う事前の発掘調査を県教委が行い、その結果、彩色による図文が描かれていることが判明した。周濠出土の盾持人形武人埴輪を含む出土品は、甘木歴史資料館に収蔵・展示されている。未報告。

6. 栗田・経田遺跡（三輪町大字栗田字經由）

昭和48年度に圃場整備事業に伴う事前の調査が、昭和60年度に範囲確認のための調査が各々町教委を事業主体として行われた。弥生時代中期の甕棺墓群に大量の丹塗磨研土器を使った祭祀遺構が伴うことで著名。なお、昭和48年度出土品は、一括して買い上げられて国の保有となっている。

馬場弘稔編『栗田遺跡』＜三輪町文化財調査報告書 5＞ 1986年

7. 栗田・旭ノ下遺跡（三輪町大字栗田字旭ノ下）

昭和49年度に、圃場整備事業に伴い町教委が主体となって調査を実施した。弥生時代前期から後期にかけての住居跡と古墳時代初頭にかけての大溝が確認され、石製把頭飾も採取されている。

馬場弘稔編『栗田遺跡（D・E地区）』＜三輪町文化財調査報告書 2＞ 1975

8. 大竹遺跡（三輪町大字上高場字犬竹）

圃場整備事業に伴い、昭和59年度事業として、町教委が主体となって調査。主として弥生時代後期から終末期にかけての住居跡74軒、箱式石棺墓などが確認された。

石山勲編『大竹遺跡』＜三輪町文化財調査報告書 4＞ 1985年

9. 乃木松古墳群（三輪町大字弥永字乃木松）

樹園地造成事業に伴い、昭和51年度に事前の発掘調査を町教委主催で実施。目配山の南麓、丘陵の斜面に所在する8基の円墳のうち、追葬が認められる箱式石棺1基と単室の横穴式石室2基とを調査。皮袋形須恵器、装飾付筒形器台などが出土している。

新原正典『乃木松古墳群』＜三輪町文化財調査報告書 3＞ 1977

Ⅲ 調査の内容

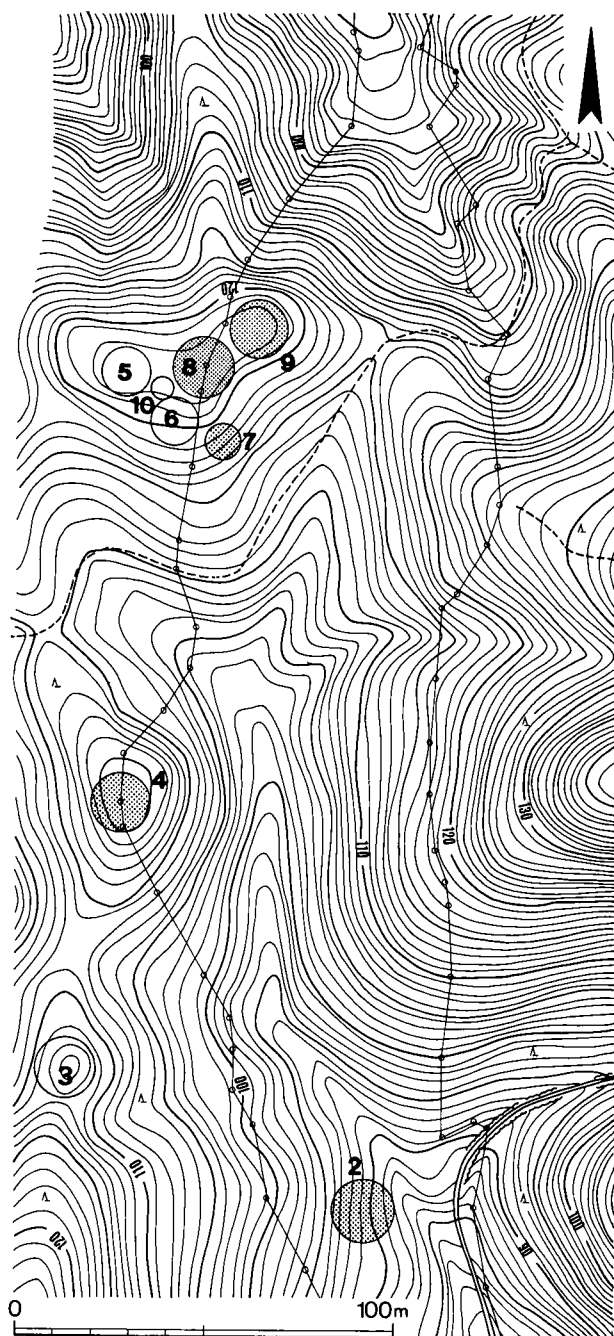
1. 古墳の排列 (第2図)

調査時点での仙道古墳群は、計9基の円墳から構成されていた。群南端の仙道古墳(1号墳)は、筑後川右岸地域の稀少な装飾古墳の一つとして国指定(史跡)を受けている。現在では周囲が水田となった緩斜面に立地しており、山間の古墳ではないこと自体が群中の盟主墳たることを物語っている。

2号墳以下は、柚人の通う谷間の小路に沿うかのように、西側の尾根筋あるいは斜面のそこかしこに所在する。新設される道路も、先人が踏みしめたであろうこれら各古墳へと通ずる小路をなぞるようにして、弥永から栗田へと抜けることになる。

いずれの古墳の上に立っても、必ず木立を通して平野部を望むことができる。言いかえれば、麓の居住地から見える箇所が造墓地として選択されている。散在するかみにみえて、実は周到な配慮がなされているのだ。

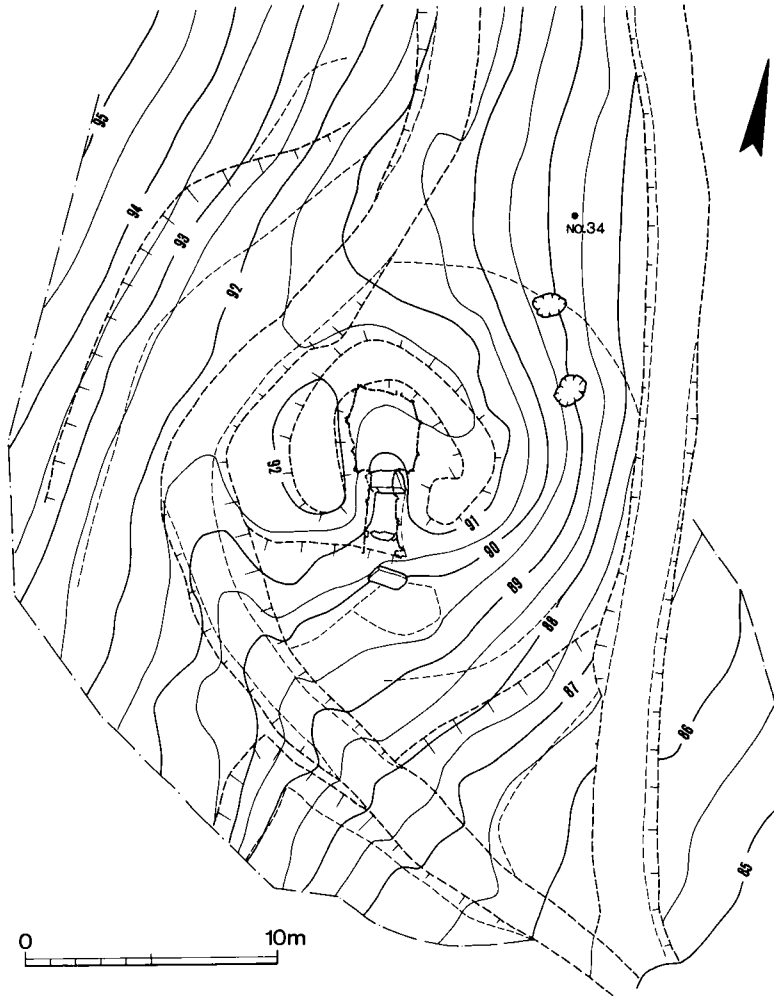
第2図 仙道古墳群全体図
(1/2000)



Ⅲ

2. 仙道2号墳

(1) 墳丘(第3～5図)

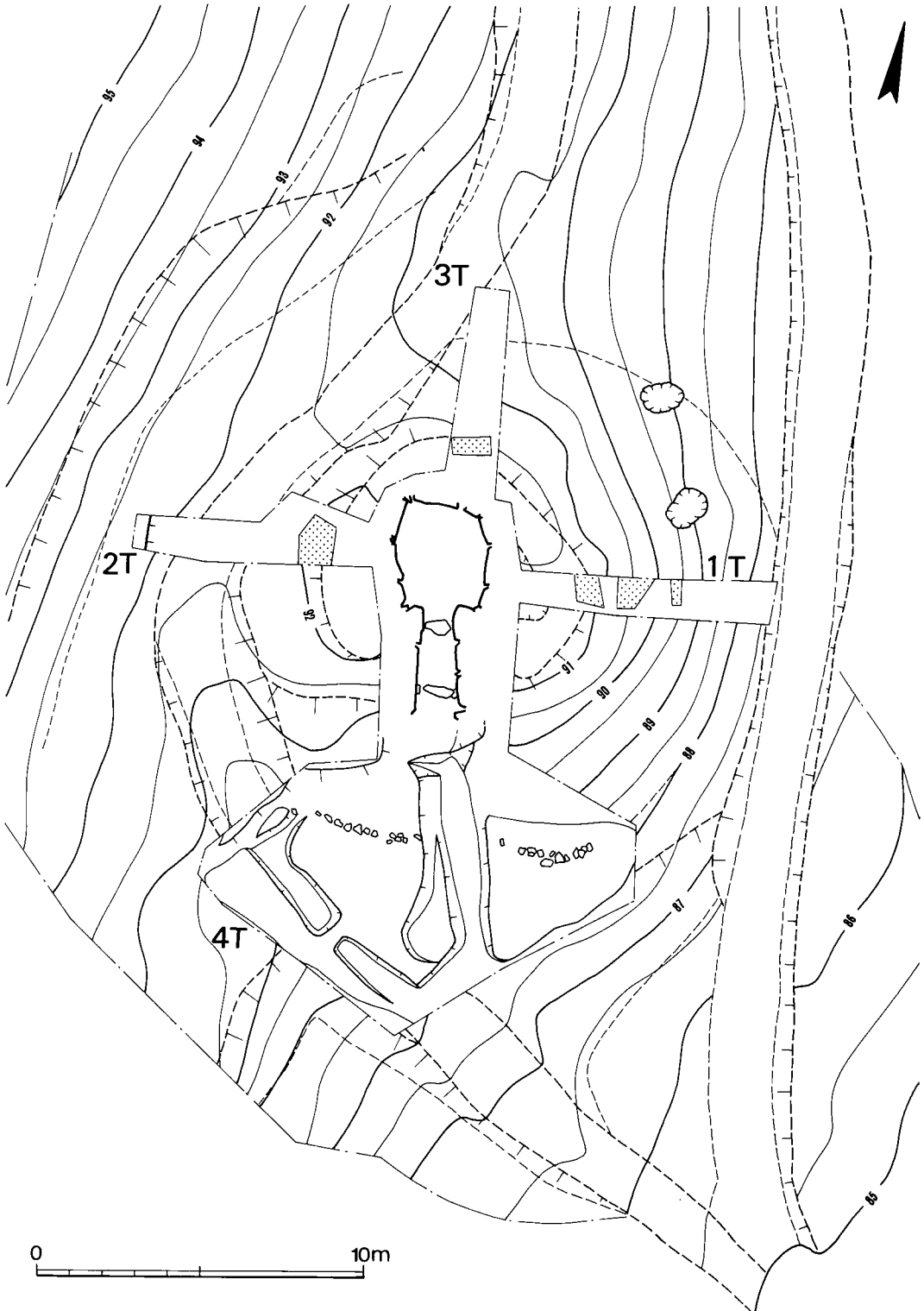


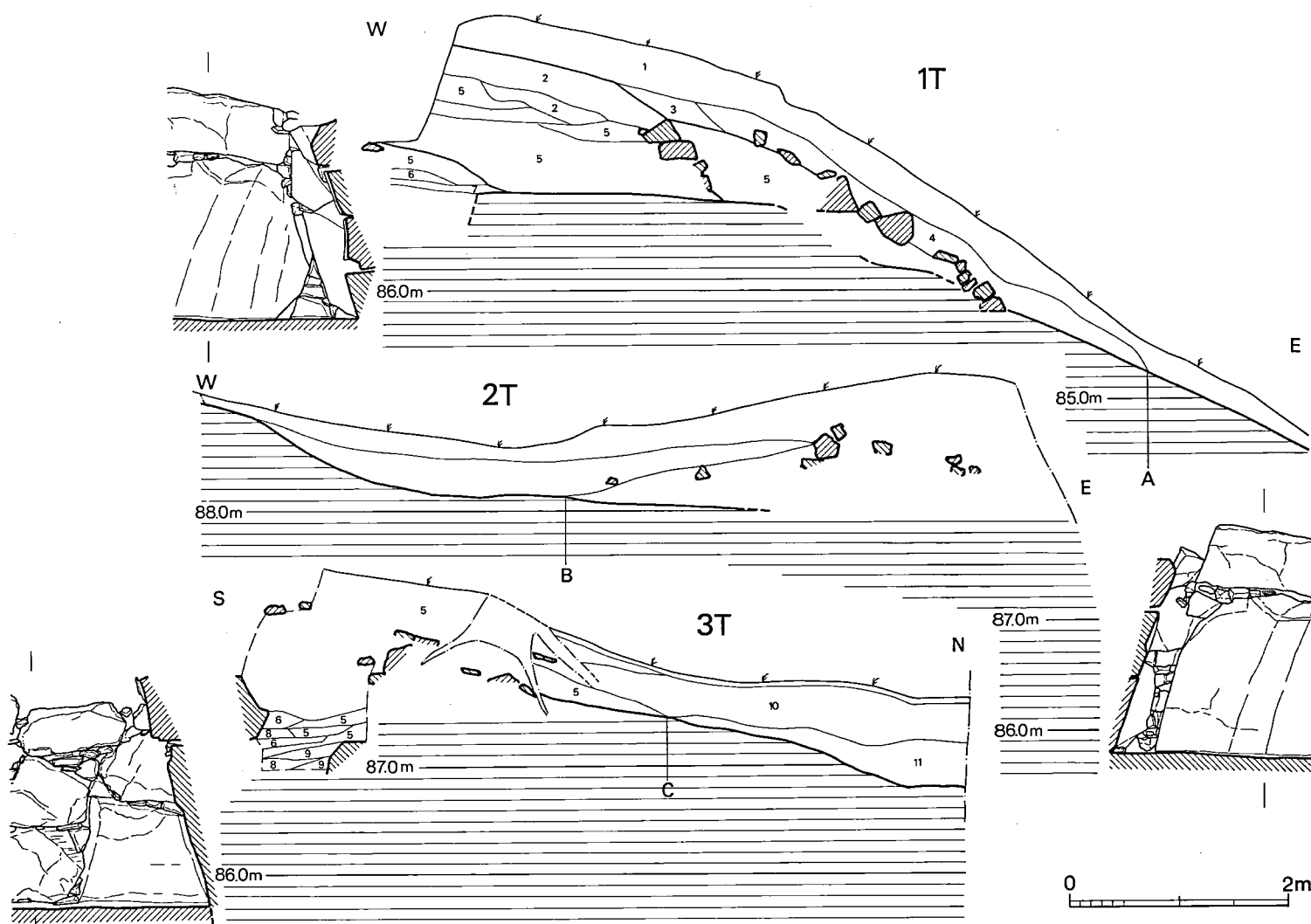
第3図 仙道第2号墳墳丘測量図－発掘前(1/300)

西側斜面に位置しており、古墳の東側は直ちに崖状に切り立っている。けれども、この部分はもともと狭いながらもテラス状の緩斜面であったと思われる、こうした原地形をうまくとりこんだとみてよい。伐採直後のみかけの規模は、 17×17 m、南側からの高さは約3.3 mであった。墳頂部は陥没し、石材が露出・転落しており、西半部には材木搬出のための小路が周溝状に通っていた。

第4図 仙道2号墳墳丘測量図－発掘後(1/200) ▶

2. 仙道2号墳





第 5 図 仙道2号墳墳丘断面実測図 (1/60)

- 1 黄褐色土
- 2 混礫黒褐色粘質土
- 3 混礫赤褐色粘質土
- 4 黒色粘質土
- 5 混礫茶褐色粘質土
- 6 褐色粘質土
- 7 ②+⑥
- 8 黒褐色粘質土
- 9 ⑤+⑧
- 10 暗褐色土
- 11 黒色土

III

西半部では地山を削り出しているが、墳丘は当時の表土を取り除いた後に盛土されており、墳頂部では約1.3mの厚さがある。墳丘内部には、さほど整然としたものではないが割石を積み上げて列石状にめぐらしており、盛土中核部が流失しないように配慮・工夫している。列石は、傾斜がきつい東側（1 T）では3ヵ所にわたるが、緩い北側（3 T）では2列、西側（2 T）では1列ですませている。盛土の範囲は、東側では石室中軸線から8.6m強（A）、西側では約6.4m（B）で、従って、本墳の東西径は約15mとみてよい。

埴輪・葺石は共はない。周溝は、西半部のみ地山を削り出して整形する程度のもので、地業範囲は石室中軸から西側へ9m強の地点までである。

（2）石室（第6・7図）

全長約7.1mの単室の横穴式石室で、主軸をN19°Wにとってほぼ南に開口する。地山を掘り割った墓壇内に築かれており、裏込土は封土よりも密にかつ硬く撞き固められている。なお、奥壁背後にあたる位置の墓壇肩部の一部に焼土・炭化物塊が認められた。

周壁の基部には大型石材をすえており、これ以上は最大20°とかなりの角度で内側に持ち送っている。積み方は必ずしも整然としたものではないが、石材の控は長手にとられており安定している。玄室のプランは僅かに胴張り気味だが、全体に歪んでいる。玄室各部内法の数値は、

長 さ	{ 左側壁	3.3 m	3.6 m
	{ 中央（奥壁から第1仕切石まで）		
	{ 右側壁	2.75m	
巾	{ 奥 壁	2.15m	
	{ 最大巾	2.85m	
	{ 前 壁	2.3 m	

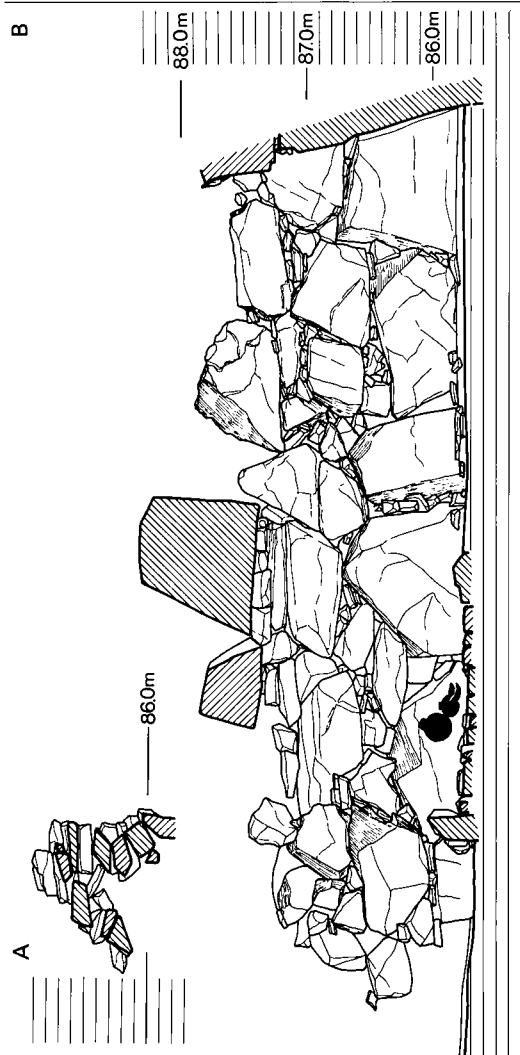
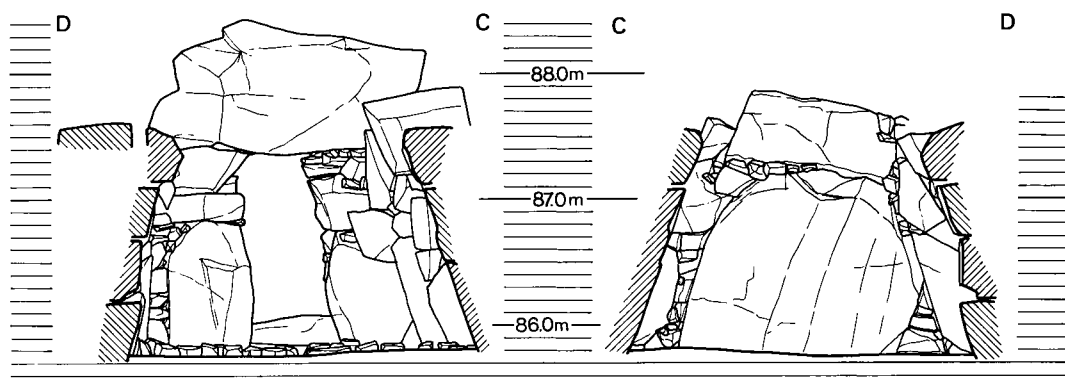
で、現存高は2.05mである。

玄室の天井石は、全て移動されており、うち2石が室内に転落していた。なお、楯石の上端と1 Tでの盛土現存最頂部との高さがほぼ合致するので、これがほぼ天井石底面の位置を示すと考えてよい。とすれば、当初の石室高はほぼ2.6mであったことになる。

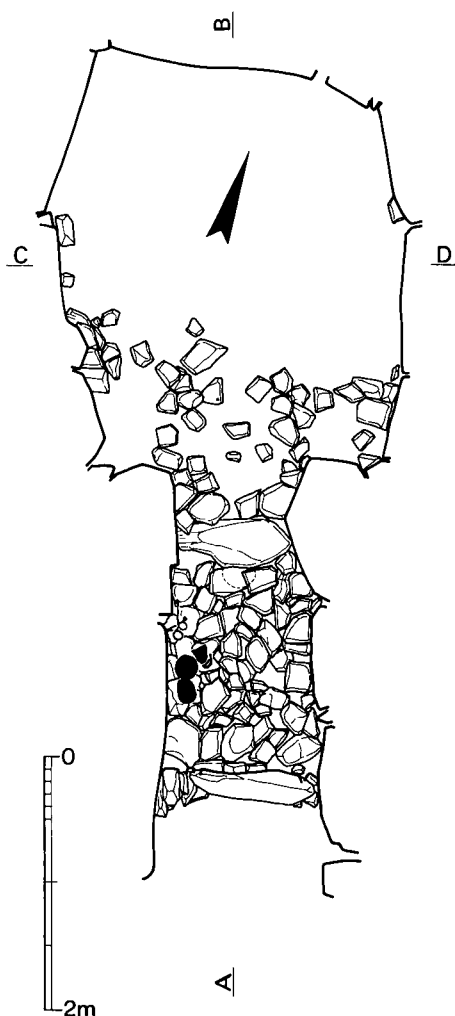
また、第1仕切石は、両袖石の玄室側の面を結ぶ線——前壁よりも少し外側の位置に据え置かれている。この仕切石の北端は、石室全長のほぼ中間——二分する位置にあたる。

横口部は、高さ1.5m、巾0.7～0.45mと狭小で、両袖石は羨道側壁から突き出ない。羨道部の先端近く、奥壁から約5.6mの位置に第2の仕切石が立てられ、玄室及び羨道部のここまでの床面には石が敷き詰められている。羨道の高さは約1.5m、巾は0.85～1.32mで外開きとなる。

2. 仙道2号墳



第 6 図 仙道2号墳石室実測図 (1/60)



第 7 図 仙道2号墳前庭部実測図 (1/60) ▶



2. 仙道2号墳

なお、第1仕切石南端近くの床の狭い範囲（第6図のドット部分）には、赤色顔料が認められた。無論、周壁材への顔料の塗布はない。

羨道部最先端の天井石は、第2の仕切石よりも少しく庇状に張り出した程度と考えられるので、転落していた大型石材（図版1-1）が架けわたされていたものであろう。従って、第2の仕切石以前の羨道部側壁は、この天井石と墓道肩部とをつなぐ形で、斜めに積み上げられている。

閉塞は、第2仕切石直前で行われており、割石を積み上げるが、上半は現存しない。

羨道部には、地山を掘り割った上端巾1～2mの浅い墓道が長さ7.5mにわたって接続している。

羨道部最先端 — 石室開口部の前面には、扇形に広がる平坦面——前庭部が設けられているのが注意された。奥壁に向って左側、つまり西側では、墓道肩部から0.5m程離れてこれと平行する長さ約2.8mの低い石積みがある。この南端近くには、緩やかな弧を描くように長さ約3.6mの石積みが、西に向って取り付けられている。この列石と墳丘法面裾部との間からは、多数の土器が折り重なるように出土した。

墓道をはさんだ右半（東側）でも、墓道肩部から緩く弧状に連なる石組みがある。全体的に散乱状態に近くて雑然とした感を受け、土器も少なく、左半の状況とは対照的である。

以上からみて、これら墓道の左右（東西）に連なる石積みは、石と土という異なる素材の取り付け部でもある開口部の修景をもかねて、墳丘——奥津城の裾部を示すものであろう。とすれば、墳丘全体の南北径もまた約15mとなる。従って、墳丘における石室の位置は、全体に少しく尾根筋の西側に寄り、南北方向ではほぼ中央にある。つまり、第1仕切石北端が墳丘の中心とほぼ一致する。

（3）遺物出土状態

石室は盗掘を受けており、原位置からの出土品は、羨道部左側壁沿いの床直上からの轡（第10図1）1例に限られる。この他、轡のすぐ南側から出土した平瓶（48）・提瓶（70）は、床石との間に少し間層をはさむものの、側壁にもたせかけるように置いた状態にある。一方、至近からは横瓶（59）も採取されているが、こちらは体部片を恰かも重ね置いたかのような状態である。

玄室内からは、主として装身具類、鉄鏃・馬具などが採取されており、盗掘時に玄室内の土砂がかき出された羨道部からもほぼ同じ内容の遺物が出土した。総じて、石室からの土器出土量は少なく（上記の他、29・33など）、これは本群全体に共通する。

III

室内とは対照的に、室外の墓道あるいは前庭部、特に後者の左半からは多数の土器が出土した。右半からの出土品は、44・47・49～52・54・56などに限られる。これらの土器は、須恵器が圧倒的に多く、完形品は杯身（1）1個のみで、全てがとしても過言ではない程破片となった状態で採取されている。前庭部の東西両側から発見された破片が接合した直口壺（52）の例からみても、これが意識的に破碎された結果であることは明白だ。つまり、供献状態を示すものではない。

（4） 出土遺物

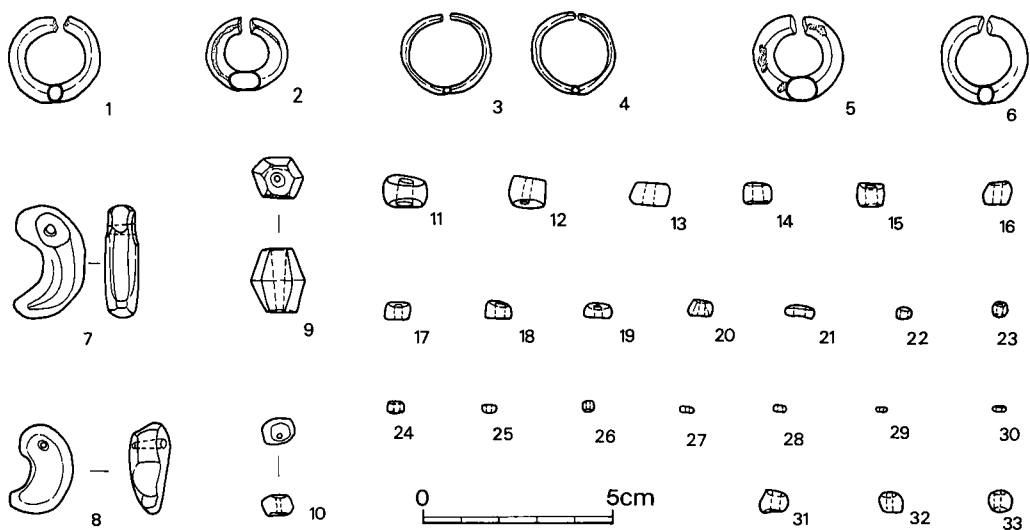
装身具（図版18、第8・9図）

耳環

5対分10個のうち、計6個が採取されている。1は25×23mmで、稍細身の金環。2は22×19mmで、径の割には太身の金環。3～6は銀環で、細身の3と4とは対をなし、24×21mm。5は24×22mm、6は23×22mmで1と同様稍細身。

勾玉

2個。1は碧玉製で、長さ3cm。2は白ばい硬玉製で、長さ24mm。両者とも、片側からの穿孔である。



第 8 図 仙道 2 号墳出土装身具類実測図 1（1/2）

2. 仙道2号墳

切子玉 (第8図9)

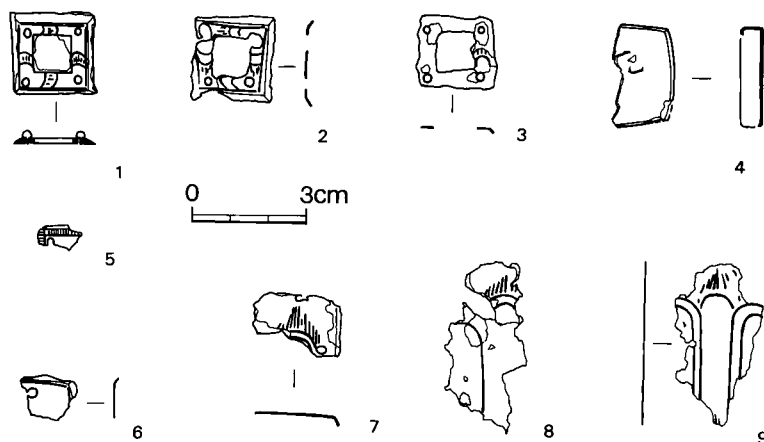
高さ17mm, 最大径14mm。頻繁に着用されたらしく, 玉ユラによる縁辺部の欠ケが目立つ。

小 玉 (第8図10~30)

10は瑪瑙製で, 歪みが目立つ。ガラス玉の径は11~3mmと大きさと形に差がある。色調は, 藍あるいはライト・ブルーである。

土 玉 (第8図31~33, 図版21-2-31~33)

3個採取されており, 径は6~8mm。



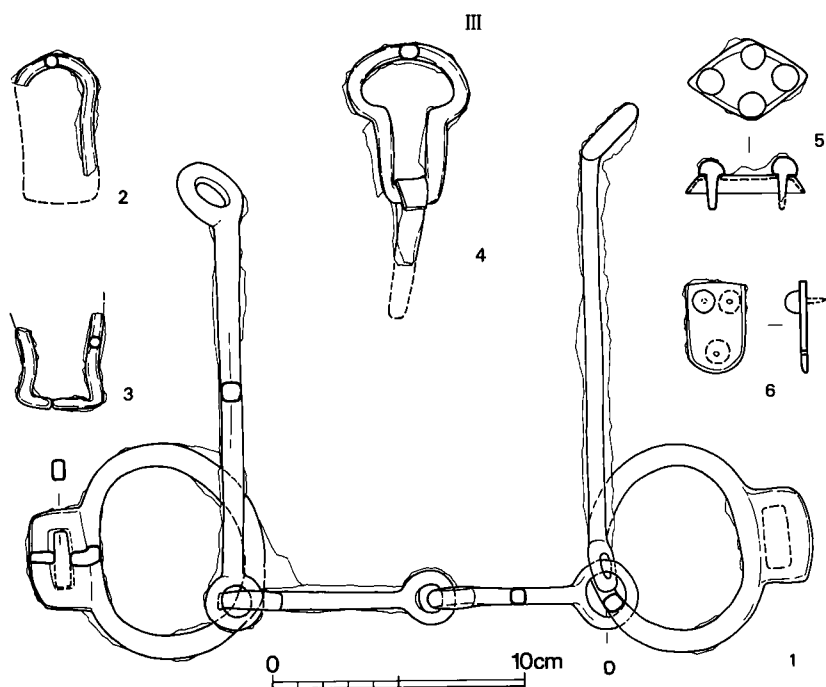
第 9 図 仙道2号墳出土装身具類実測図2 (1/2)

鈔 帯 (第9図)

鉈尾(4)と透のある方形台状板(1~3)などがあるが, 鉈具は採取されていない。方形台状板は, 1辺が約23mmで, 中央部に1辺8mmの透をいれ, 四隅を円頭の鉈で留める仕組みとなっている。いずれも, 内外の縁辺部に沿って直線, 鉈間のこの間に2本の弧線をいれ, さらにタガネの刃先を斜めに当てて数条の短線を刻んでいる。1と2とは文様構成が異なり, 3は腐蝕が進んでいるが1に近いとみてよい。5は, 以上とはちがって梯子状文を刻みこんでおり, 6は, 端部に鉈孔が穿たれている。7~9には, よく似た構成の文様が刻まれている。ただし, 7には2ヵ所に鉈孔があるが, 薄片の8・9は, 1~7よりも大きな破片であるにもかかわらず鉈孔は存在しない。従って, 全体像は不明ではあるが, 8・9は共に垂下されたものかもしれない。

馬 具 (図版19, 第10図)

轡は, 素環の鏡板が2連の銜の外側につけられた実用品で, 銜の巾は14cm弱。引手の長さは, 左右で若干ちがう。鉈具は3個体分を図示したが, いずれも形態・大きさが異なる。鉈留金具のうち5は, 金は視認できないが緑青が一部で認められるので, 鉄地金銅張りともみてよい。



第 10 図 仙道 2 号墳出土馬具実測図 (1/3)

6 は、緑青は見当らないが、雲珠あるいは辻金具の一部であろう。1・4 は羨道部，5・6 は玄室内から出土した。

工 具

刀 子 (図版 19-2, 第 11 図 1~3)

いずれもが研ぎ減りのある実用品。1 のみが羨道部から出土。

武 器

鐔 (図版 20-1, 第 11 図 5)

83×60mm の倒卵形で、透のない鉄製。羨道部からの出土品。

両頭金具 (図版 20-1, 第 11 図 6~8)

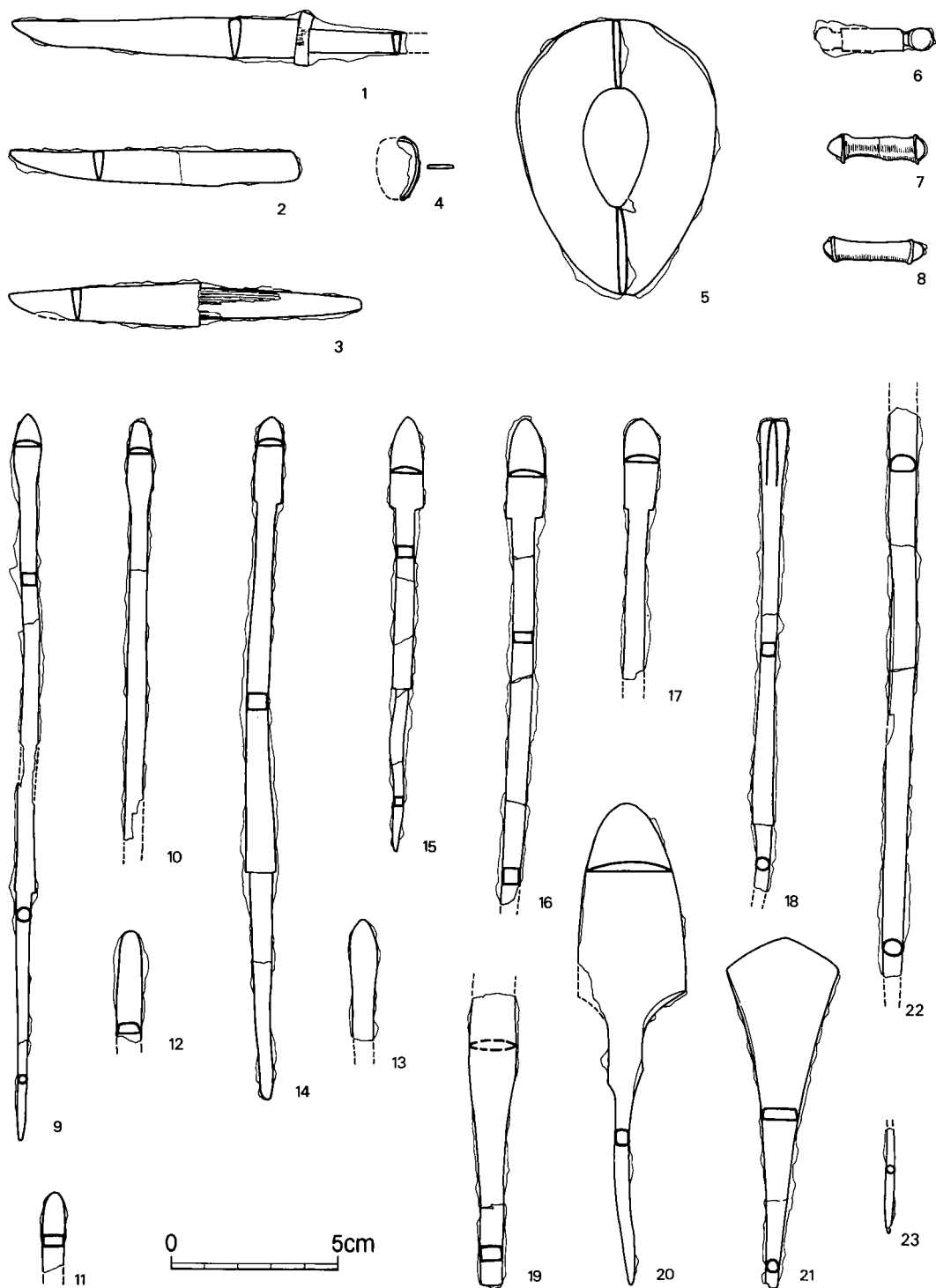
3 個。6 は玄室から，7・8 は羨道部から出土。外径 30mm，木質部巾 21~22mm。鉄製。

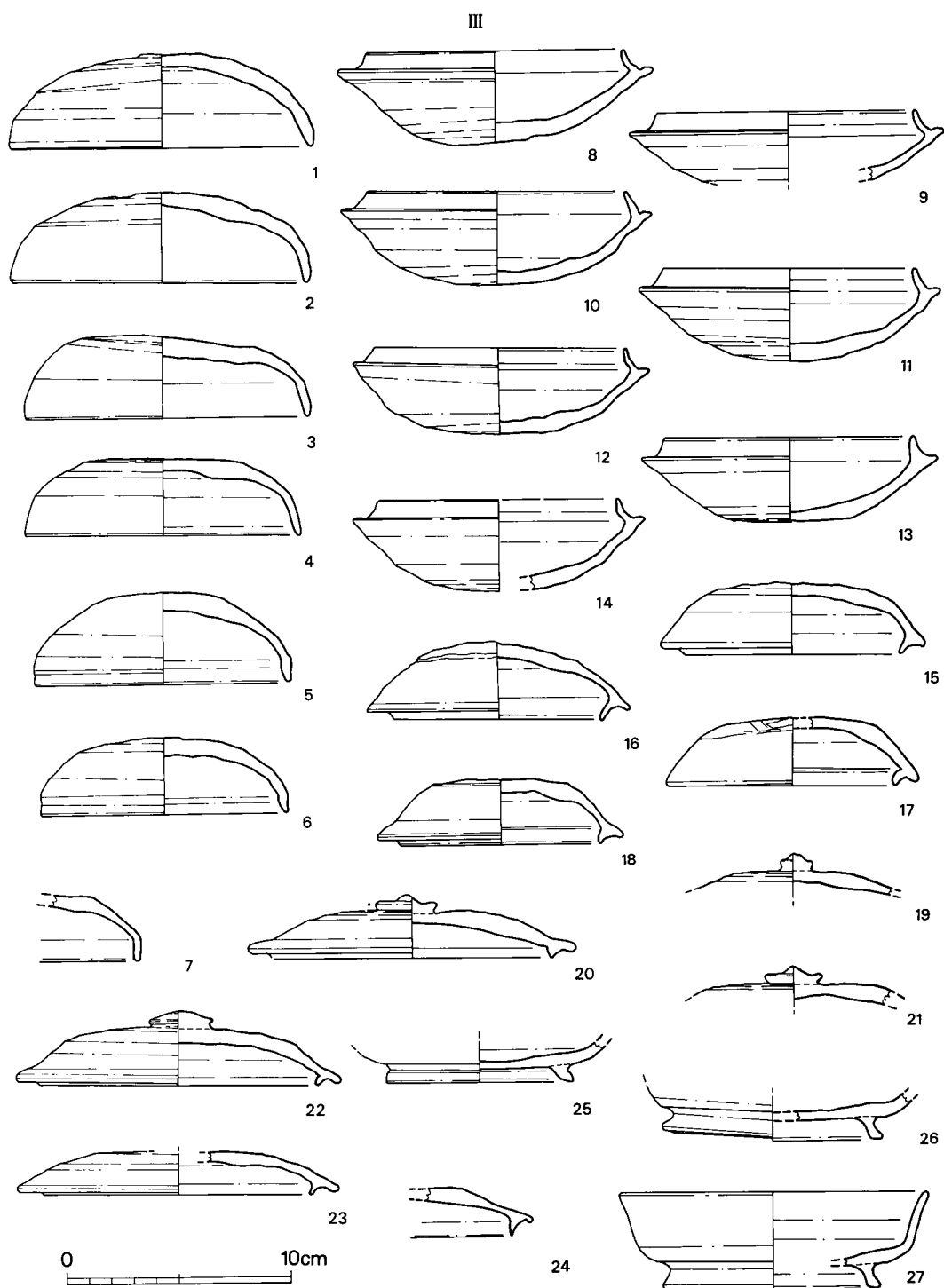
鉄 鏃 (図版 20-1, 第 11 図 9~23)

鋒の形状が剣形となる尖根系統に属するものが大部分で，平根系統が若干 (20・21) 含まれる。鋒の形態・全長などに差があり，図示した分でも 13 種に達している。完存する 9 の全長は 21.9cm，14 は 20.5cm と長い，15 は 13cm と短い。22 は鏃か否か不明。

第 11 図 仙道 2 号墳工具・武器実測図 (1/2) ▶

2. 仙道2号墳





第 12 图 仙道 2 号墳出土土器実測図 1 (1/3)

2. 仙道2号墳

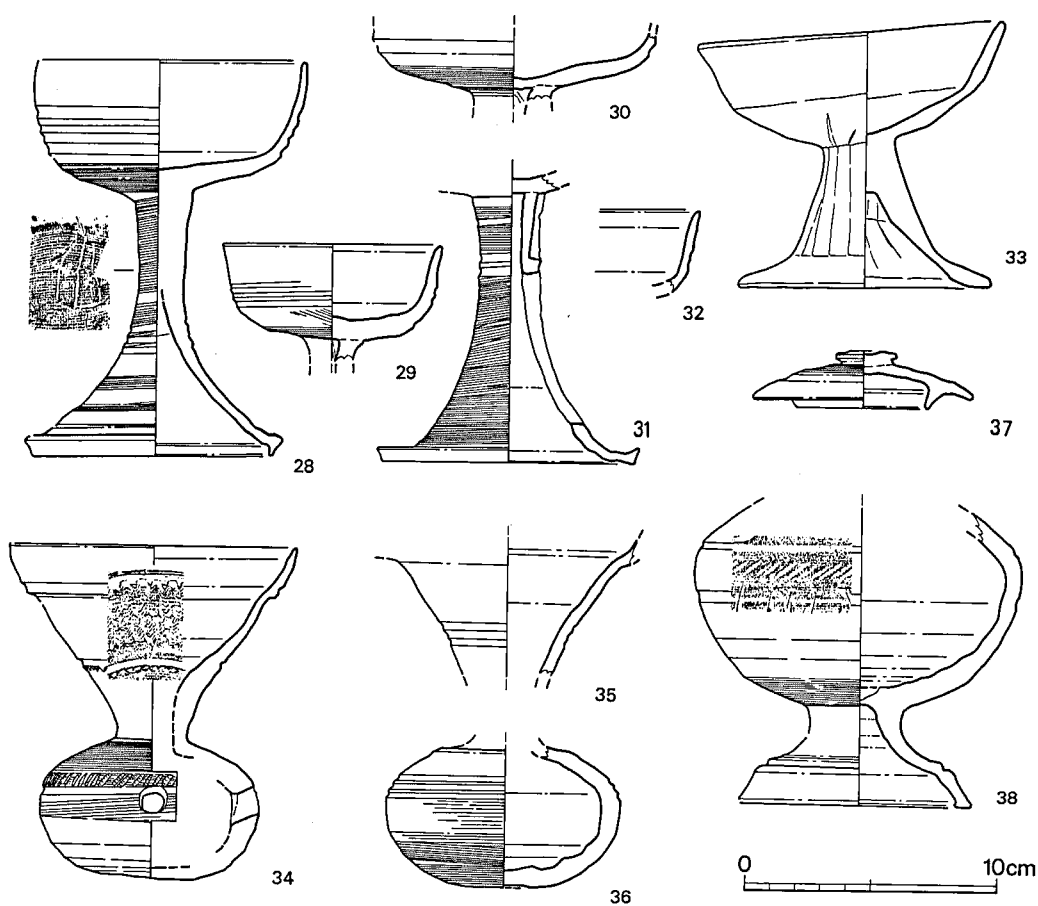
土 器 (図版23~25)

須恵器 (第12~17図)

杯 蓋

A～E類がある。A類(1・2)は、口径13.7~13.5cm、器高4.2~4cm。頂部の篋削りの範囲も広く、器形も整って出土例中ではもっとも古相をとどめている。1は、石室外出土例中唯一の完形品。B類(3・4)は、口径12.7~12.4cm、器高3.5~3.4cmとひとまわり小型。C類(5~7)は、口径11.5~11.1cmとさらに小型化しているが、その割に器高は3.6~3.5cmとBと変らない。D類(15~18)は、従来の杯身の形態をとるものの、外径は11.8~11cm、器高3.5~3cmと小型化が進んでいる。16の焼成は甘い。E類(19~24)は、器高3.4~2.9cmと扁平化が進んでいる。外径は、14.3~14.6cm。

なお、4・7~9号墳出土の杯蓋の記述にあたっても、上記2号墳の分類を使用する。後述



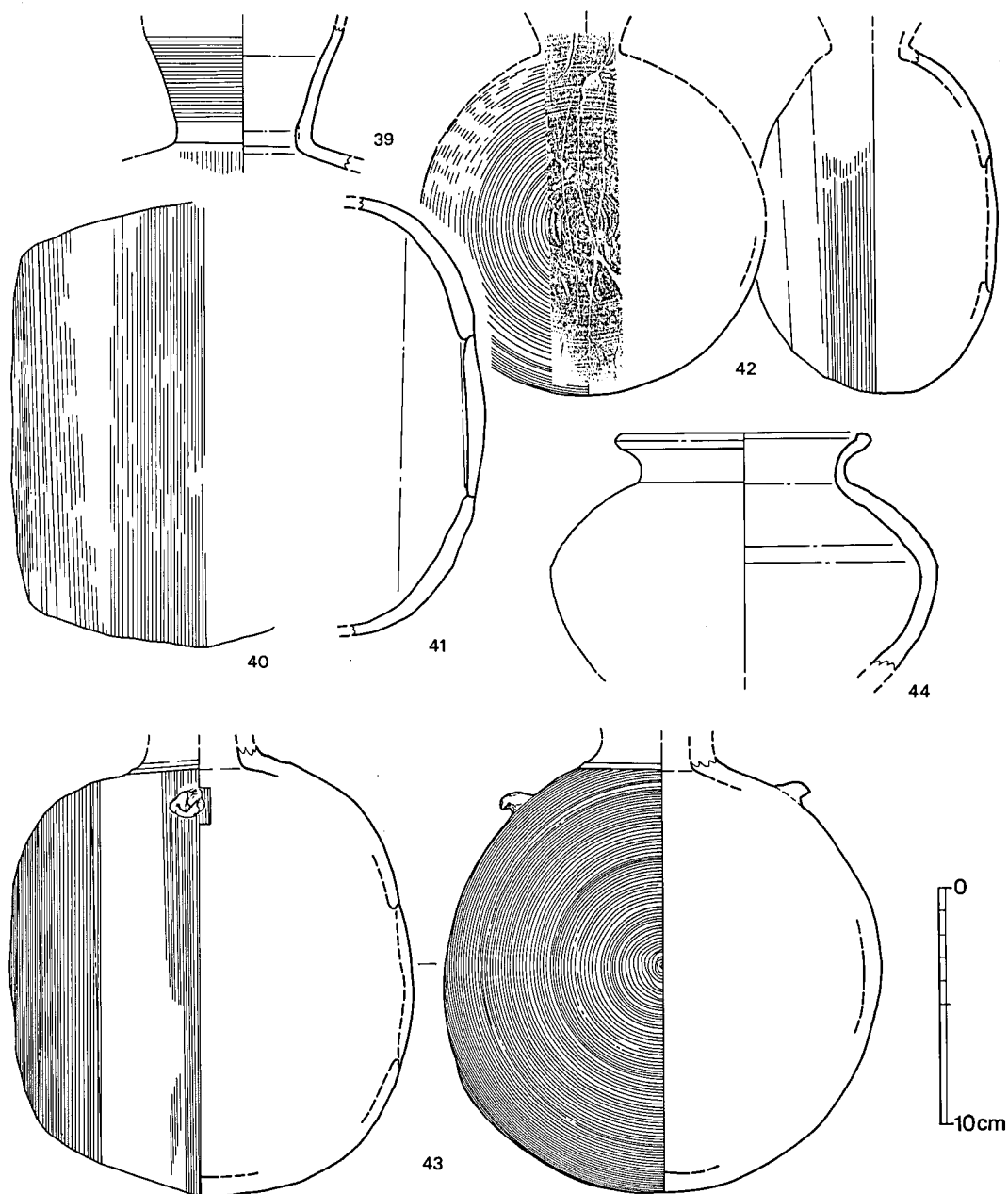
第 13 図 仙道2号墳出土土器実測図2 (1/3)

III

する杯身についても同様である。

杯 身

A・D 2 類がある。A 類（8～14）は、外径14.1～13.1cm、器高4.3～3.8cmで、杯蓋のA・



第 14 図 仙道 2 号墳出土土器実測図 3 (1/3)

2. 仙道2号墳

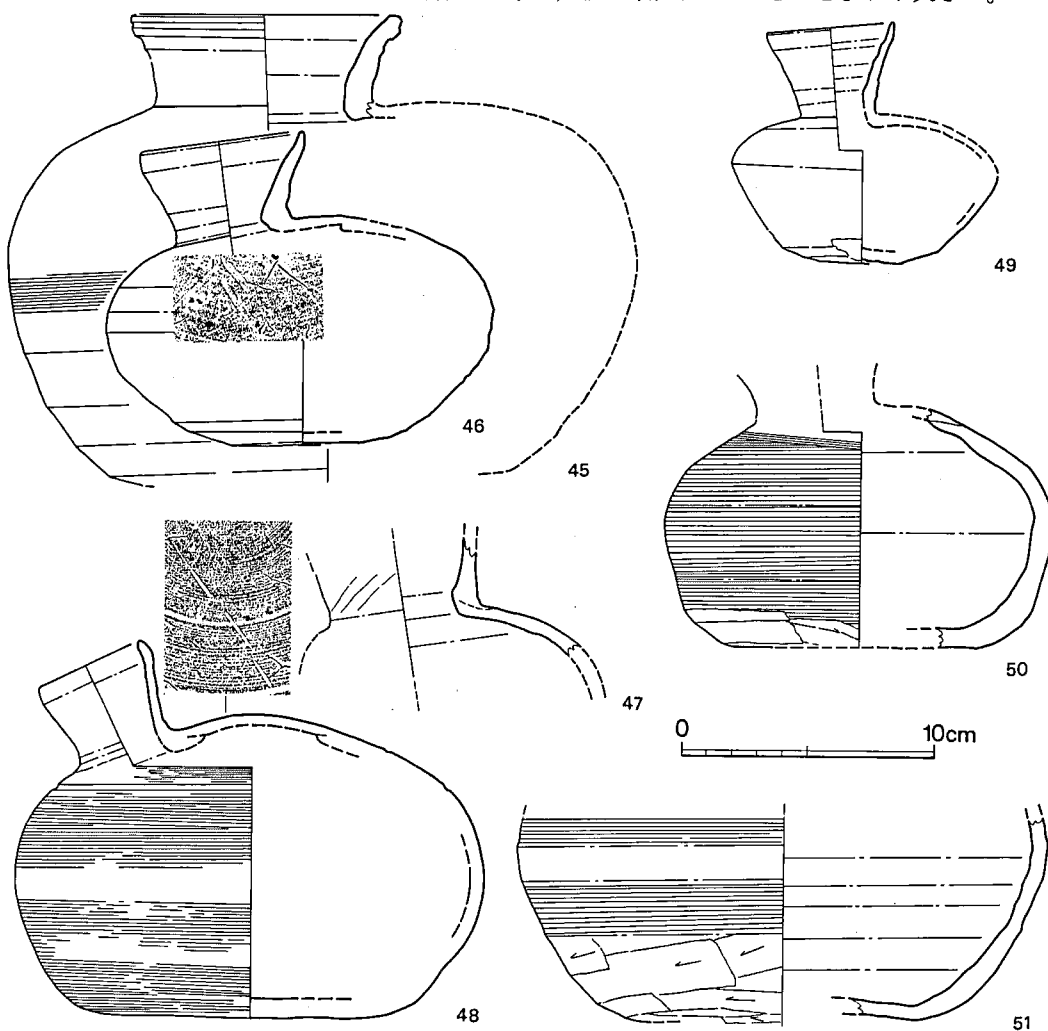
B両類とセット関係になる。D類(25~27)は高台付で、27は復元口径13.7cm, 器高4.3cm。杯蓋のE類とセット関係になる。

高 杯

透のはいるもの(31)と、これのない手(28)とがある。28は、口径10.9cm, 器高15.6cm, 底径10.3cmで、脚部器表に篋記号を付し、同内面にも1条の曲線を稍深く刻む。29は、羨道部から採取されており、口径8.7cmとひとまわり小型。

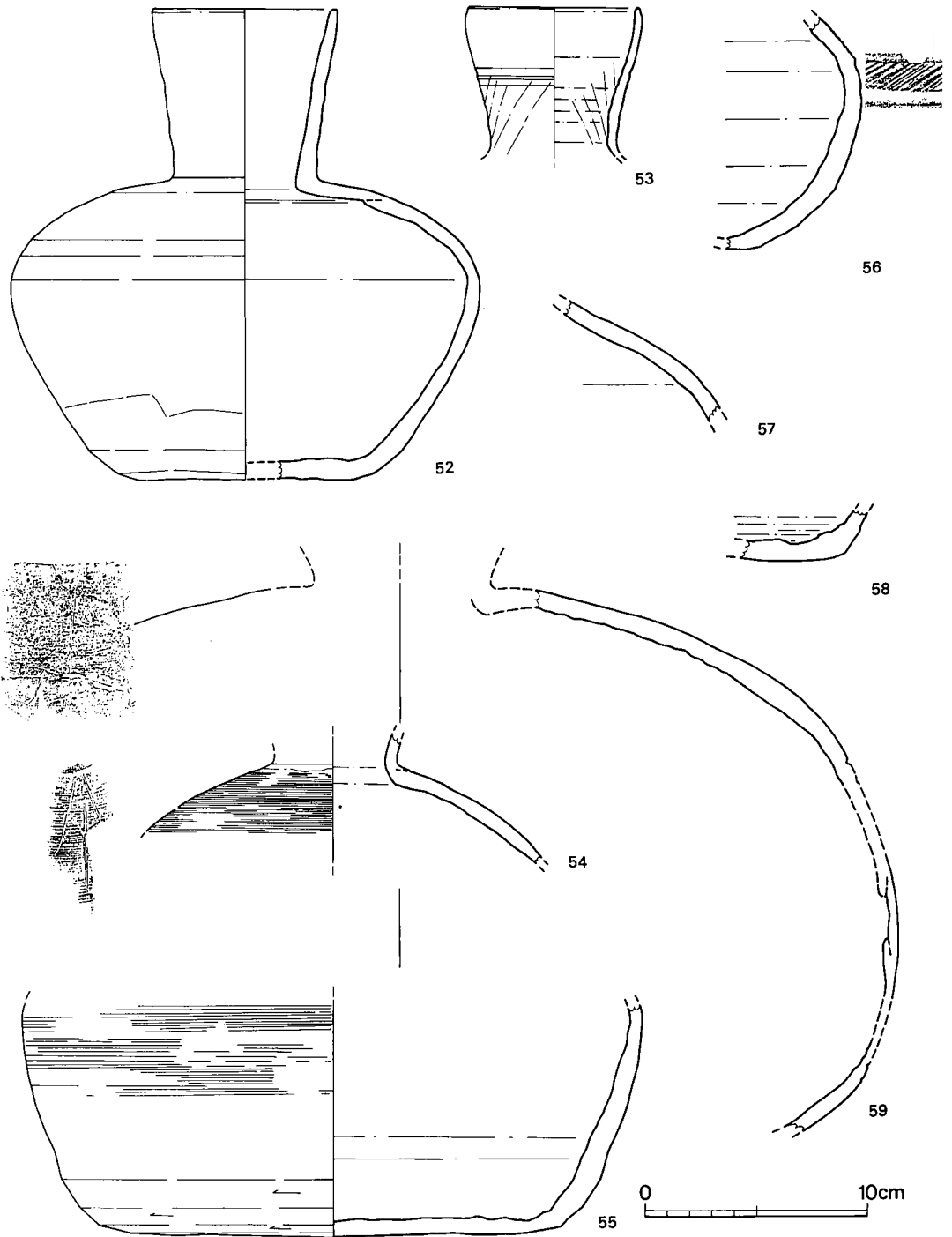
甕

34は、口径11.4cm, 器高13.3cm, 胴部最大径8.7cm。頸部の沈線は1条。35は頸部のみで、沈線は2条。胴部のみ36は、34と同様肉が厚く、復元最大径9.3cmとひとまわり大きい。



第 15 図 仙道2号墳出土土器実測図4 (1/3)

III



第 16 図 仙道 2 号墳出土土器実測図 5 (1/3)

2. 仙道2号墳

台付壺

38は、頸部を欠く。胴部最大径13cm、台部底径9.2cm。胴部下半の器表に篋記号。

広口壺

44は、復元口径10.8cm、同胴部最大径16.3cm。前庭部右半からの出土。

提 瓶

39～41は同一個体か。43のみが肩部に鉤状の吊手を付し、胴部径18.4cm、同巾17cmと球形に近い。70は、羨道部左側壁沿いから出土し、口頸部上半を欠くが、以下は完存する。頸部と胴部との接合部には、櫛歯文を付す。

平 瓶

48は、70と同様羨道部左壁沿いからの出土品で完形。口頸部が斜めにとりつけられ、体部のふくらみもあり、より古相をとどめている。口径4.8cm、器高14.9cm、胴部最大径18.6cm。これ以外は、体部がより扁平となり、頸部の立ち上りも全体として直立に近くなっている。大型（45・51・55）、中型（46・50）、小型（49）がある。46は、口径6.6cm、器高12.7cm、胴部最大径15.3cmで、口頸部付け根近くの体部器表に2×1cmの粘土塊を付している。49は、前庭部右半からの出土品。口径5cm、器高9.6cm、胴部最大径10.5cm。

直口壺

52は、茶色で焼成不良。前庭部左右両側から採取した破片が接合した。復元口径8.1cm、器高21.2cm、胴部最大径21cm。53は、口縁部が若干内反し、口径8cm。54のカキ目調整を施した肩部には、篋記号が付されている。

横 瓶

59は、復元最大巾45cm。焼成は稍甘い。

撮付蓋

37は、外径8.7cm、器高2.3cm。口径7cm弱の台付壺などの蓋であろう。

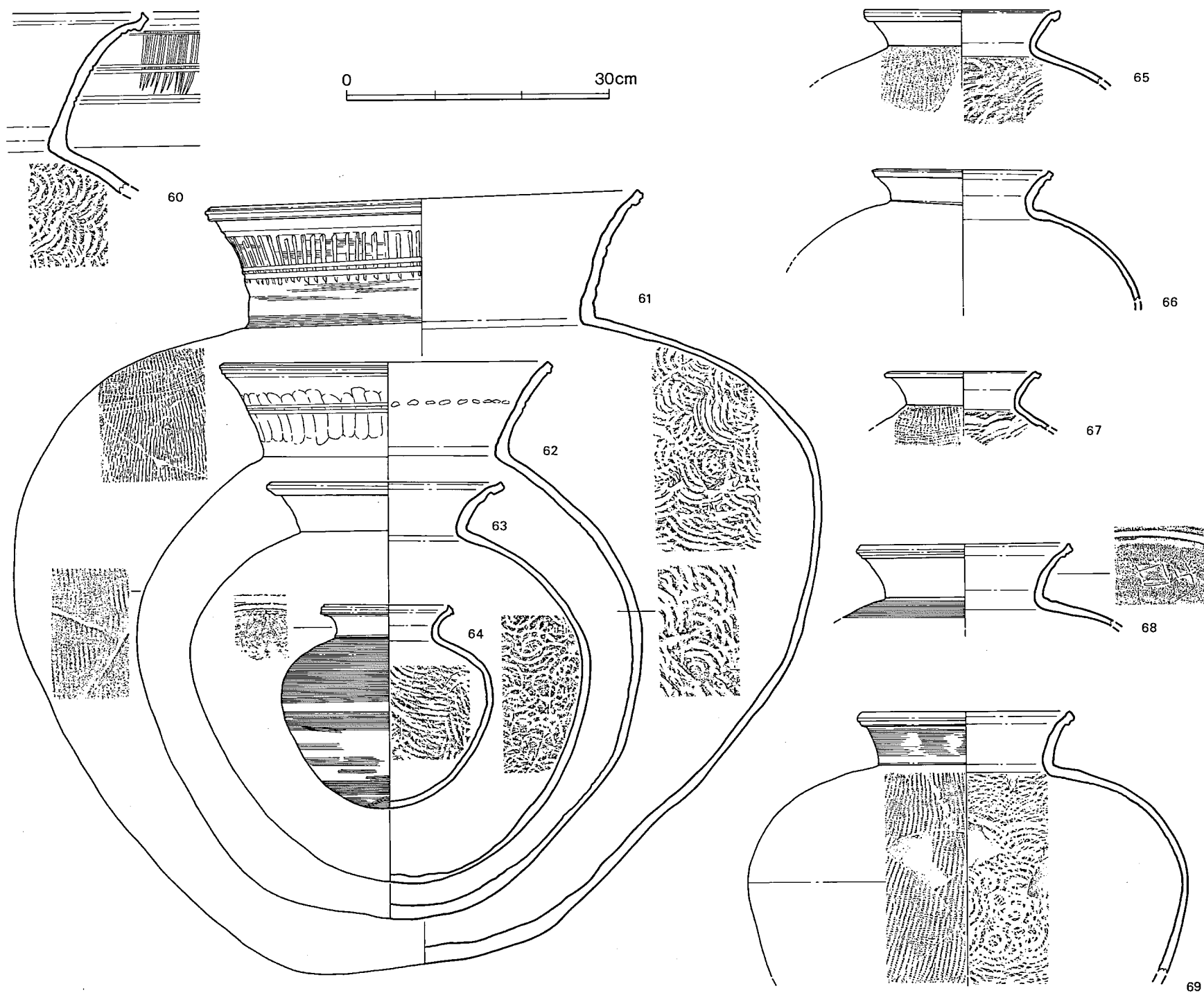
甕

口縁の形状では、67が最も後出的。口径により、20cm以下の小甕（64・67）、40cm以下の中甕（63・65・66・68・69）と、それ以上の大甕（60・61）とに分けられ、なんと上記の全てが前庭部左半から出土した。61は、口径50cm、器高87.7cm、胴部最大径92cm。寸詰り気味で著しく他の甕と形態が異なるが、これは成形時に胎土の重みで歪みを生じたせいと、意図したものではない。60は、口縁部の形状・施文からみて61よりも古い様相を示し、かつ、これとほぼ同大か。62は焼成が稍甘い。63・68は頸部器表に篋記号を付す。

土師器（第13図）

全体に量が少ないのが特徴。

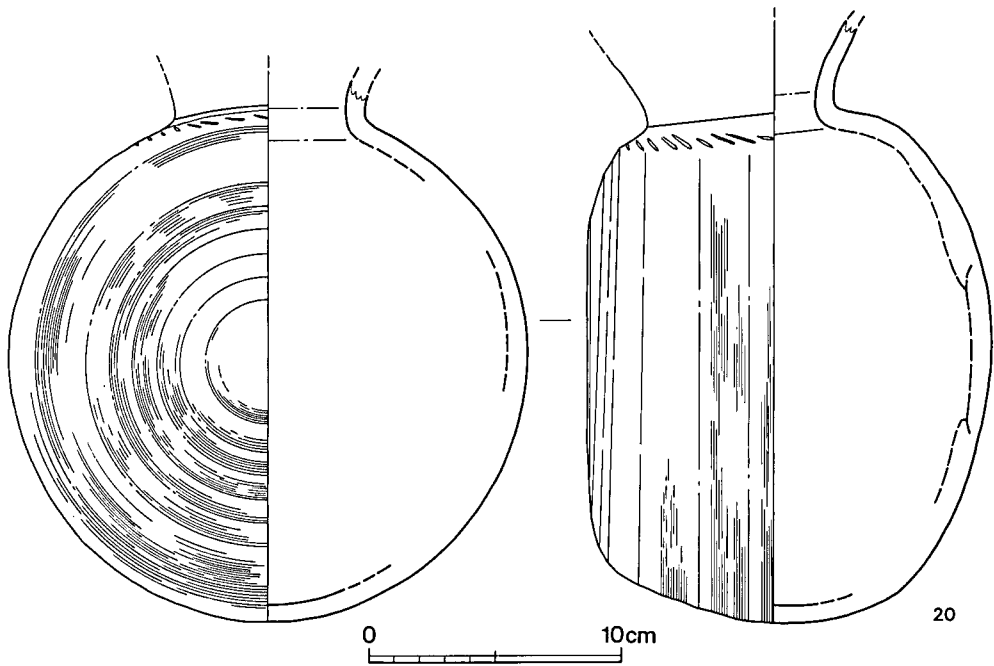
高 杯



第 17 图 仙道 2 号墳出土土器実測図 6 (1/6)

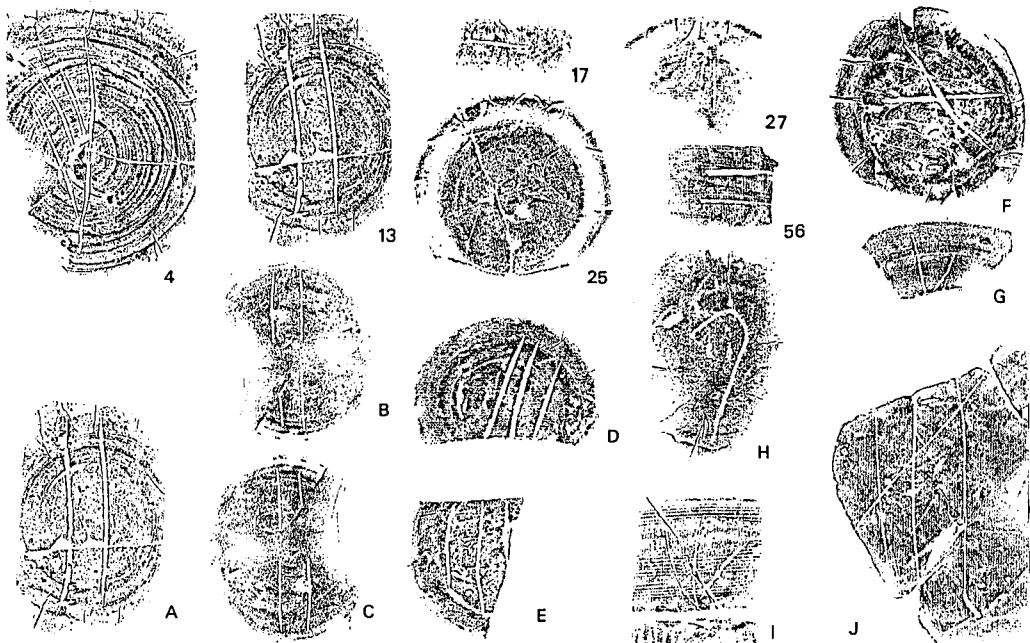
III

33は、羨道部から出土。杯部は正接せずに稍傾く。口径12.2cm，器高10.2cm，底径10.1cm。
脚内部を抉るように削っているが，全体に厚手。



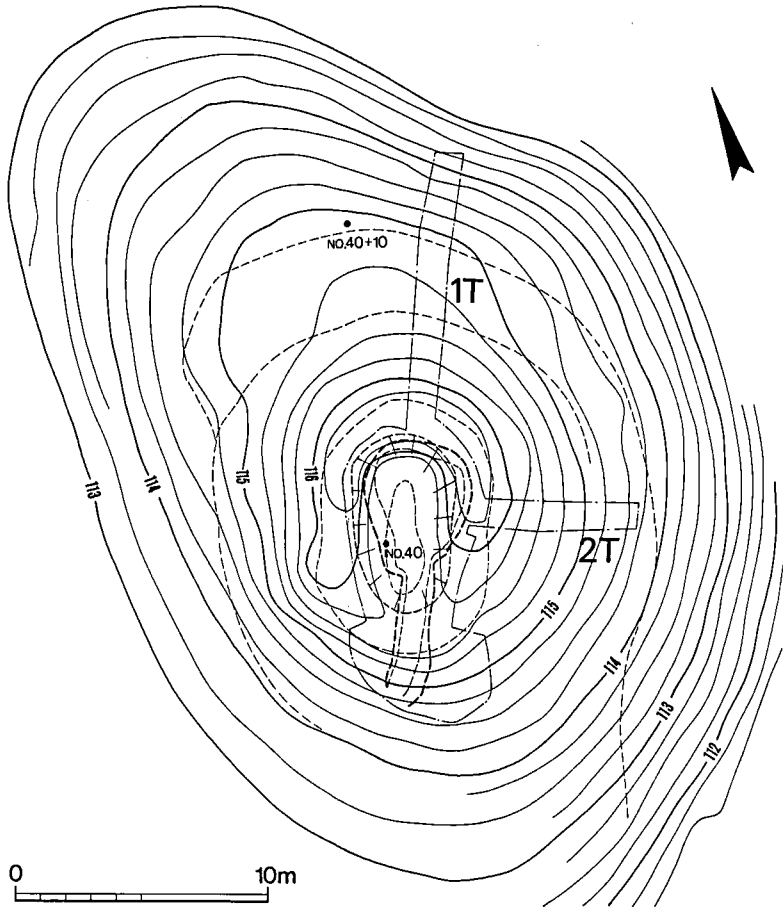
第 18 図 仙道 2 号墳出土土器実測図 2 (1/3)

第 19 図 仙道 2 号墳出土土器の筥記号拓影集成 (1/3)



3. 仙道4号墳

(1) 墳丘 (第20・21図)

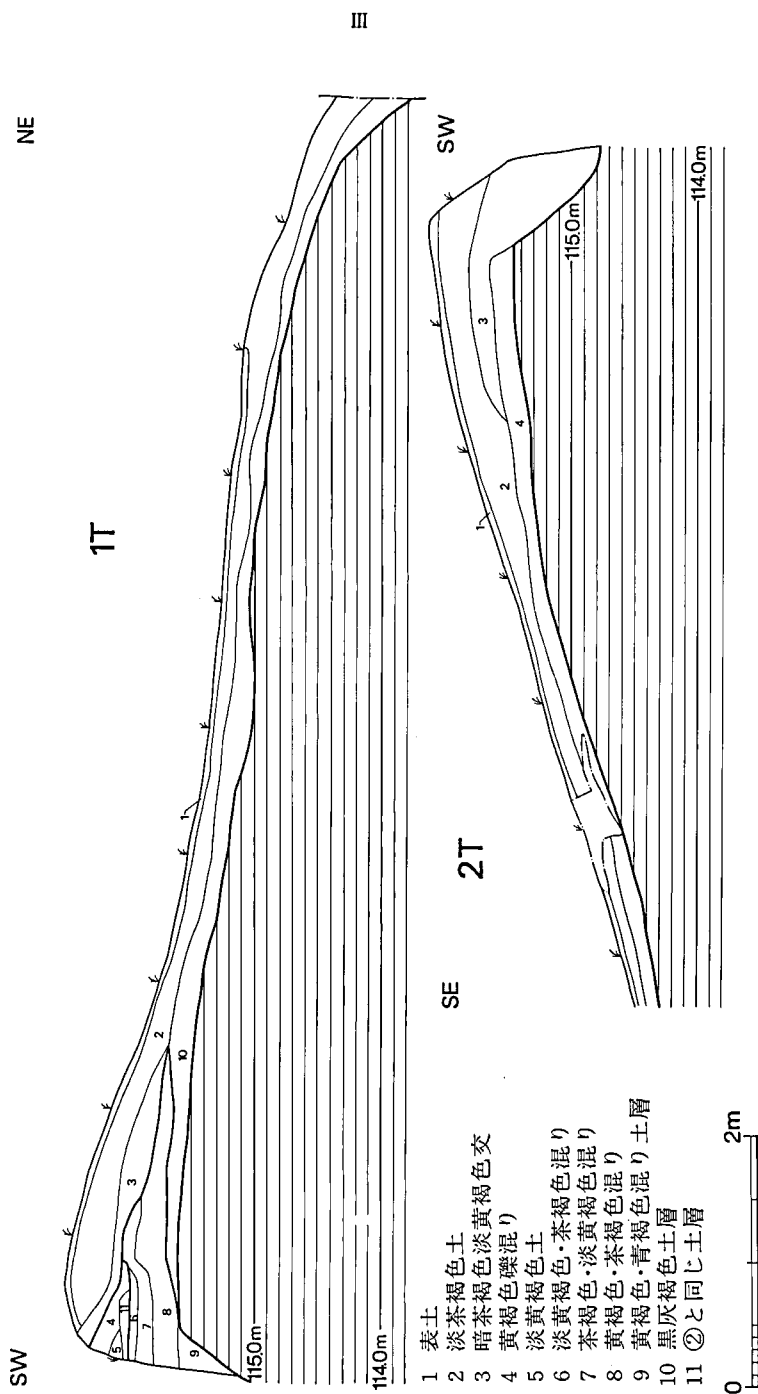


第 20 図 仙道4号墳墳丘測量図 (1/300)

現状では麓に一番近い2号墳と谷最奥部にたまる5～9号墳との間の尾根筋に、これらをつなぐかのように、3号墳と4号墳とが飛び石的に所在する。

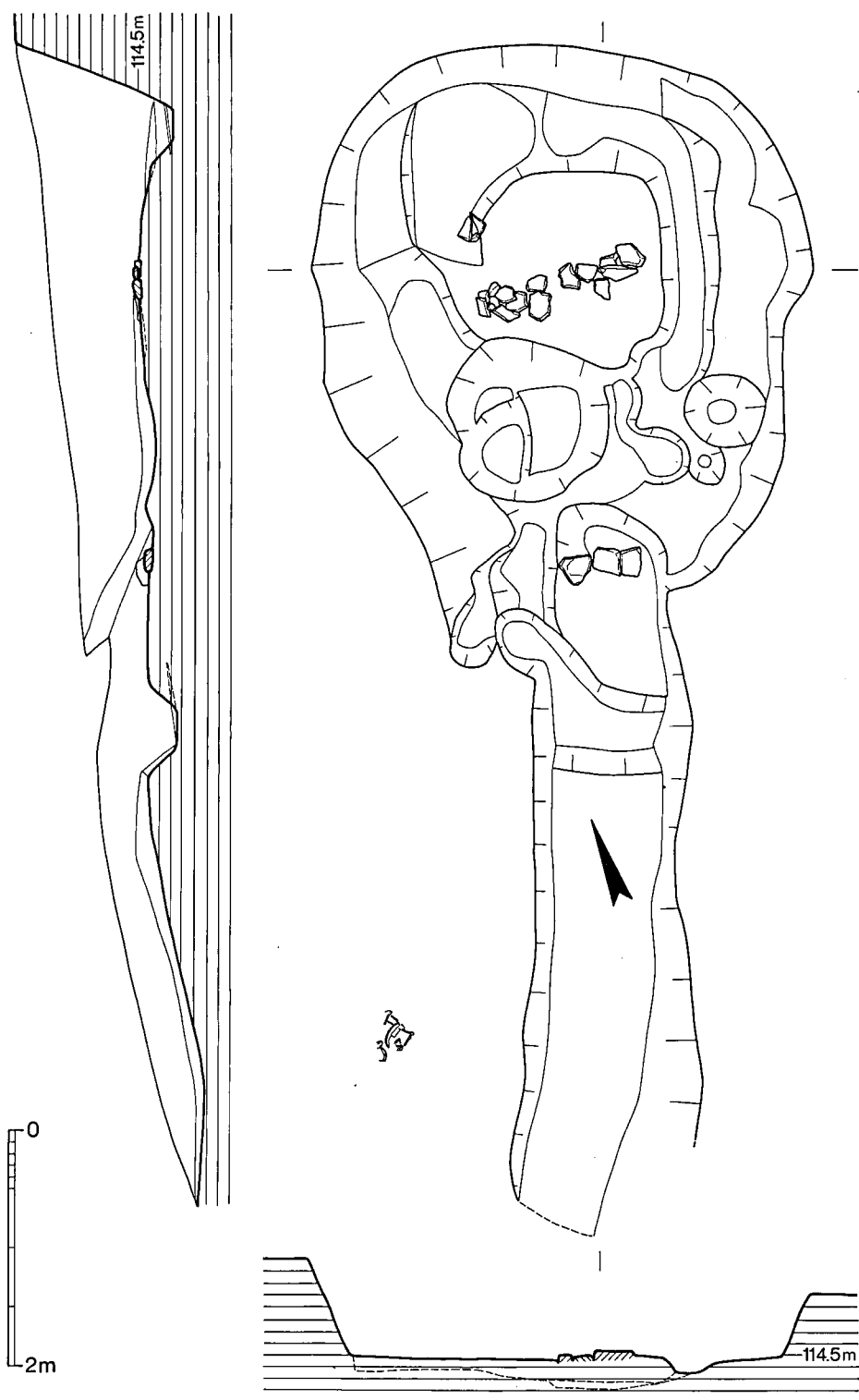
伐採後のみかけの規模は、径17～18m、北側からの高さ約1.2mで、裾をとらえにくいさほど高くはみえないものであった。北側の尾根筋にはテラス状の広がりがあるが、所以は不明。墳頂部は陥没していた。

墳丘の盛土は、表土を除去した後に行っているが、その範囲は、東側(2T)で墓墳肩から1.2m、北側(1T)で2.3m程度にすぎない。裾部を確定しにくいのが、当初の径は11m内外と思われる。



第 21 図 仙道4号墳丘断面実測図 (1/60)

3. 仙道4号墳



(2) 石室 (第22図)

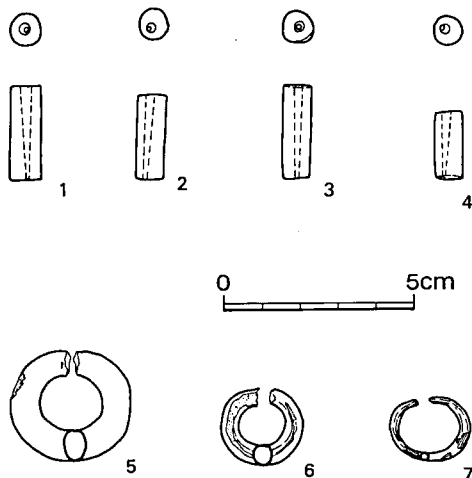
地山を穿った墓墳底に築かれた南西に開口する横穴式石室であるが、床石の一部を残すのみで、他の石材は全て抜き取られ持ち去られている。全長4 m弱の単室とみてよく、玄室は2.3×1.7 m前後の内法と推定される。羨道部には、地山を掘り割った墓道が長さ約5 m以上にわたって続いているが、先端は未確認。

(3) 遺物出土状態

石室内では、原位置を保つ出土品は無論皆無である。石室外では、墳丘裾部とみてよい墓道左肩から西側へ約1 m離れた地点の表土直下から、須恵器の杯蓋(1)、高杯?(16)、平瓶?(25)、壺(26)、甕(33・34)、土師器の脚付小壺(27・28)が採取された。なお西方にも土器片が埋没しているとみられたが、用地外のため調査は断念した。上記以外の土器は、全て墓道堆積土中から出土したものである。4号墳から採取された土器は全てが破片で、完形品は含まれていない。

(4) 出土遺物

装身具 (図版20-2, 第22図)



耳環

3対分6個のうち、3個が採取されている。5は32×19mmで、太身。6は22×20mmと小型。以上は共に金環。7は銅胎のみで、現存径は21×17mm。

管玉

4個体。いずれも碧玉製で、片側からの穿孔。

土器 (図版26)

須恵器 (第23・24図)

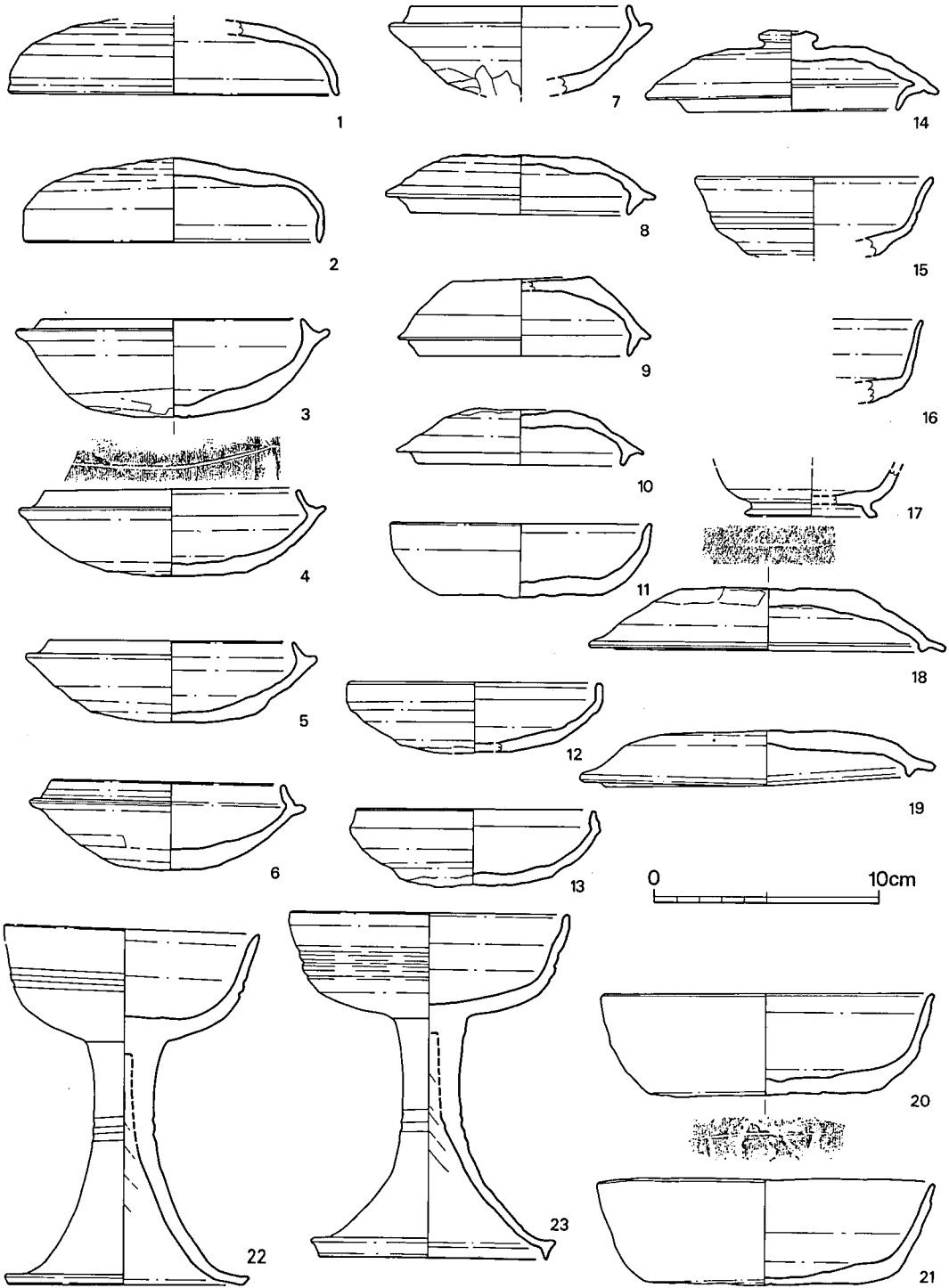
杯蓋

1と2とはB類に相当し、後者の口径は13.4 cm, 器高3.8 cm。8~10はD類で、口径12.1~

▲ 第23図 仙道4号墳出土装身具実測図 (1/2)

◀ 第22図 仙道4号墳石室実測図 (1/60)

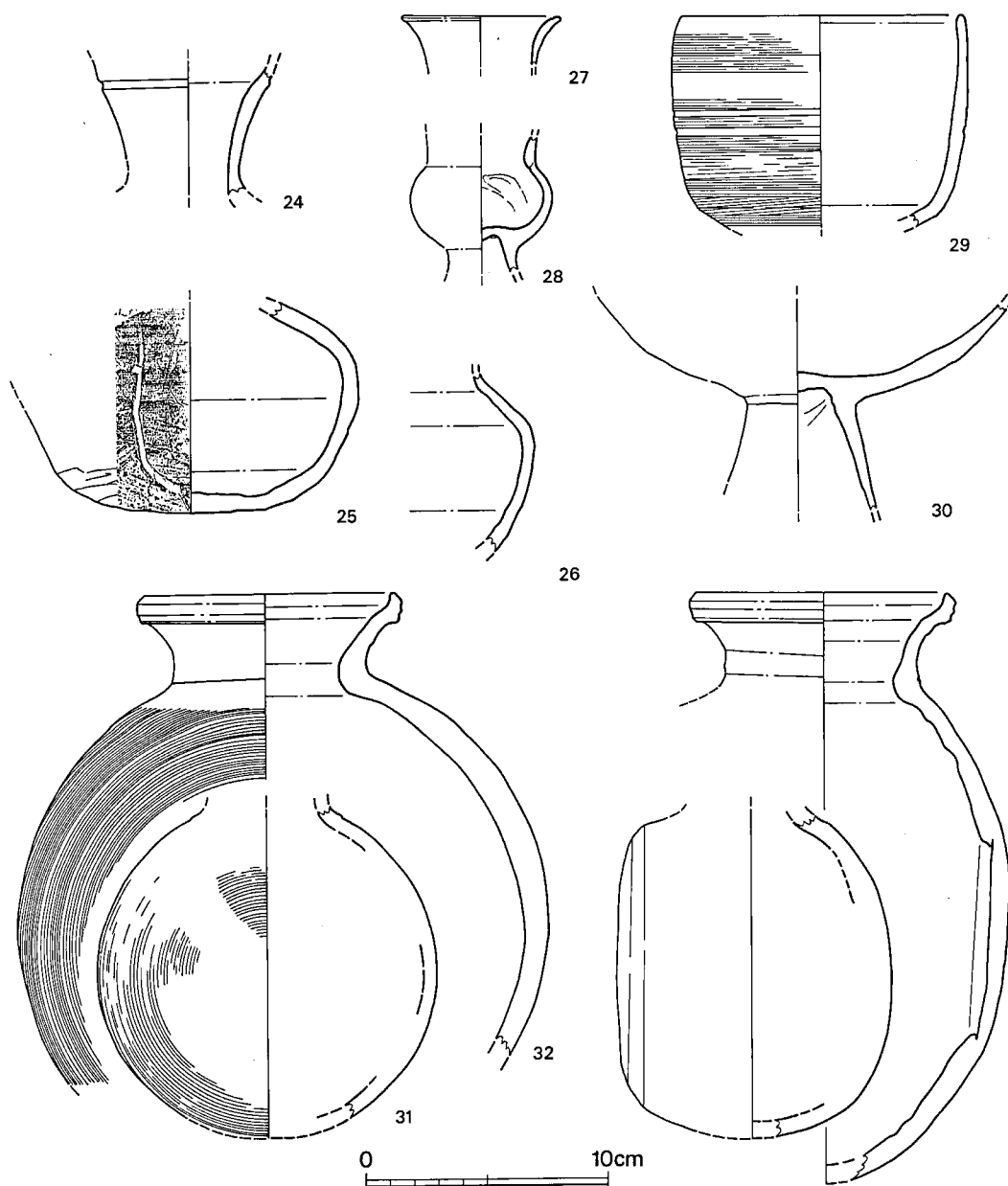
3. 仙道4号墳



第 24 图 仙道4号墳出土土器実測図1 (1/3)

III

11cm, 器高3.4~2.5cm。撮のつく14は, 外径13cm, 器高3.6cmで, 稍大ぶりだが台付壺類の蓋であろう。18・19は撮をつけていないので, 新たにF類とする。外径15.9cm, 器高2.7~2.5cm。共に極めて軟質で, 後述する杯身のE類と本来はセット関係にあるが, 採取品はいずれもが別揃い。



第 25 図 仙道 4 号墳出土土器実測図 2 (1/3)

3. 仙道4号墳

杯 身

3～7は、口径14～11.8cm、器高4.4～3.7cmと法量に差があるが、A類とする。従来の杯蓋の形態をとる11～13は、杯蓋D類と対応するC類の身である。高台を付す17は、D類。E類の20・21は、焼成甚だ不良で蓋のF類に対応することは先述した。底部は未調整で、篋起し痕が渦巻状に残る。口径15.1～14.9cm、器高4.6～4.5cm。

高 杯

22は、復元口径11.3cm、器高15.5cm、脚底径10.8cm。23は、復元口径12.2cm、器高15.3cm、復元底径10cm。共に、杯部下半に沈線をめぐらし、焼成良好であるが、脚端部の形状が異なる。

台付椀

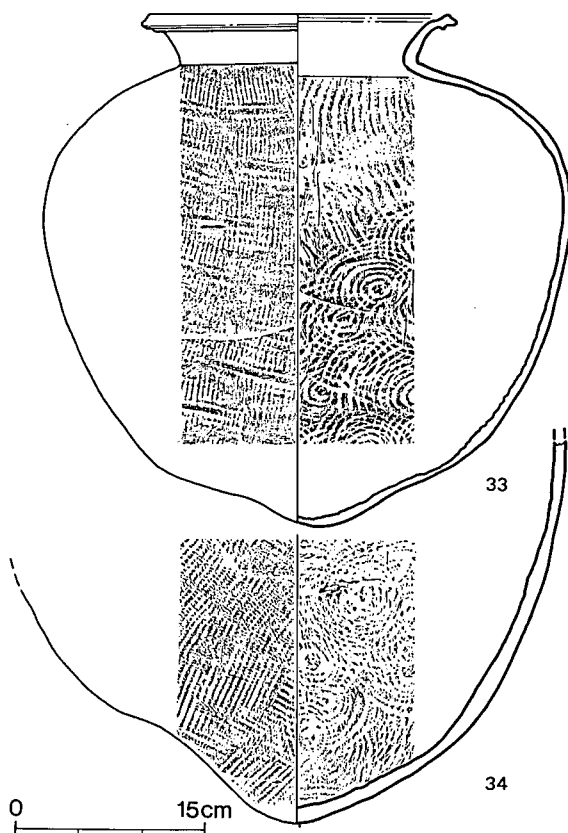
29は、口径11.7cm、深さ約9cmで、中程にて条の沈線をめぐらし、全体をカキ目調整。段のある低目の台がつけられていたとみてよい。

提 瓶

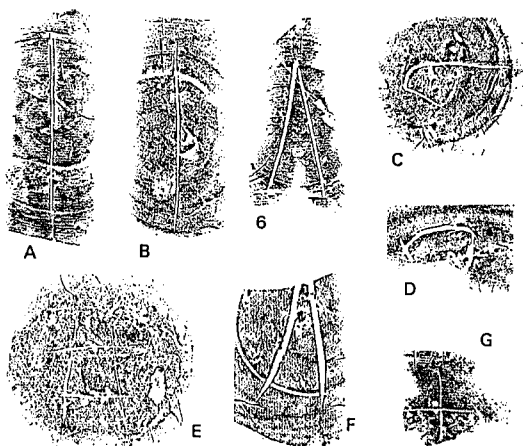
31は、胴部最大径14cm、同高さ11.4cmで、口頸部を欠く。32は、赤桃色を呈して焼成は甚だ甘い。口径11cm、胴部最大径22で、吊り手はつかない。

甕

共に墓道肩部以西の墳丘南裾から出土。33は、口径25cm、器高40.7cm、胴部最大径42cmの中甕で、底部は歪む。34は、体部大半のみだが、前者よりもひとまわり大型。

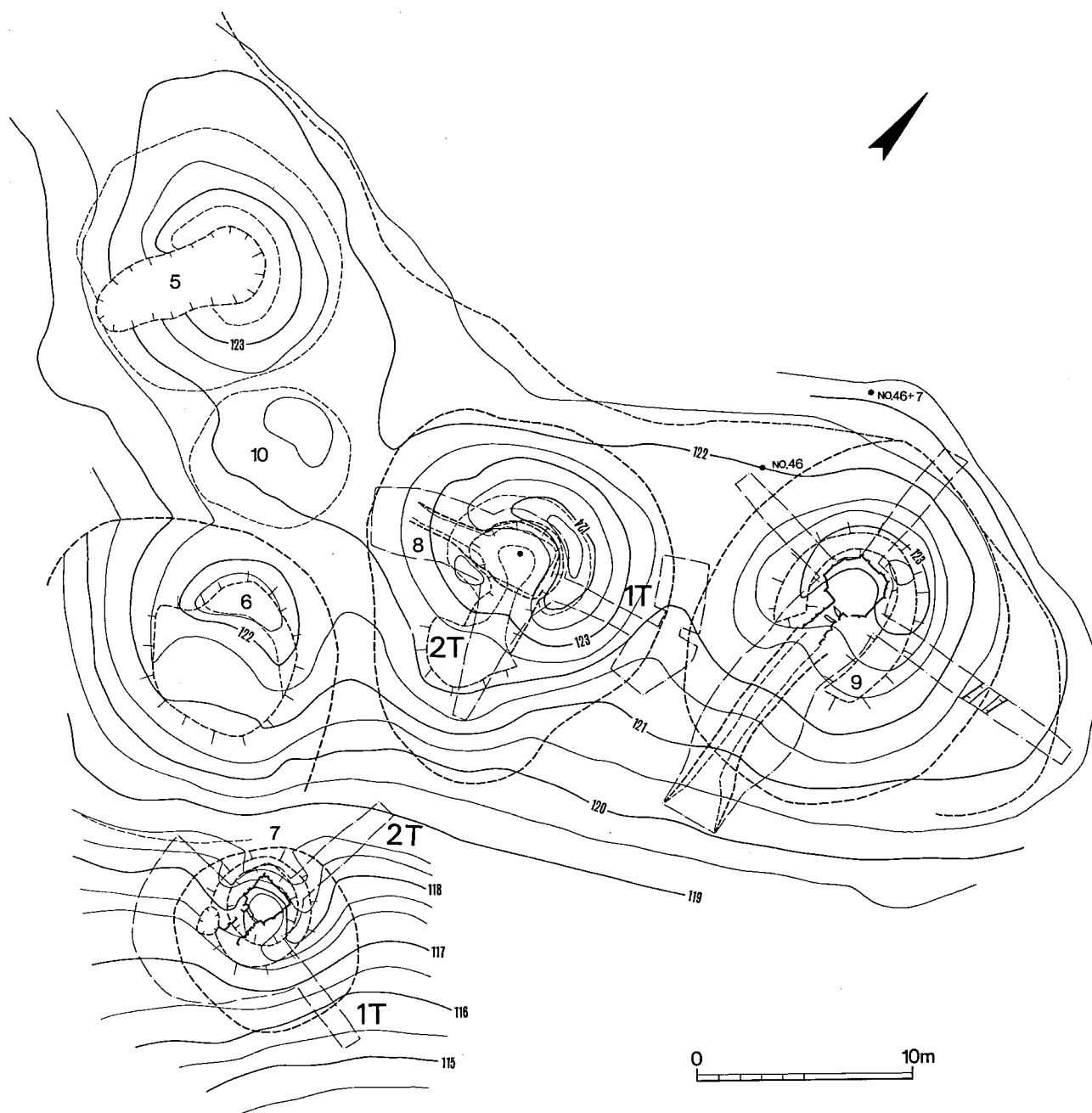


第 26 図 仙道4号墳出土土器実測図3 (1/6)



第 27 図

仙道4号墳出土土器の篋記号拓影集成 (1/3)



第 28 図 仙道 5 ~ 10号墳墳丘測量図 (1/300)

III

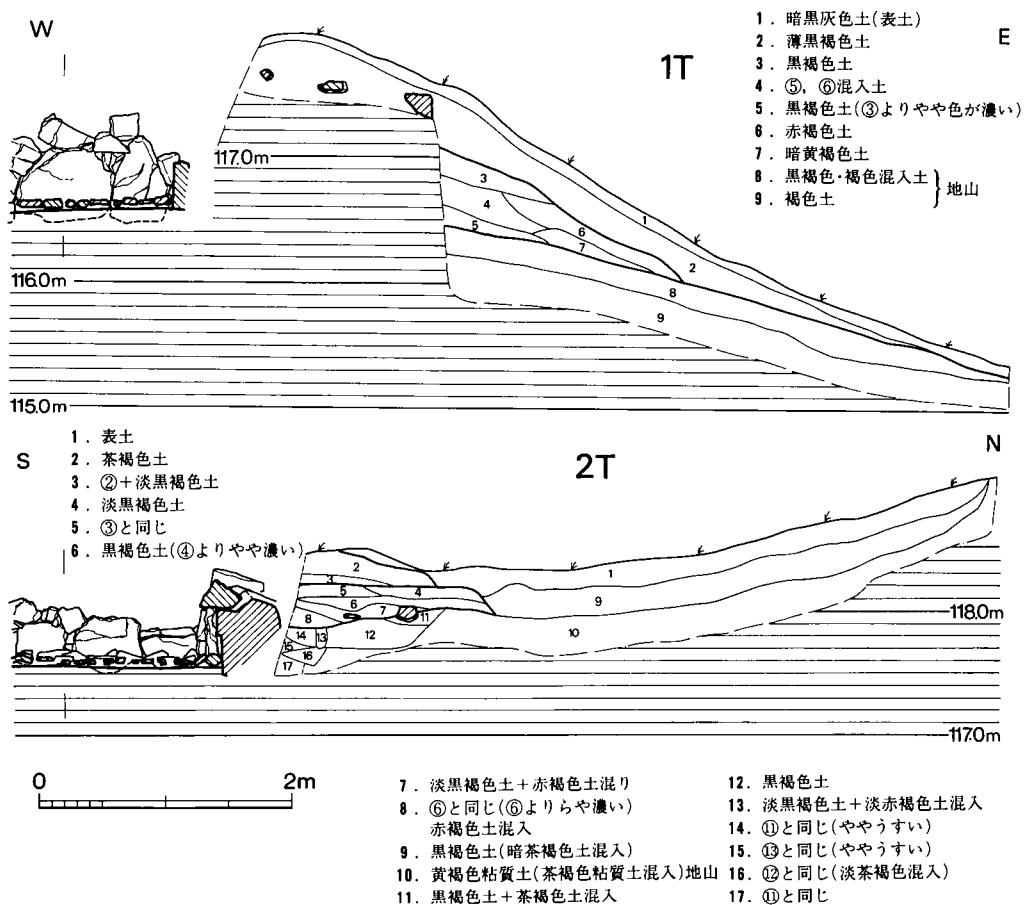
土師器

27と28とは同一個体か。小型の台付壺で、口径6.7cm、胴部最大径5.9cm。30は、脚付壺とみられるが類例が乏しい。全体に薄手で、特に脚部は不安を覚える程である。

4. 仙道7号墳

(1) 墳丘 (第28・29図)

仙道5～10号墳は、谷の最奥部にひとかたまりとなって群在する。標高122mの尾根筋に、西から東へと5・10・8・9号墳と並び、6・7号両墳はこれより少し下った斜面に位置して

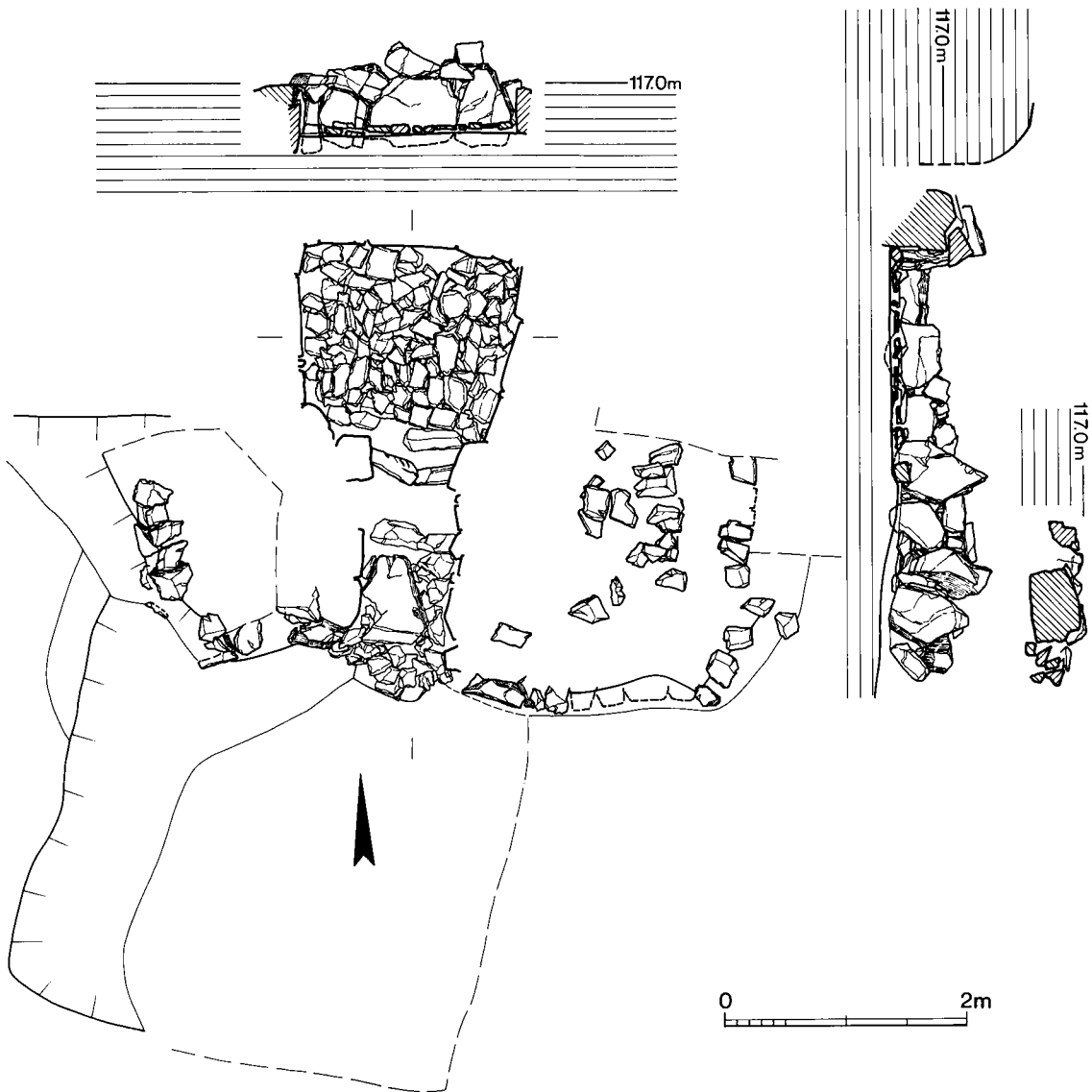


第29図 仙道7号墳墳丘断面図(1/60)

4. 仙道7号墳

いる。5・6・10号の3墳は用地外にあり、うち5・6号両墳には盗掘による陥没部分があるので、共に横穴式石室とみてよい。両者の間の僅かな地表の盛りあがりを、一応10号墳とした。

さて、7号墳のみかけの規模は、径 8×9 m、南側からみた高さ約2.5 mであった。盛土の範囲は、北側——奥壁背面ではほぼみかけの裾と一致する。東側では、石室中軸線から約4.9 mまでが緻密に盛られている。失われた天井石の厚味をも考慮すると、これを裾部とすると斜面の角度が急すぎるので、中軸線から東へ6.8 m付近までが地業範囲と想定される。



第 30 図 仙道7号墳石室実測図 (1/60)

III

盛土に際しては、2号墳と同様に土止め用の列石がめぐらされている。羨道部側壁最先端からは、開口部の修景を兼ねた石積が左右に続いており、これは石室中軸線から東西に各2m延びた地点から北側へと稍直線的に折れ曲っている。東側では、0.8m離れてさらに1列が設けられており、これら内外2列の石組みは2m以上続くが、北端は未確認。西側での長さは、1.5mと東のそれよりも短い。東西で仕様が異なるのは、地形からみて当然と思われる。

なお、十分な調査をしてはいないが、北から西にかけては、周溝状に地山を削り出して整えていた。

以上から、本墳の東西径は約9.3m、南北径は約6mと推定され、正円とはならない。

(2) 石室 (第30図)

ほぼ南に開口する全長3.55mの単室の横穴式石室であるが、腰石以下しか現存しない。地山を掘り割った墓壇底に築かれているが、墳丘の西に偏在——地業範囲の中心には位置しない。

玄室は、奥壁部巾1.8m、前壁部巾1.25m、左壁長1.57m、右壁長1.25mと、全体として横長の台形プラン。仕切石は、通常とは異なり2石が「く」の字状に置かれているが、奥壁から1.8m内外と全長の1/2に当る位置である点は前述の2号墳と同様である。基部に大き目の石材を用いているが、埋めこみは概して浅い。羨道部の巾は0.8mで、外に向って床は少しく下傾する。

玄室の床面にのみ割石を敷くが、左袖石周辺のみが二重となっていた(第29図でドットを付す)。閉塞は、仕切り石との間に0.3~0.4m空間をはさんで行っている。

開口部前面は、西側を削り落して墓道というより前庭部状の空間が確保されている。

(3) 遺物出土状態

盗掘を受けており、玄室内からの出土品は皆無に近く、僅かに、前述の左袖石近くの二重となっていた敷石の間から杯蓋片(10)1個を採取したにとどまる。図示した土器は、全て開口部前面から採取されている。

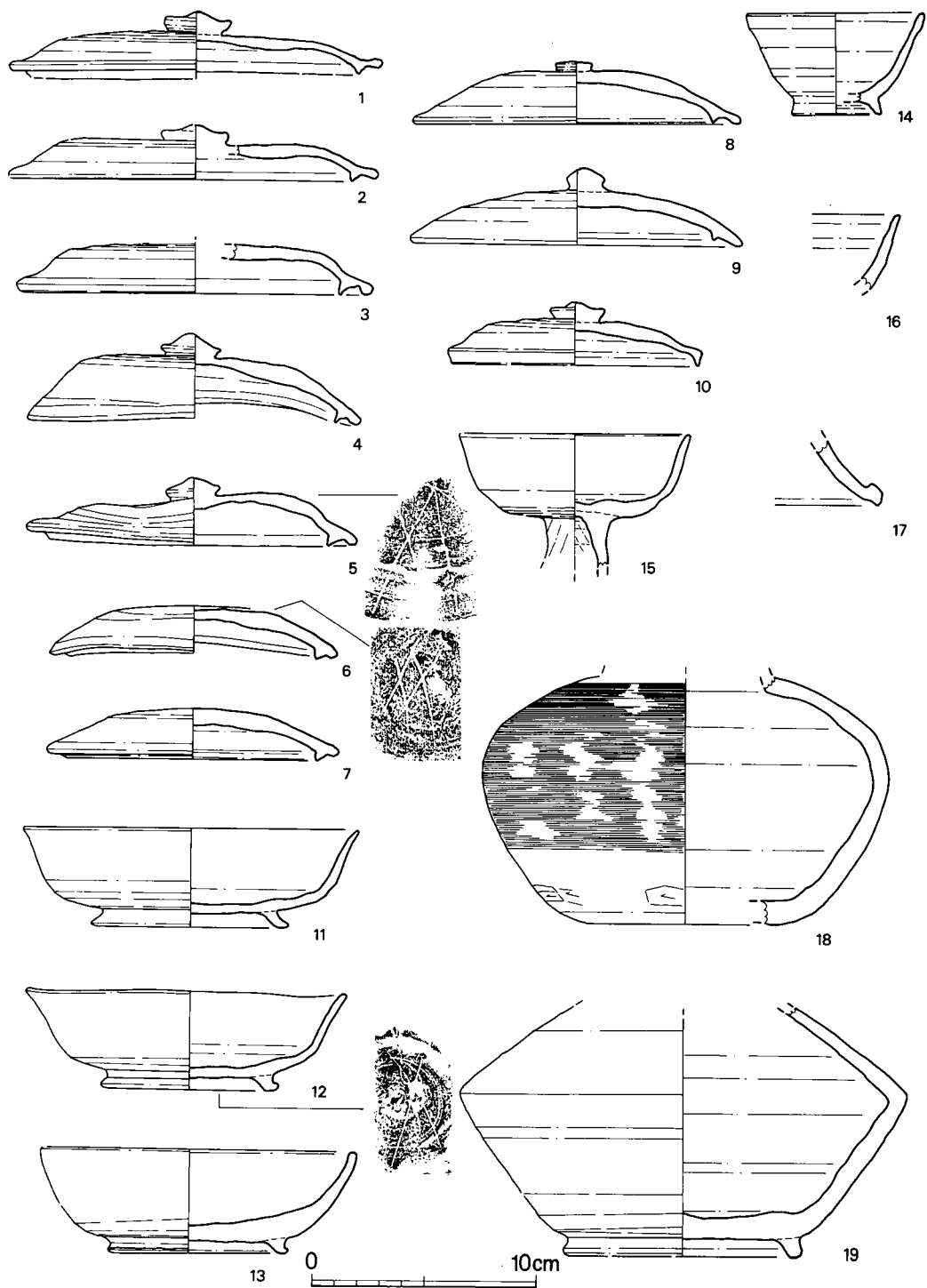
(4) 出土遺物

土器 (図版26)

須恵器 (第31・32図)

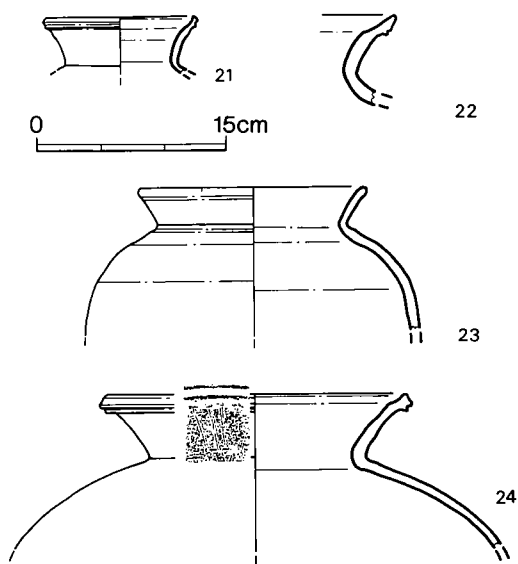
完形品はない。

4. 仙道7号墳



第 31 図 仙道 7 号墳出土土器実測図 1 (1/3)

III



第 32 図 仙道 7 号墳出土土器実測図 3 (1/6)

高 杯

15の口径は10.3cm。

壺

18は、胴部最大径18.1cm。19は、高台付の長頸壺で、胴部最大径は20cm。

甕

21は復元口径12.3cm、23は18.2cm、24は24.9cm。いずれも頸部への施文はない。

杯 蓋

D類の6・7は、口径13cm、器高2.1～2.3cmで、扁平化が一段と進みE類に近い。撮のつくE類の1～5・8は、外径16.5～14.7cm、器高3～2.8cm。9のかえりは目立たず、より新しい。玄室から採取された10は最も後出型式で、G類とした。外径11.3cm、器高2.8cm。

杯 身

全て高台付のD類で、口径15～14.1cm、器高4.6～4.4cm。11・12は口縁が外反して薄手だが、13は体部の下半が特に厚く口縁部も内彎する。14は、歪みが著しいが、口径8cm、器高4.5cmのぐい呑形。

5. 仙道 8 号墳

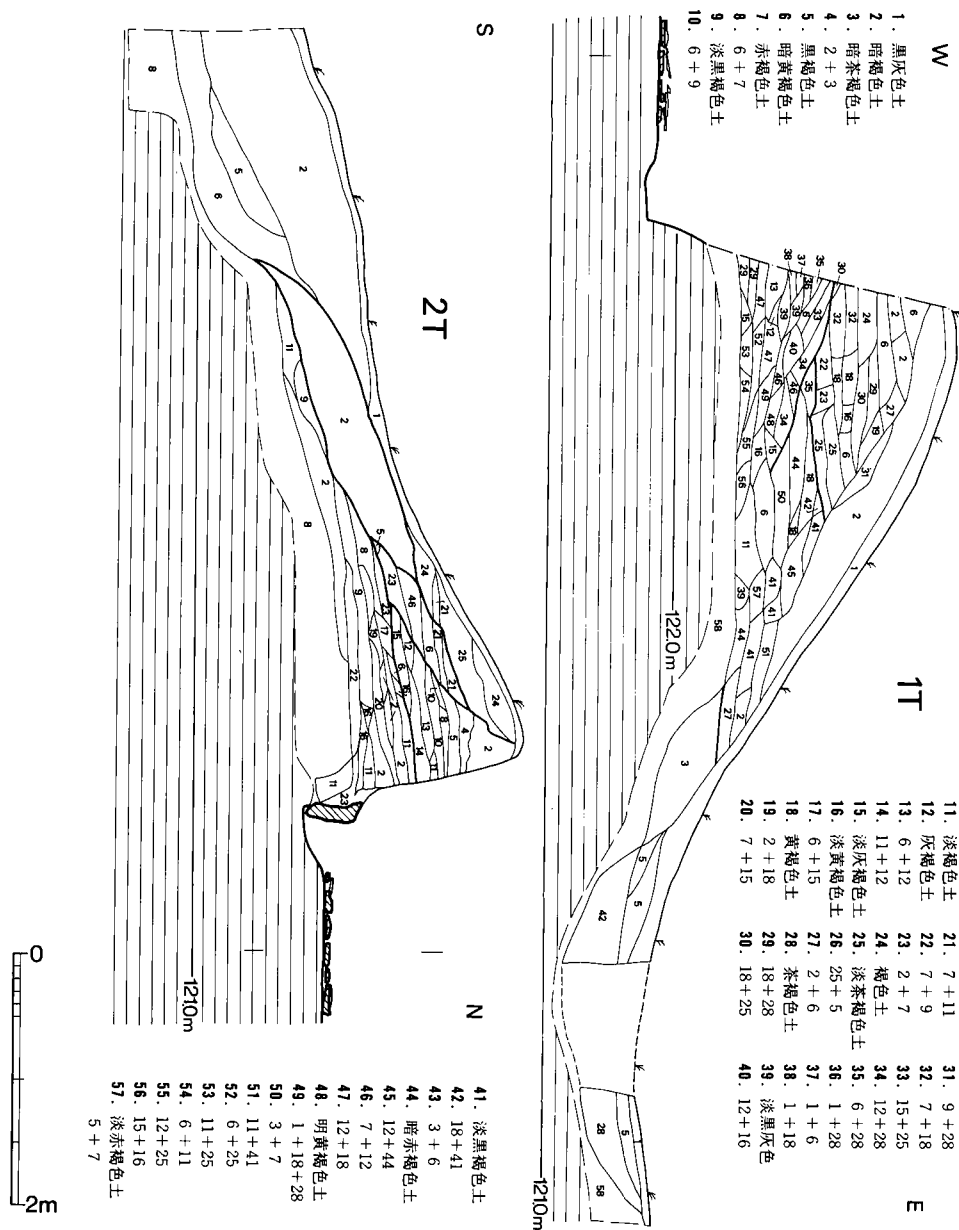
(1) 墳 丘 (第27・33図)

5号墳と9号墳との間に位置する。墳頂部は陥没していたものの、東側からのみかけの高さは2cm、南側からでは4.3mもあり、周辺の6基中では最もボリュームがある。東西径は14.5mで、南側が張り出しているが、これは石室の石材を後世搬出した際にかき出された土砂が堆積したものである。

墳丘は全て盛土からなる。表土を除いた後、丹念に土砂を盛っており、緻密な作業ぶりは群中では図抜けている。最も厚い所で、1.6m強が現存する。東西両側とも周溝状に掘り下げられており、その内径は約12.2m。南北径は、石室がほぼ中央にあると仮定すると約11mとなる。

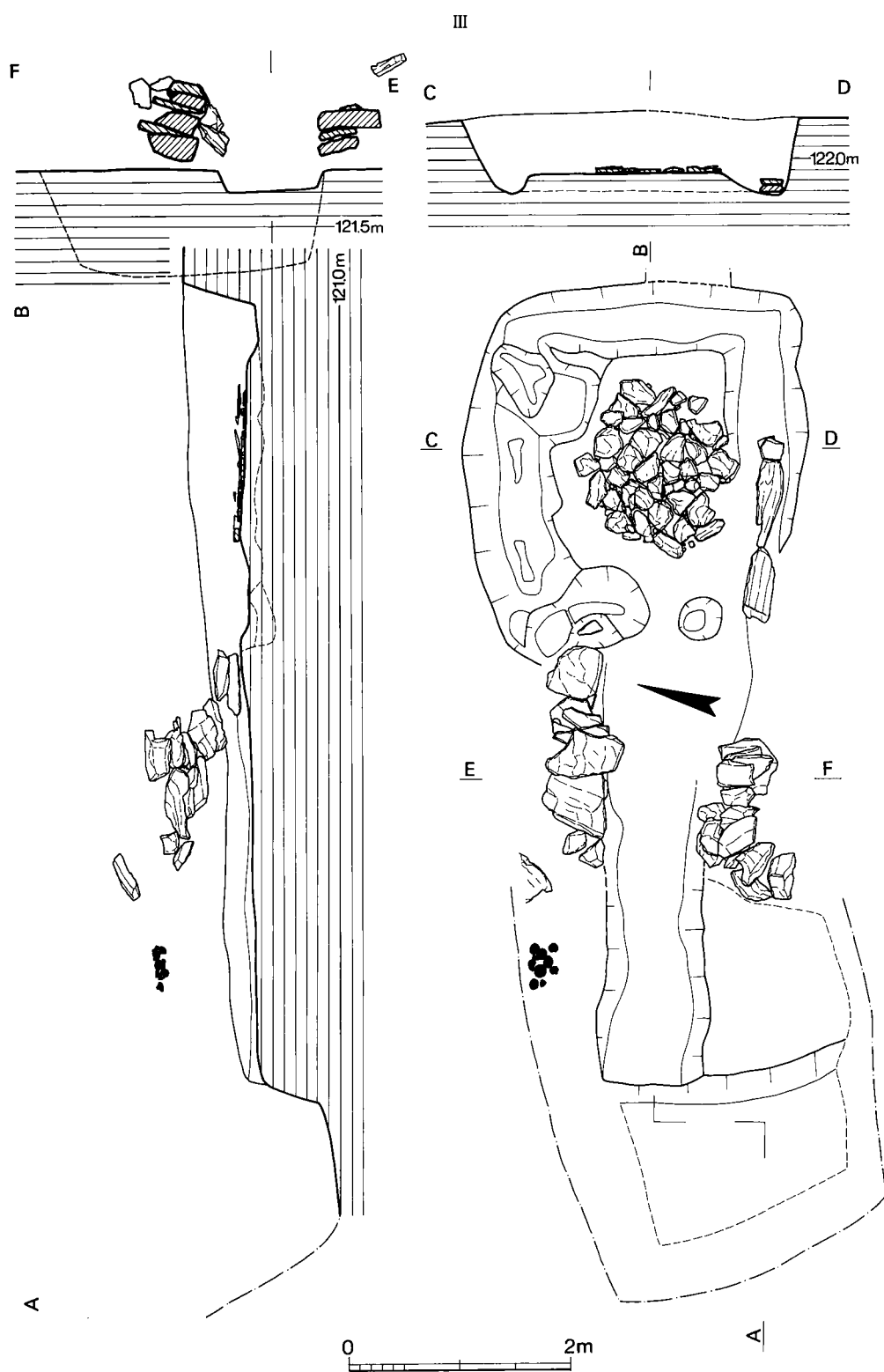
5. 仙道8号墳

周溝は、前述のように尾根筋のみを断ち切ったもので、東側で巾2.7m、深さ0.7m前後。西側の深さは0.7mだが、西側の立ち上り部は用地外にあるため未確認。



▲ 第 33 図 仙道8号墳横丘断面実測図 (1/60)

第 34 図 仙道8号墳石室実測図 (1/60) ►



(2) 石室 (第34図)

南西に開口する横穴式石室で、玄室の床石および右壁基部および羨道側壁を部分的に残すのみで、大破している。地山を約0.5 m掘り下げた墓壇底に築かれており、単室と推定される。

玄室は、長さ約2.5 m、巾約2 mの長方形プランとみられ、これに地山を巾1 m、深さ約20 cm程掘りくぼめた浅い切通しが、緩やかに下降しながら周溝へと続いている。この玄室寄の肩部に羨道側壁が積み上げられており、これ以前は墓道となる。

(3) 遺物出土状況

石室内では、原位置を保っての出土品は皆無。一方石室外では、本墳でも、墳丘裾部それも奥壁に向って左側（北西側）の墓道肩近くから一群の土器が採取された。墳丘盛土内か否かは見極め難いが、比較的浅い所からの出土しており、墳丘上にすえ置かれたとの印象の方が強い。出土状況は、須恵器の杯蓋2個（5・6）と杯身（9）との計3個が、杯蓋（7）と杯身（8）とが、各々身として重ねられた状態にあり、至近には短頸壺（25）と土師器の高杯群が添えられていた。これらのうち、須恵器の蓋杯類は全て完形であり、短頸壺も口縁の一部を欠くが少くとも割られた形跡がない点が注意された。もともと脆い土師器も破片とはなっているが、割られることなく据え置かれたものと推定される。また、群中の他の古墳と比べて、土師器の占める比率が高い傾向にあるようだ。

この他、墓道堆積土中、東側周溝中（30・32）からも土器が採取されている。

(4) 出土遺物

武器 (第35図)

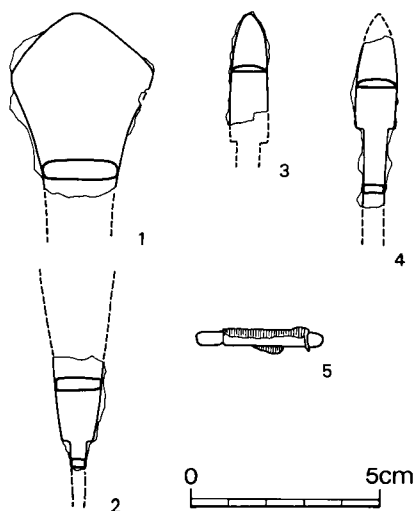
鉄 鏃

尖根系統の剣形（3・4）と、平根系統の圭頭形に近い部厚い1・2とがある。

両頭金具

鉄製で1個のみ。木部巾22cm、全幅34mm。

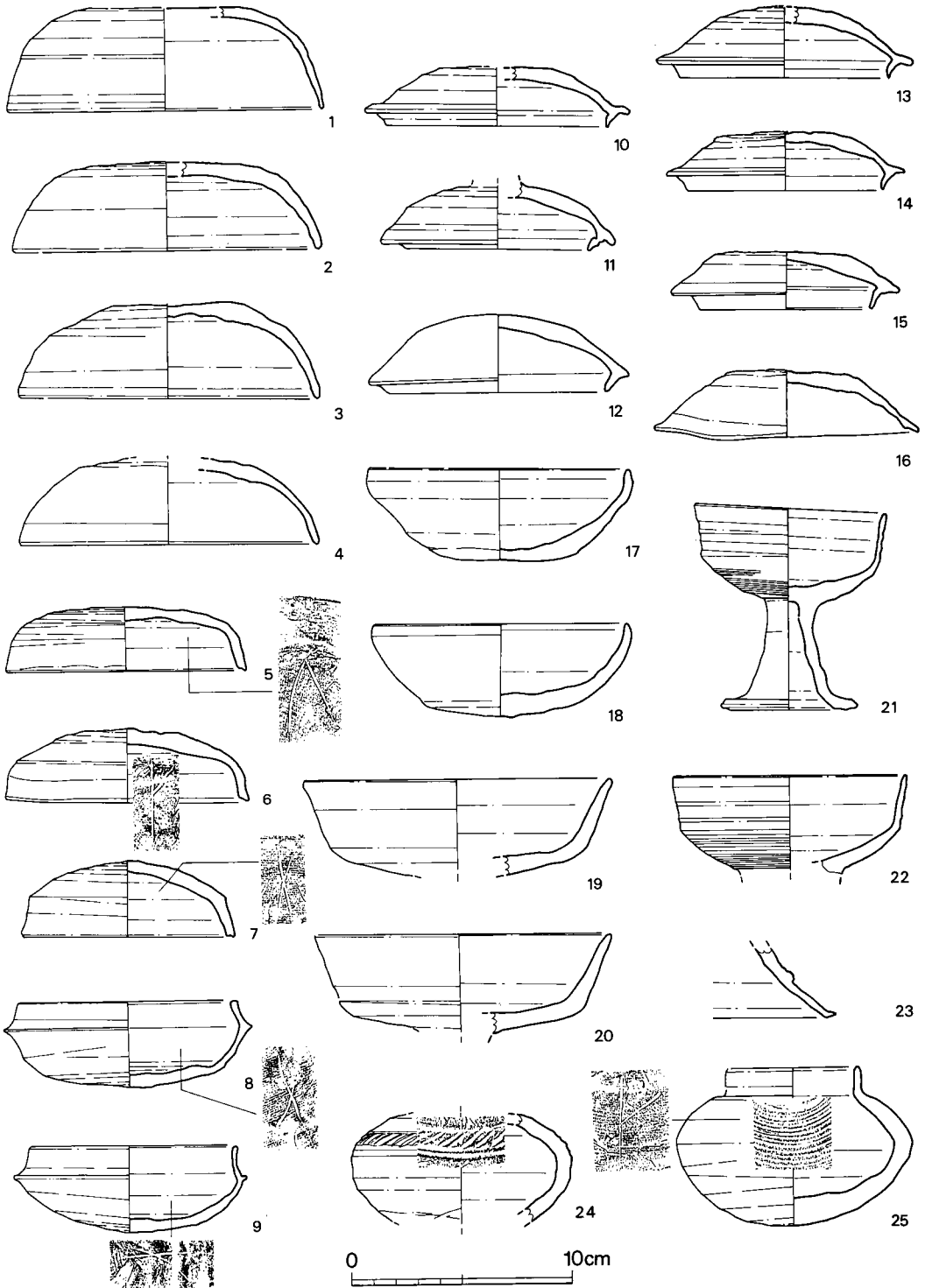
第 35 図 仙道8号墳出土武器実測図 (1/2)▶



土 器 (図版27)

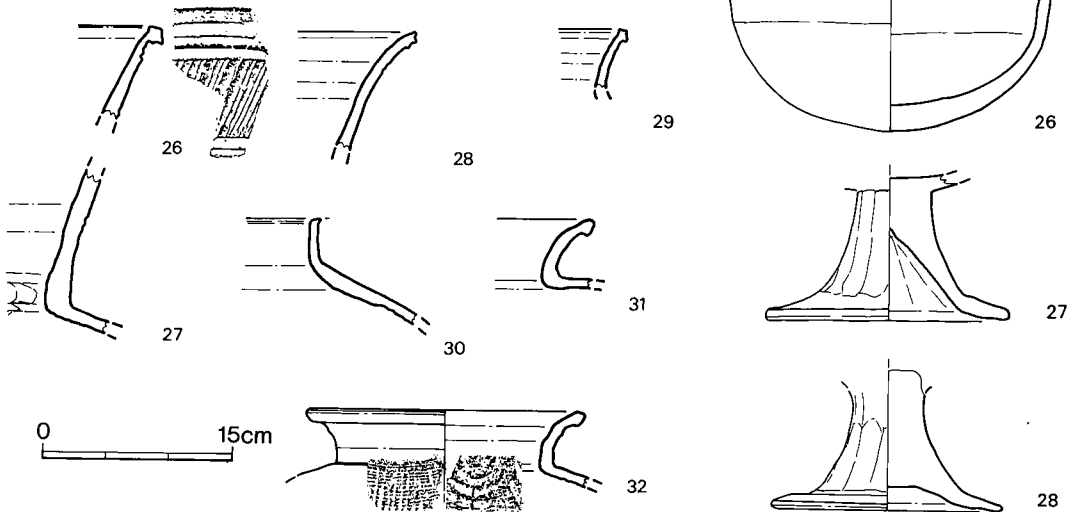
第 36 図 仙道8号墳出土土器実測図 1 (1/3)▶

III



5. 仙道8号墳

須恵器 (第36・37図)



▲ 第 37 図 仙道8号墳出土土器実測図 2 (1/6)

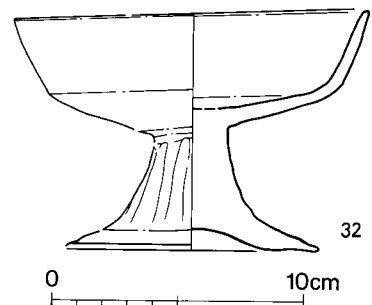
第 38 図 仙道8号墳出土土器実測図 3 (1/3) ▶

杯 蓋

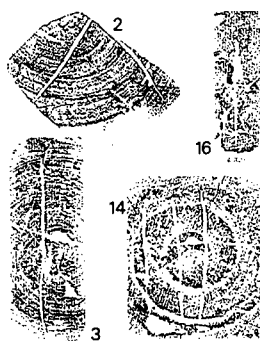
1～4はA類で、口径14.3～13.6cm、器高4.8～4.1cm。1は薄手で、胎土・調整・焼成いずれも頗る良好。4は白っぽくて焼成甚だ甘く、16・18と外観は極めて似通う。C類の5～7は、口径11～9.7cm、器高3.5～3cmと小型ながらも、肩部に明瞭な稜をもち口唇部の形状にも古相をとどめている。焼成も堅緻で、全体にシャープな感を漂わせる点でセット関係にある杯身B類(8・9)と共通する。10～16はD類で、外径12.1～10.3cm、器高3.5～2.7cm。11は、撮がついて台付壺の蓋となるかもしれない。本墳出土の杯蓋は、撮がつく例がない点で他墳とは異なる。

杯 身

A類の蓋に対応すべき身はない。B類の8・9は、C類の杯蓋と本来セット関係にあるとみてよく、しかもこれら計5個の内面は同じ篋記号が付されているにもかかわらず、内法に小異があって対になるものはない。外径11.2～10.6cm、器高4cmで、蓋受け部が直立するのが特色だ。17・18はC類で、蓋のD類に対応する。口径12～11.8cm、器高4.2cm。



III



第 39 図

仙道 8 号墳出土土器の
篋記号拓影集成 (1/3)

高 杯

21は、口径8.7cm、器高9.2cm、脚部底径6.2cm。22は、これよりもひとまわり大きく、杯部口径10.7cm。共に体部に沈線をいれ、底部はカキ目調整とする。

甕

胴部のみで、復元最大径は9.9cm。

短頸壺

25は、口径6.2cm、器高7.2cm、胴部最大径10.7cmで、全体に厚手。図示していないが、薄手のものが別に 1 個体ある。

甕

26・27は大甕で、頸部に篋による斜行文を施す。28は波状文をめぐらす。30は、短い口頸部が直立する。32は、口径22.1cm。

土師器 (第36・38図)

埴

23は、口径12.8cm、器高5.6cm、厚手で深い。口縁下で稜がはいる。

高 杯

39は、口径14cm、器高9.2cm、脚底径10.1cm。19・20がいずれと接合するかは不明。脚部の形状からは、34と35～39との 2 グループに分れる。

6. 仙道 9 号墳

(1) 墳 丘 (第28・40・41図)

群の北端、最奥部に位置する。伐採直後は、東西14m、南北17mながら、西方の8号墳からの見かけの高さは1m余に過ぎず、径の割には低いマウンドだとの印象を受けた。

盛土は他墳と同様まず表土をとり除いてから行っており、地業範囲の東西両端は浅く周溝状に掘りこまれている。東側では石室中軸線から7.2m、西側では同5.3mが各々内側の立ち上りで、従って、東西径は12.5mとなる。北側の墳丘裾は、玄室の中央から約6mの地点とみてよいが、南側のそれは決し難い。

(2) 石 室 (第42図)

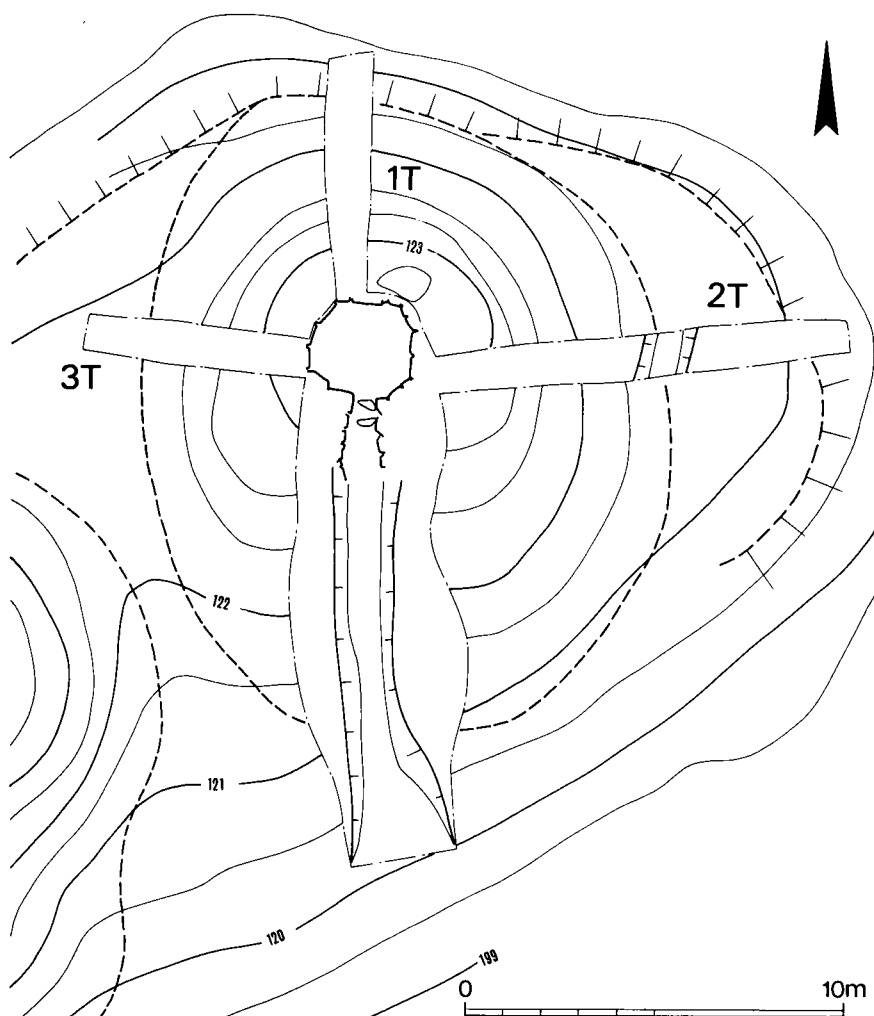
地山を掘りくぼめた墓壇底に、羨道部をも含めた石室全体が築かれている。石室は、墳丘の

6. 仙道9号墳

中心よりも少しく西側に偏在する。全長4.3mの単室の横穴式石室で、ほぼ南に開口する。陥没は比較的浅かったが、天井石の全てと周壁上半とを失っている。

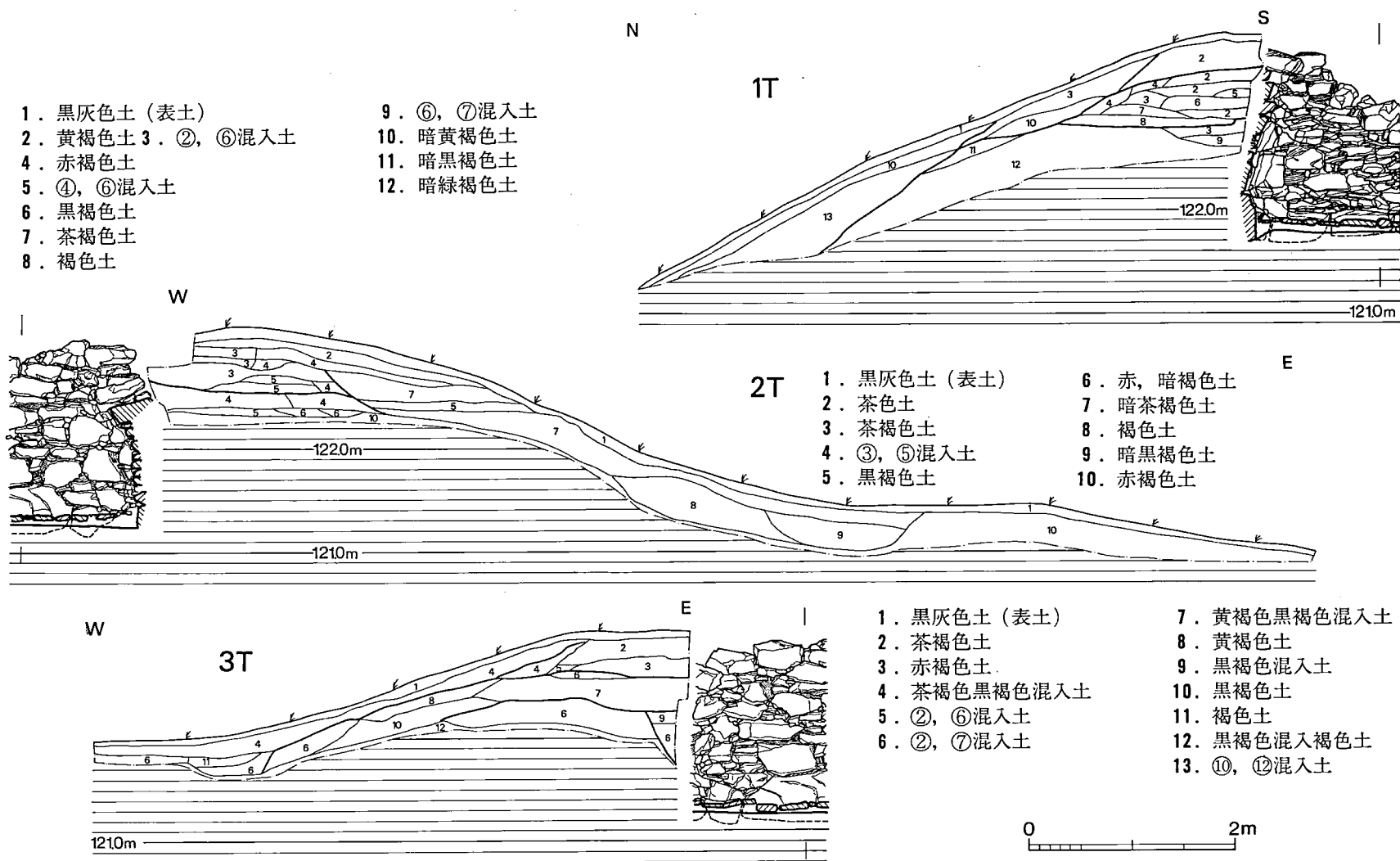
本石室の特色は、玄室床面が2回にわたってカサ上げされており、さらに右側壁前半が補強・改修されている点にある。以下では、床面を第1～3次と呼び分けて説明する。

玄室の周壁は、割石を小口積とするが、基部の石材と以上のそれらとは大きさにさほどの差がないのが特徴的だ。それでも、奥壁の正面と左右の袖石とには大きくてすわりのよい石材を充てている。周壁の内傾度は、かなり強い。

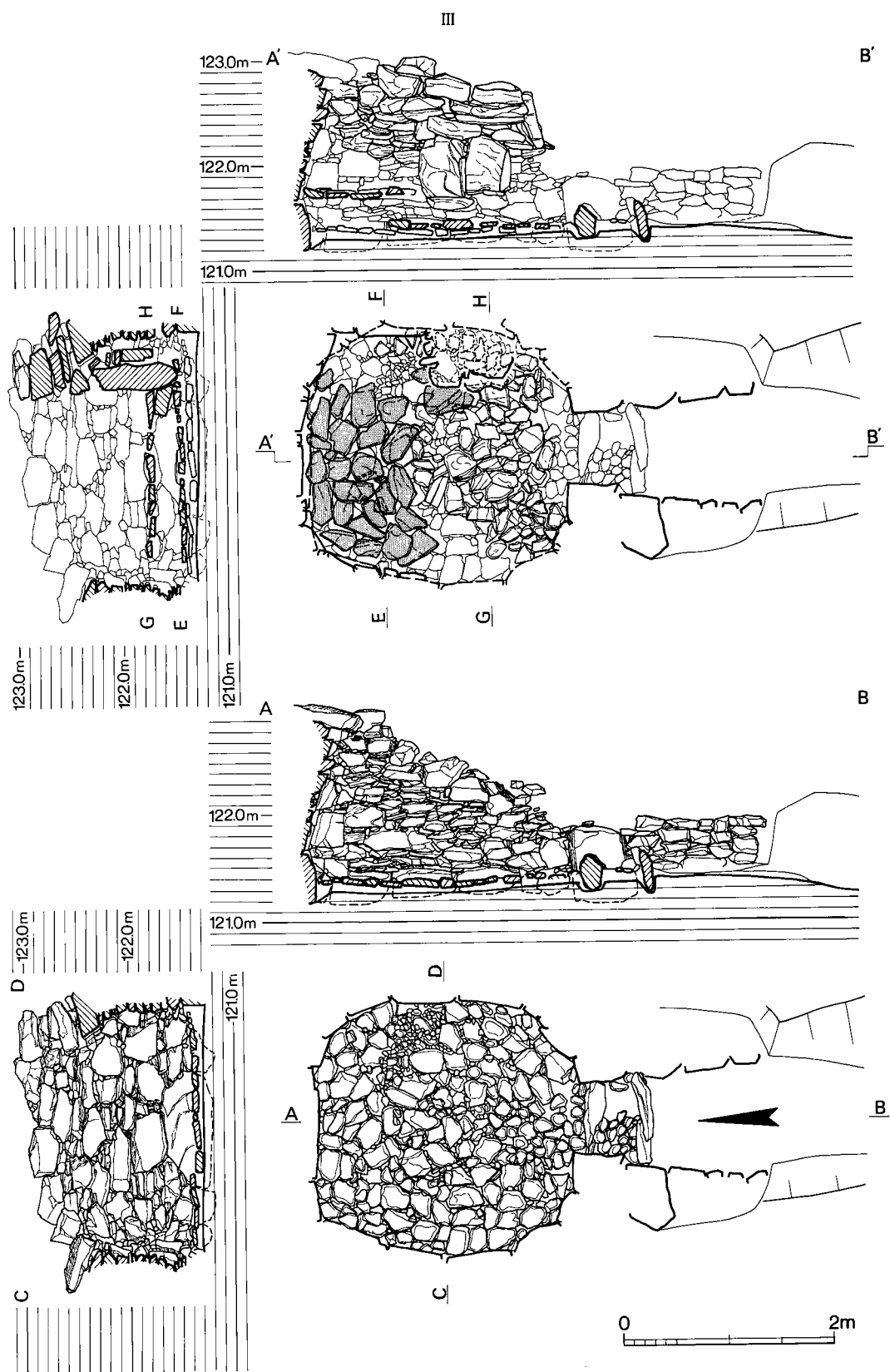


▲ 第40図 仙道9号墳墳丘測量図発掘後 (1/200)

第42図 仙道9号墳石室実測図 (1/60) ►



第 41 图 仙道 9 号墳墳丘断面実測図 (1/60)



6. 仙道9号墳

本来の玄室床面（第1次）の内法は、長さ2.44m、奥壁部巾1.8m、前壁部巾2.05m、中央部巾2.4mとかなりの胴張りがあり、かなり円形に近いプランとなっている。床には、下層に平な割石を、この上に小円礫を敷いている。

横口部の床には仕切石を置くが、奥壁からその北縁までは2.52mと、他墳とは異なり全長を二分する位置にはない。これと25～45cmの間をあけて、2石からなる第2の仕切りが設けられており、ここまでは玄室と同様に敷石がある。横口部の巾は65cm程度で、羨道部側壁は平行せずに外開きとなり、最先端での巾は1m余。

開口部からは地山を浅く掘り割った墓道がとりついており、墳丘南裾をこえてさらに南へと延びており、その長さは10.5mにも達している。

第2次の床は、築造当初の床（第1次）と若干の間層をはさんで平な割石を敷いたもので、横口寄——玄室前半部を中心とし、小円礫を併用してはいないようだ。

第3次の床は、第2次床面とさらに間層をはさんで割石を敷いたもので、第1次床面よりも35cm内外高位となる。やはり、小円礫を併用していない。それと気づくのに手間取ったため、横口部に近い部分では浮いたものとして取り除いた石材もあり、玄室前半部での状況は不詳。従って、第3次の床が奥壁寄りを中心とした屍床的なものであったのか否かなどは、遺憾ながら不明。

右側壁を補強した時期は、第3次の床面形成時と考えられる。2個の大き目の石材を立てて壁面を支えているので、歪みが生じて壁面の崩壊が予見されたためにとられた処置と推定される。極めて珍しい事例である。

（3）遺物出土状態

室内は盗掘を受けており、加えて、玄室の床3次にわたると気づくまでに日時を要したこともあって、各遺物がいずれの床に伴うかの識別は遺憾ながら徹底していない。

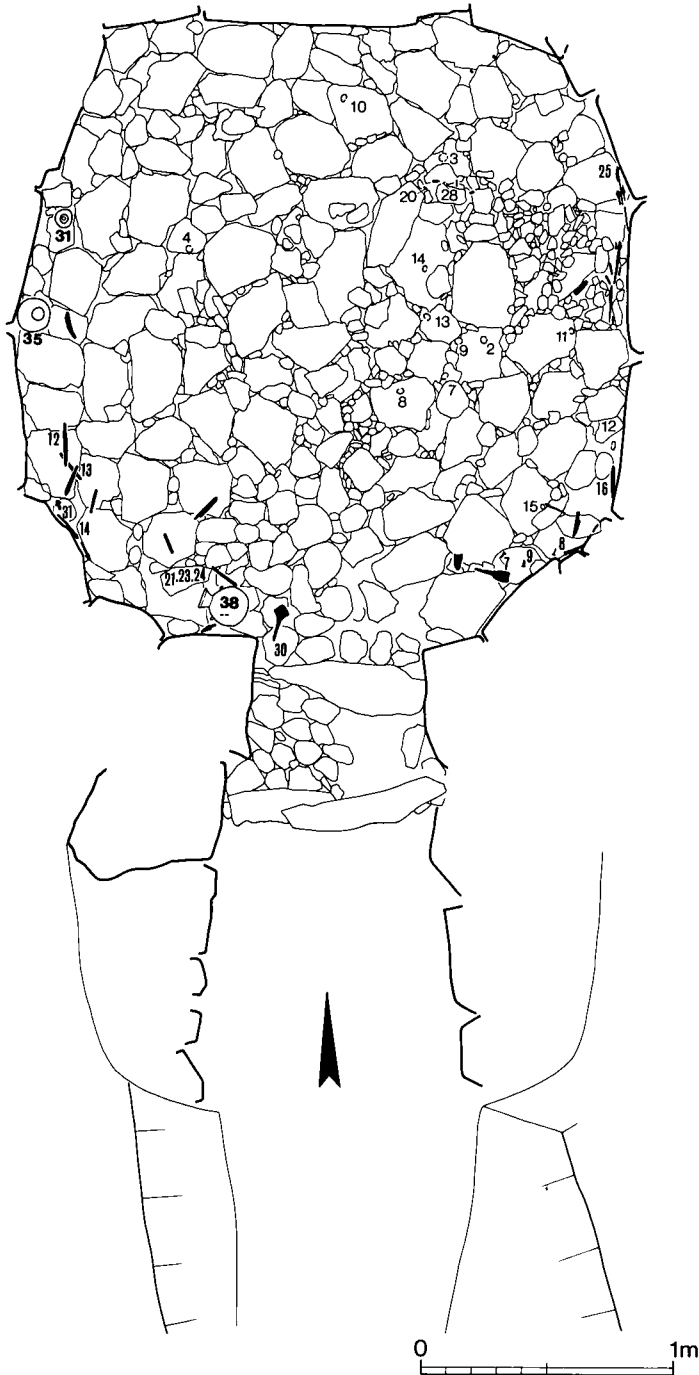
第43図中の遺物は、第1次床面を清掃中に発見したものであるから、少なくとも第3次の床に伴うものではない。けれども、耳環が8セット分計12個にも達しているので、第1次と第2次の床に各々置かれていたものが混在している可能性を否定できない。また、以上とは別に、玄室内堆積土中から耳環3個（5・6・16）が採取されている。

ともあれ、玄室では周壁沿いを中心に出土しているが、このこと自体、中央部が追葬時あるいは床のカサ上げ時に整理されたことの証左といえよう。

平瓶（35）は壁際に正立しており、横倒しとはなっている提瓶（38）とともに、ほぼ当初の位置にあるとみてよい。両者が完形品でもあるからだ。高杯（31）は脚端を欠き、杯部を下に倒立している。この他、原位置からの出土品とみてよい例は、右側壁奥壁寄りの壁際から出土

III

した刀子および鉄鏃群。鉄鏃の鋒は、奥壁に向けられていた。



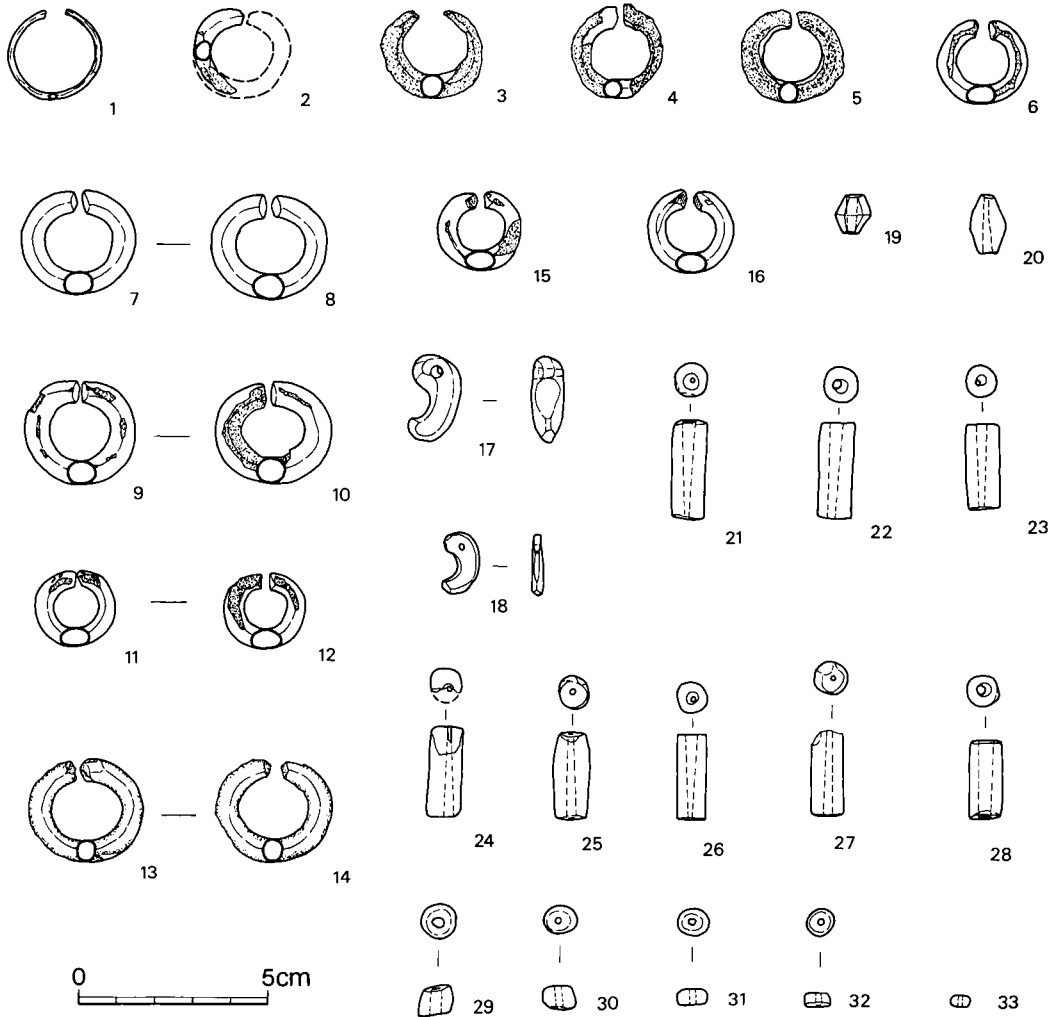
第 43 図
仙道 9 号墳遺物出土状態 (1/30)

6. 仙道9号墳

装身具は、玄室の右（東）半奥壁寄りの部分にはば集中する感がある。けれども、聚玉1個（20）と管玉4個（28他）それに小玉がまとまって出土して、頭位を示すかに見える箇所が1例ある他は、耳環の13と14とが17cmと近接して出土した程度である。

両頭金具は、右袖石近くから3個（7～9）が出土した。また、玄室内堆積土中からは鉄鏝の小塊が採取されている。

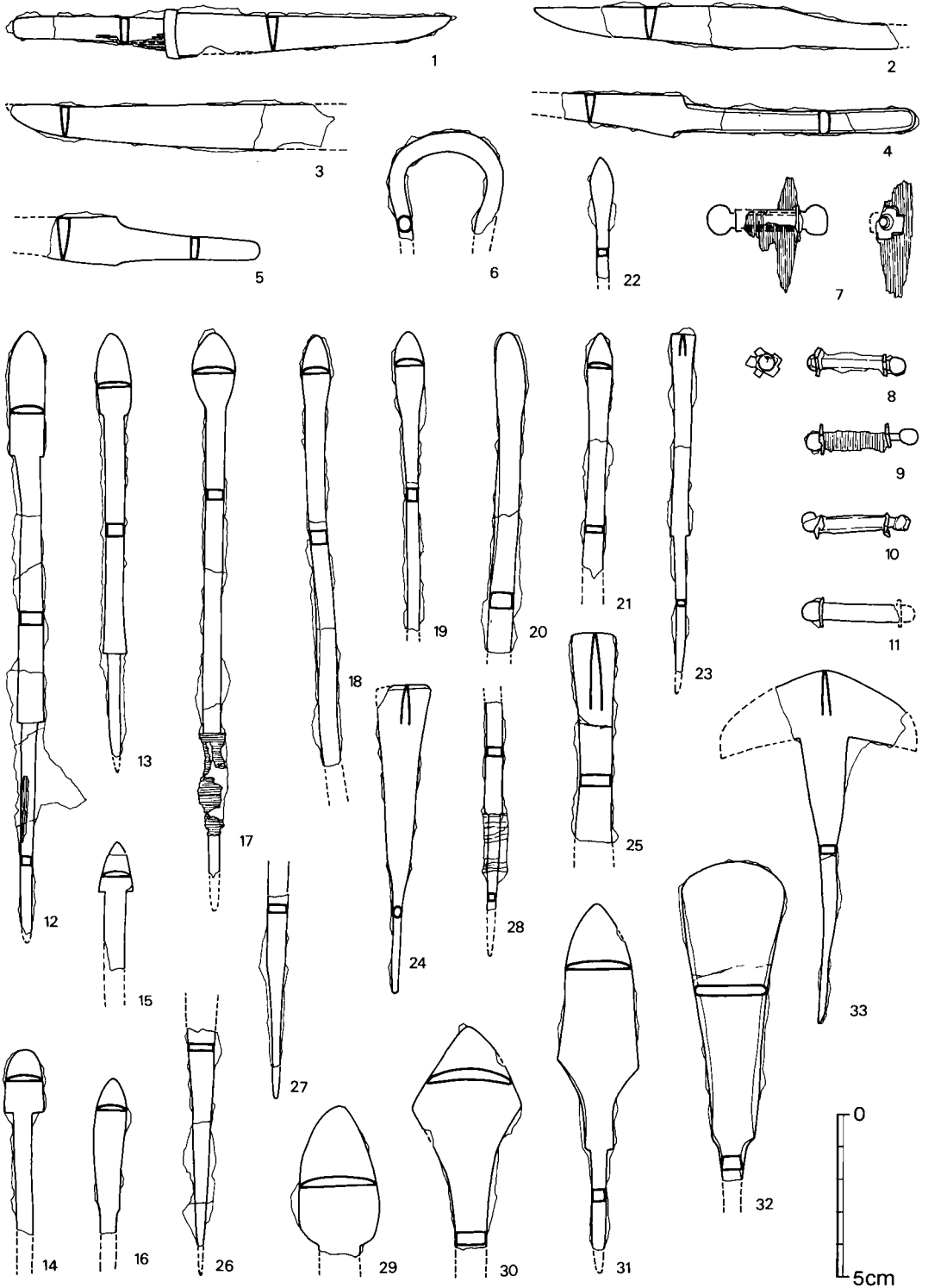
石室外では、墓道堆積土中から多数の土器が出土した。土師器が比較的多いが、完形品は須恵器杯身（18）1個のみである。土器の他に、細身の金環（1），鉄鏝（22・33）も採取されている。



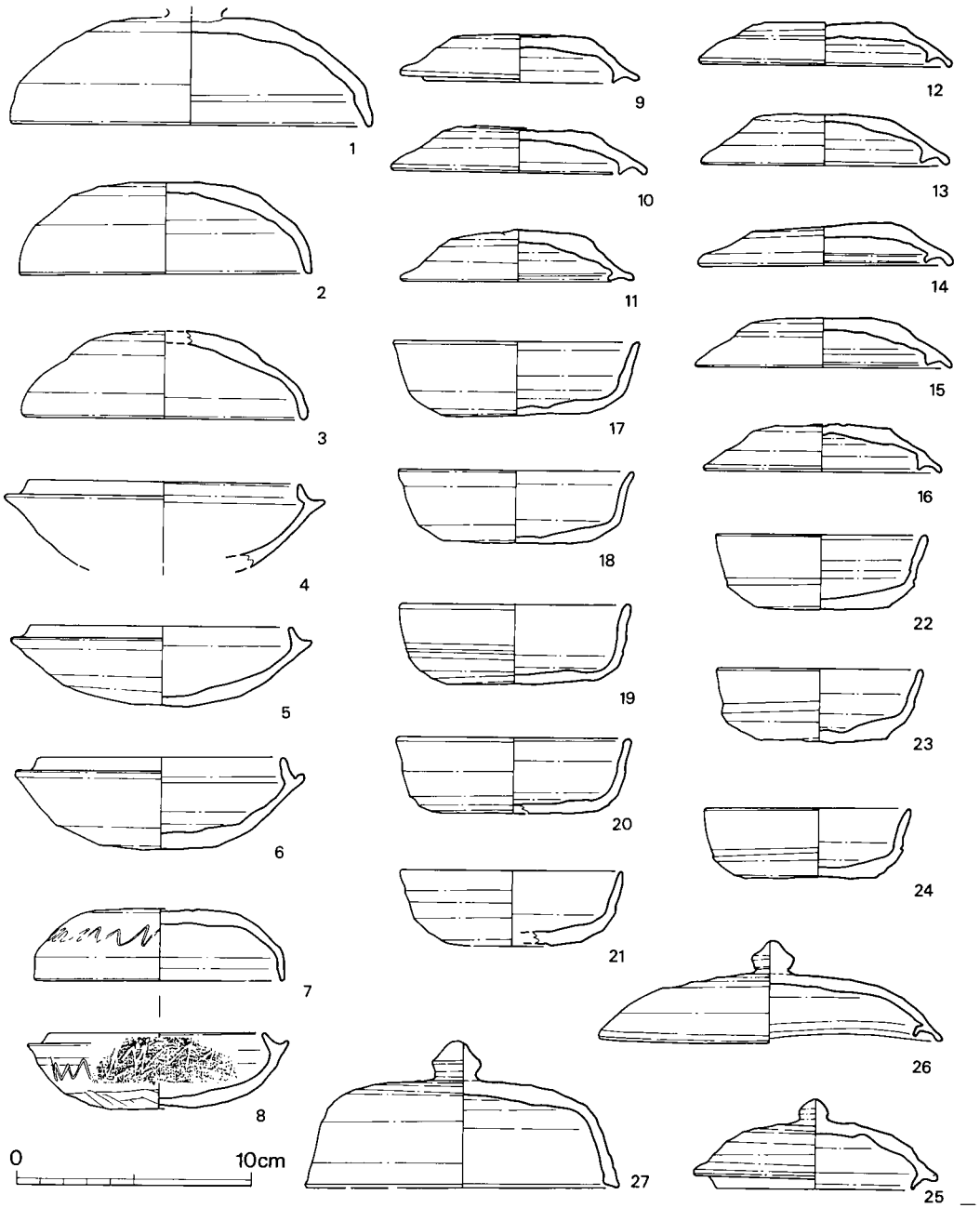
▲ 第 44 図 仙道9号墳出土装身具実測図 (1/2)

第 45 図 仙道9号墳出土鉄器実測図 (1/2) ▶

III



(4) 出土遺物



第 46 図 仙道 9 号墳出土土器実測図 1 (1/3)

III

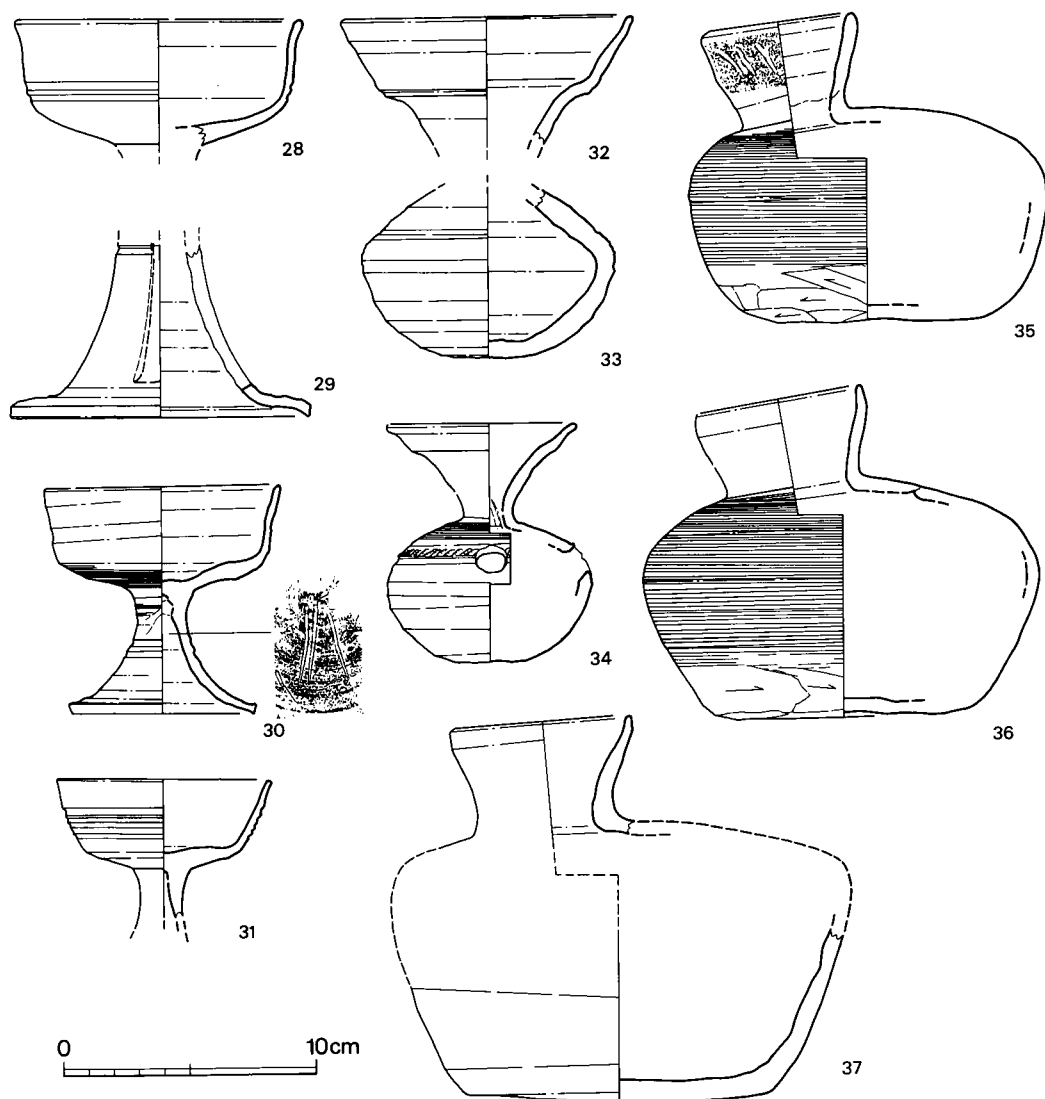
装身具（図版21，第44図）

勾 玉

17は水晶製で，片側からの穿孔。長さ23mmで，頭部巾 9 mm。18は片岩系石材で，全長16mmの小型品。厚さは2～3 mmで，薄手・扁平。

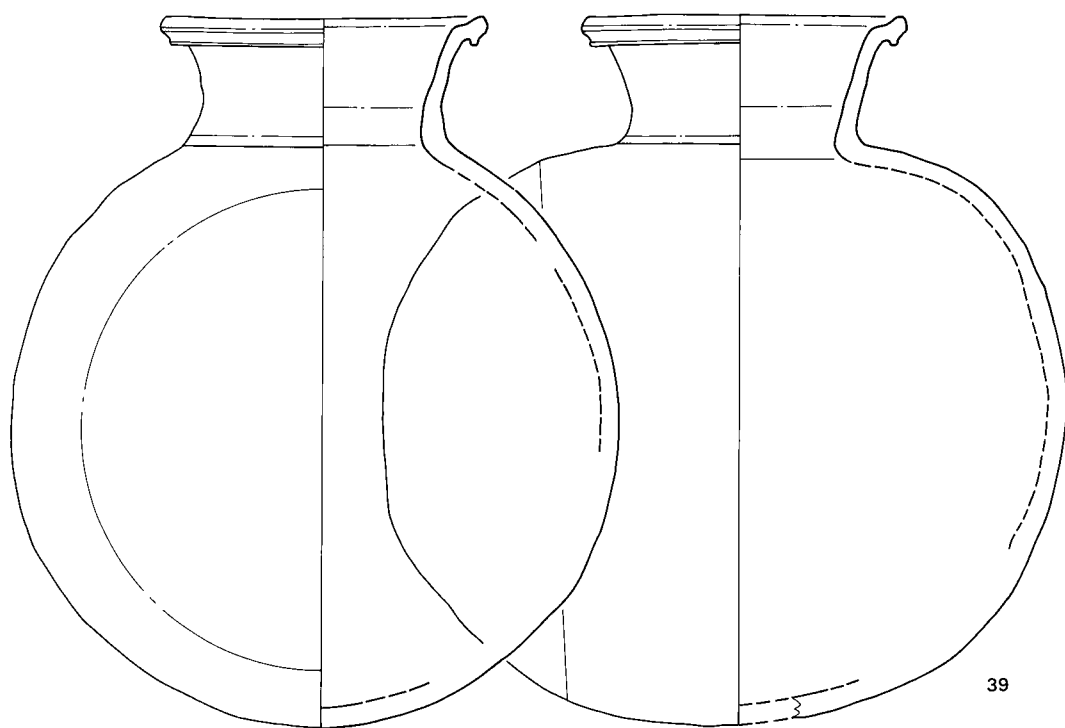
切子玉

19は水晶製。高さ1 cm，最大巾 9 mm。

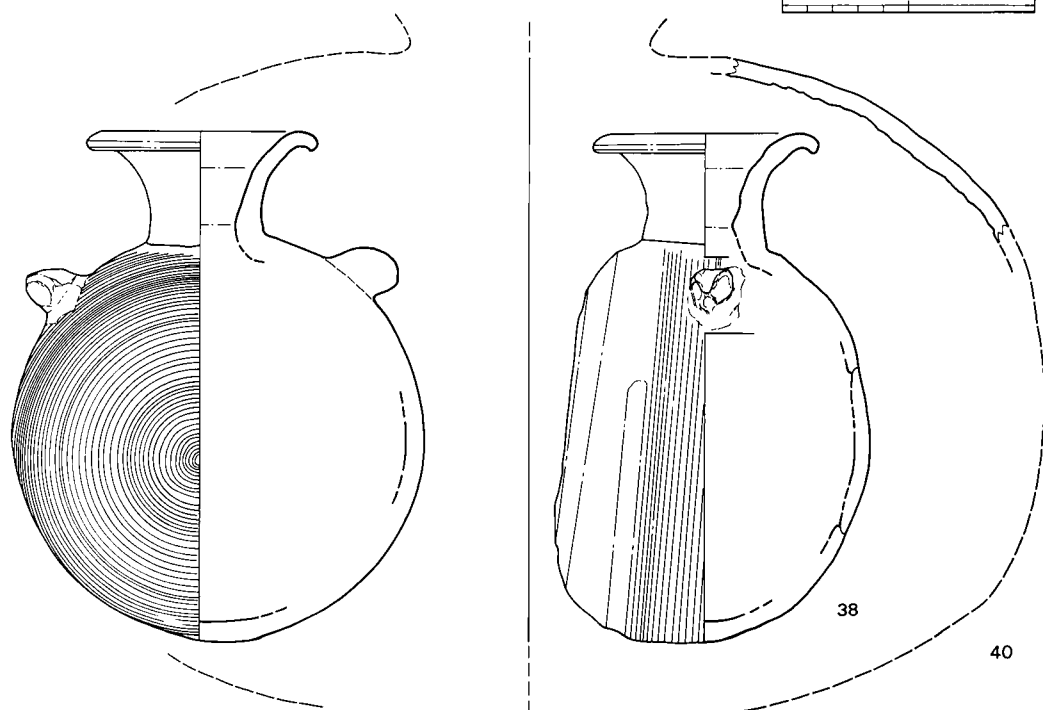


第 47 図 仙道 9 号墳出土土器実測図 2 (1/3)

6. 仙道9号墳



0 10cm



III

瘞 玉

20は瑪瑙製。17×9mmで、形は整っていない。

管 玉

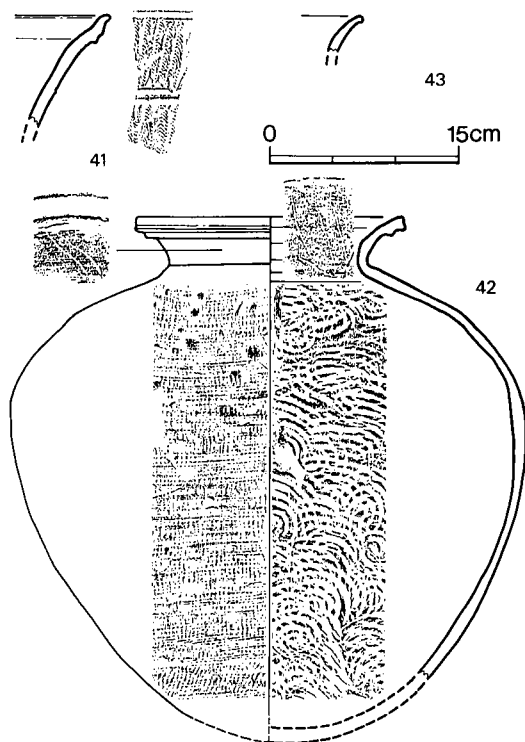
径は9mmと共通し、長さは26～21mmで、全体にズングリしたものが多い。玉ユラによる縁辺部の欠けが目立つ。碧玉製で、28のみがうす緑と出土品中では異彩。

小 玉

5×3mmから9×6mmと大きさに差がある。いずれも紺色。

耳 環

石室の内外から、11対分22個のうち計16個が出土した。7と8(30×28mm)、9と10(29×28mm)、11と12(21×20mm)がセットで、いずれも銀被せ。13と14(30×27mm)も対になるが、銅胎のみ。1は、径1.5mmの金針金で、外径は25×24mm。4・5は金被せで、3もか。6は24×22mm、15は22×20mm、16は22×22mmで、3者とも銀被せ。



▲ 第 49 図 仙道 9 号墳出土土器実測図 4 (1/6)

◀ 第 48 図 仙道 9 号墳出土土器実測図 3 (1/3)

土 器

須恵器(図版28～30、第46～49図)

杯 蓋

1はA類で、口径15.5cm、器高4.6cmと、大ぶり。B類(2・3)はひとまわり小型で、口径12.5cm～12.3cm、器高3.9cm。後者は焼成が稍甘い。C類の7は、身のB類と対で、器表に同じ篋記号を付す。口径10.7cm、器高3cm。9～16はD類。外径11～10cm、器高2.3～1.9cm。12～16は、より後出的。26・27は、撮のつくE類。26は外径14.7cm、器高4.4cm。27は、外径13.5cm、器高6.2cmで、肩が張って部厚い。25は、外径10.3cm、器高3.9cmで、台付壺の蓋か。

杯 身

4～6はA類。4・5は焼成甚だ不良。外径12.3cm～13.7cm、器高3.5～4cm。17～24は蓋D類と対となるべきC類。蓋

6. 仙道9号墳

13と身18とは、共に焼成が甘く一揃いか。口径8.8～10.5cm，器高3.1cm～3.5cm。

高 杯

28は杯部のみで，口径11.4cm。29は，脚部のみで，底径12cm。30は，口径9.4cm，器高8.9cm，底径7.4cm。杯部下半はカキ目調整。脚内面に篋記号。31は，玄室内に倒立していたもので，焼成は甘い。杯部口径8.5cm。体部に28と同様に沈線をめぐらす。

甕

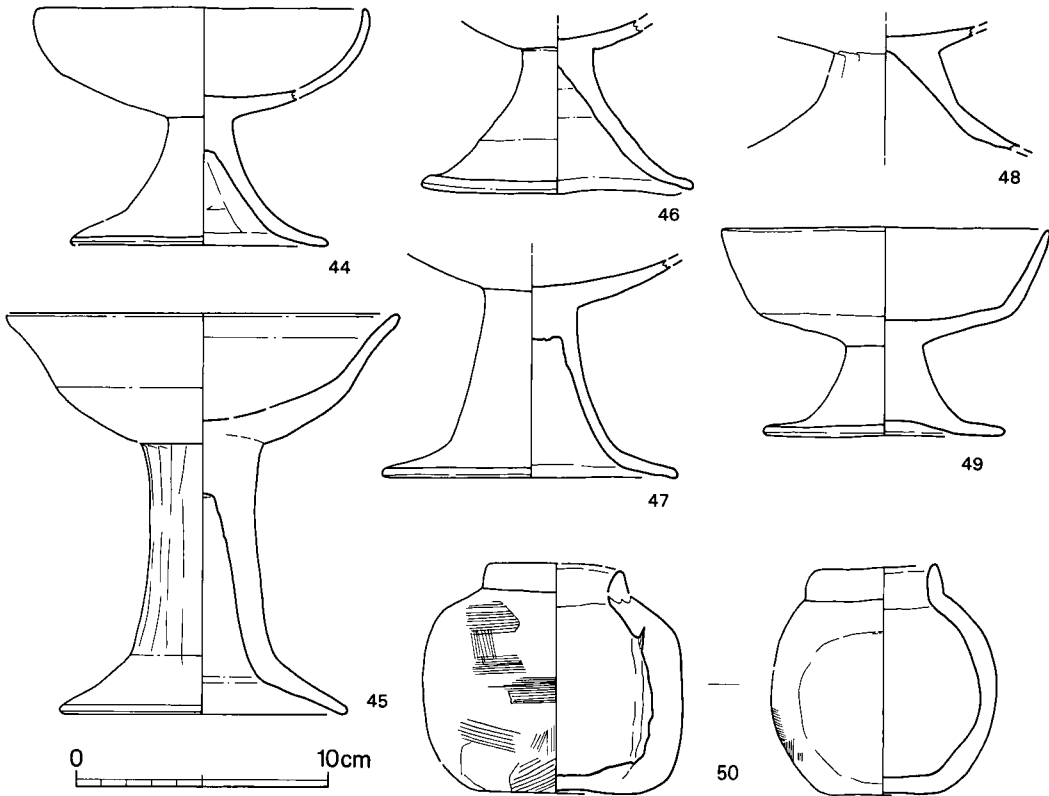
32と33とは同一個体か。口径11.6cm，胴部最大径10cm。赤桃色を呈するが硬質。34は，口径7.5cm，器高9.4cm，胴部最大径8.1cm。頸部は無文。

平 瓶

3個体。35は，玄室内出土で完形品。口径6.2cm，器高12.2cm，胴部最大径14.2cm。36と同様に，胴部の上半をカキ目，底部を篋削りで調整。頸部の器表に篋記号。36は，口径6.8cm，器高13.1cm，胴部最大径15.7cm。37は，口径7.2cm，器高15.4cm，胴部最大径15.4cm。

提 瓶

40は玄室内出土の完形品。口径9.2cm，胴部径16.4cm，同高12.1cm。両肩に釣状の吊手。焼



第 50 図 仙道9号墳出土土器実測図5 (1/3)

III

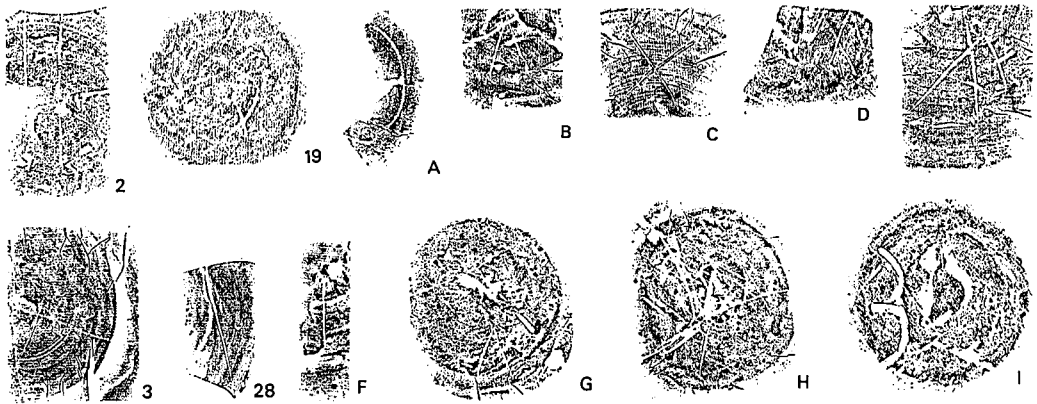
成は良好で、胴部器表に篋記号。

横 瓶

40は、通常品で、復元胴部径26cm、同最大巾41cm。39は、胴部径24.1cmに対して同最大巾27.1cmと寸詰まり気味。口径12.9cmで、器高28.3cm。

甕

41は大甕で、頸部に波状文をめぐらす。42は、口径21.4cm、復元器高41.8cm、同胴部最大径40.9cm。頸部は無文だが、内外に異なる篋記号を付す。



第 51 図 仙道 9 号墳出土土器の篋記号拓影集成 (1/3)

土師器 (図版29, 第50図)

高 杯

45は、出土品中ではより古いタイプ。口径15.6cm、器高16cm、底径11.5cmで厚手。44は、口径13.3cm、器高9.4cm、底径10.1cm。49は、8号墳の39に酷似し、同一人の手になるものだろう。口径13cm、器高8.2cm、底径9.6cm。

横 瓶

珍しい器形。胴部径9cmに対し同最大巾は10.3cm。器高9cmで、かなり部厚い。

Ⅳ 結 語

1. 石室構造について

おしなべて単室あるいはとみてよい点に、仙道古墳群の横穴式石室の形態的特徴が求められる。かつて、筆者が仙道古墳（1号墳）の調査に従事した折には、玄室以前が大破しているこの石室が、単室であるのかそれとも複室であるのか、判断に苦しんだ覚えがある。全体としては単室との印象と6世紀中葉以前には到底遡り得ないとの年代観とが整合性をもたず、ずっと気懸りとなったまま数年が経過した。つまり、県下では一般的に6世紀中葉以降になって複室化が普及するとの印象を持っていたからだ。

今回の調査により、6世紀後半以降でも、当該地域では依然として単室墳をつくり続けていたことが明らかとなった。こうした単室構造への固執は、調査が進んだ今日では各地での類例が増えつつあり、筑後川の対岸浮羽郡吉井町の一部にも認められることは、かつて指摘したとおりである（註1）。

なお、9号墳の玄室右側壁前半に補修が認められたが、幾星霜を経ながらも自壊しないのが通有であるだけに、異例中の異例といえよう。

2. 土器の出土状況について

3類型がある。その1は、完形品が石室内に置かれて飲食物を供献した状態を示すもので、2号墳羨道部と9号墳玄室とが該当する。その2は、石室外の墓道あるいは前庭部にあって破碎・遺棄された状態にあるもので、2・4・7・9号墳がこれにあたる。後者は、墓前での飲食を伴う儀式終了後に冥界へと去った者への飲食物供献を拒絶し、彼（女）と決別するとの全体の意志を表現するものであろう。

2・9号両墳では、両者があって矛盾するかに思えるが、儀礼全体としては死者への飲食物の供献を拒みながらも、死を受け入れ難い肉親の情が人目を憚りつつこれらの土器を並置させたとみてよい（註6）。

その3は、墳丘裾部に完形の土器を並置する8号墳例がそれで、供献状態とはいいい難い。儀式後、割らずにそっと重ね置いたとみるべきではあるまいか。

3. 出土品について

（1） 両頭金具

山間の小規模な群集墳ではあるが、2・8・9号墳と計3基に副葬されていた。両頭金具は、既に田中新史氏が指摘されたように弓の弭^み近くに装着された飾金具であり（註2）、最近では、

IV

福島県いわき市・小申田横穴群から鉄地金銅の金具が出土しているという（註3）。本群出土例は鉄製で華美なものではないが、類品の普及度はかなり高かったものと推定される。

（2） 銚 帯

2号墳は、山間に位置する現存9基からなる古墳群の中核的存在と目されるが、それでも、金銅製銚帯の出土は稍意外であった。被葬者は、身辺をきらびやかに飾りたてたん物と想定されるが、銚は実用品であり、里近くに占地する仙道古墳の被葬者には到底及ばない。

（3） 4号墳出土台付椀（第24図29）

体部に沈線をめぐらし、全面をカキ目調整するのが特徴。台部を欠くが、一見して、八女郡広川町・鈴ヶ山1号墳、八女市上塚ノ谷4号窯出土品と極めてよく似ていることに気づく。八女での両例は、消費地と生産地との関係にあり（註4）、画一的とみなされがちな須恵器の形態にも時には地域色が表出することがあることを示す稀少な証左である。本例は、色調が異なるので直ちに彼地からの将来品とは断定できないが、一応、注意しておきたい。

（4） 篋記号

須恵器に刻まれた篋記号の意義については、かつて、その一つとして「有蓋器種の場合、セット関係を明らかにする」点を挙げたことがある（註5）。今回の出土品中では、器表に同一の篋記号を付す9号墳出土の蓋杯（第46図7・8）がそれに該当する。その一方で、明らかに同一工人の手になる8号墳出土の杯蓋（第36図5～7）と杯身（同8・9）の計5個体は、いずれもが別セットに属して合わない。つまり、セット関係にある須恵器には同一の篋記号が付される原則は認められるが、その逆は必ずしも成り立たないことになる。なお、8号墳の蓋杯での篋記号の位置は、全て内面に限られることが注意された。

4. 営造順と年代について

大筋として、麓により近い2号墳が、谷奥部に位置する5～9号墳よりも先行するとみてよい。5～9号墳の中でも、尾根筋に5・8・9号墳が相次いで作られたために、7号墳はこれらの手前の斜面に位置せざるを得なかったものであろう。以上の推定は、出土した須恵器の年代観によっても裏づけられる。

蓋杯のタイプを古墳別に整理し直すと、

杯 蓋

古墳 類	2号墳	4号墳	7号墳	8号墳	9号墳
A	○			○	○
B	○	○			○
C	○			○	○
D	○	○	○	○	○
E	○		○		○
F		○			
G			○		

杯 身

古墳 類	2号墳	4号墳	7号墳	8号墳	9号墳
A	○	○			○
B				○	○
C		○		○	○
D	○	○	○		
E		○			

となる。

蓋杯の各タイプを小田富士雄・真野和夫両氏の編年（註7）と対応させると、

Ⅲ 様式——杯蓋A類，杯身A類

Ⅳ 様式——杯蓋B・C・D類，杯身B・C類

Ⅴ 様式——杯蓋E・F類，杯身D・E類

Ⅵ 様式——杯蓋G類

となる。

従って、2・8・9号墳は6世紀後半から末にかけて相次いで作られ、これに4号墳が続き、7世紀に近くなって7号墳が営造されたものとみられる。

追葬は、7世紀前半代にまで及んでいるが、耳環の出土数からみて、2号墳では5体以上、9号墳ではなんと11体以上もの埋葬が想定される。後者では、追葬に際して計3次の埋葬面を設けてこれに備えたことは先述したとおりである。

註1．吉井町教育委員会『原古墳』〈吉井町文化財調査報告書 2〉 1984年

2．同氏「古墳出土の飾り弓——鋌飾り弓の出現と展開」〈伊知波良 1〉 1979年

3．穴沢咄光氏の御教示に拠る。

4．拙稿「鈴ヶ山1号墳」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 Ⅲ〉 1972年

5．拙稿「鈴ヶ山・山の前岡古墳群出土須恵器にみられる篋記号について」註4文献に所収

6．拙稿「4 土器の出土状態について」『福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査』

〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXIV〉 1978年

7．小田富士雄・真野和夫「八女古窯跡群の調査・総括」『立山山窯跡群』〈八女古窯跡群調査報告 Ⅳ〉 1972年

圖 版



1. 仙道 2 号墳全景（南から、後方は 4 号墳）



2. 仙道 2 号墳全景（北東から）



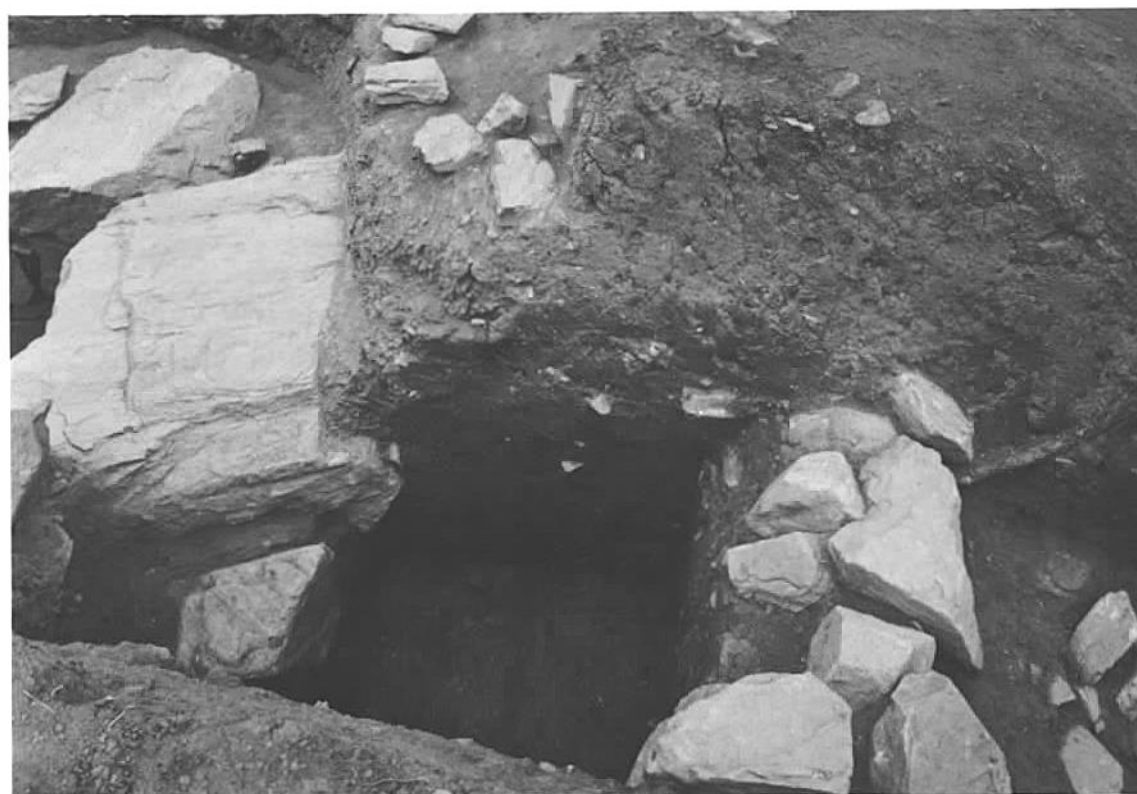
1. 仙道2号墳第1トレンチ墳丘内列石(東から)



2. 同 上 内側列石



1. 仙道2号墳第3トレンチ墳丘内列石（北東から）



2. 同 上 （左半は玄室の奥壁）



1. 仙道2号墳第2トレンチ墳丘内列石（北西から）



2. 仙道2号墳玄室奥壁



1. 仙道 2 号墳玄室前壁と閉塞石



2. 仙道 2 号墳羨道部での遺物出土状態



1. 仙道 2号墳前庭部全景（南から）



2. 同 上 （南西から）



1. 仙道2号墳前庭部西半全景（東から）



2. 同 上 土器出土状態（南西から）



1. 仙道4号墳丘全景（東から）



2. 仙道4号墳頂部の陥没（前方・印は2号墳）



1. 仙道4号墳石室残存状況（右手前が玄室）



2. 仙道4号墳の墓道と同肩部での土器出土状態（南西から）



1. 仙道7号墳石室全景（左奥6号墳，その右は8号墳，南から）



2. 仙道7号墳石室全景（北西から）



1. 仙道 8 号墳墳丘全景（東から、左奥は 6 号墳）



2. 仙道 8 号墳石室全景（手前が玄室）



1. 仙道8号墳の周溝と墓道（西から）



2. 仙道8号墳墓道部土器出土状態（左端は周溝内側肩部）



1. 仙道 6 号墳 (左奥), 同 7 号墳 (中央手前), 同 8 号墳 (中央奥), 同 9 号墳 (右奥)



2. 仙道 9 号墳墳丘全景 (南西から)



1. 仙道9号墳墓道全景（南から）



2. 仙道9号墳石室全景（床と右側壁とは第3次）



1. 仙道9号墳石室右側壁全景（第3次，中央が補強壁）



2. 同 上 （第3次，北西から）



1. 仙道9号墳石室左側壁全景(第3次)



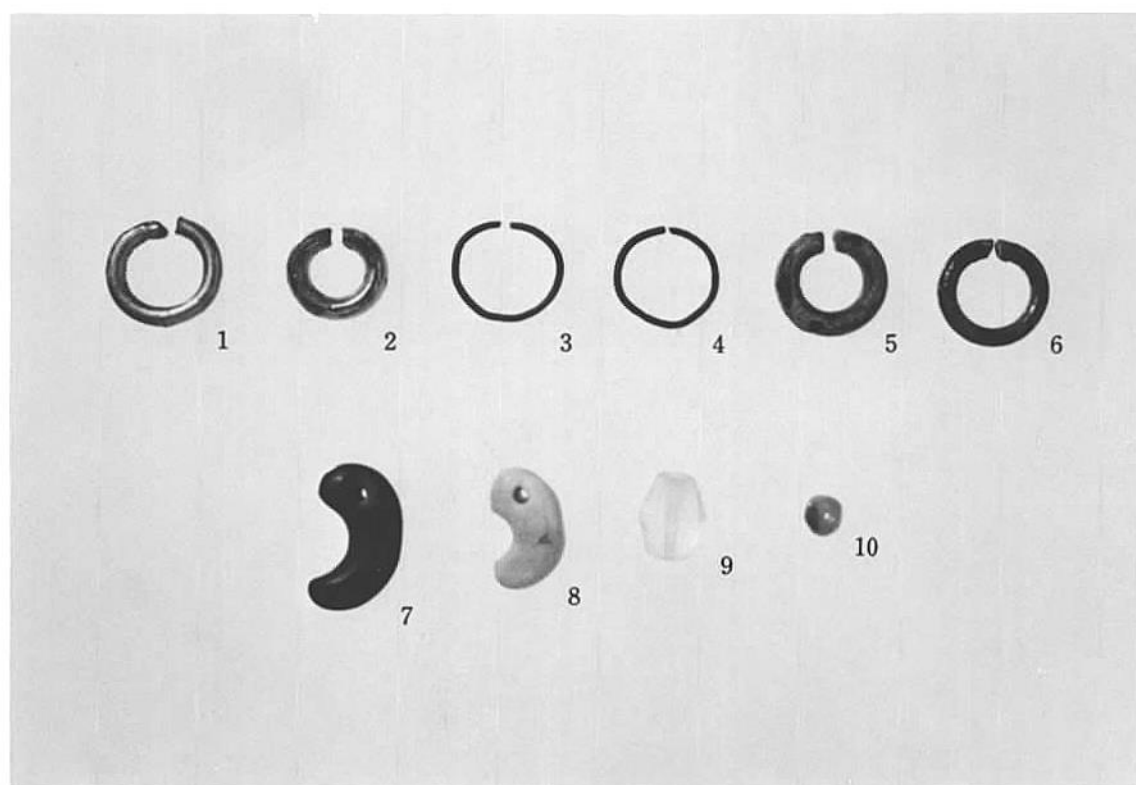
2. 仙道9号墳石室横口部(床は第1・2次)



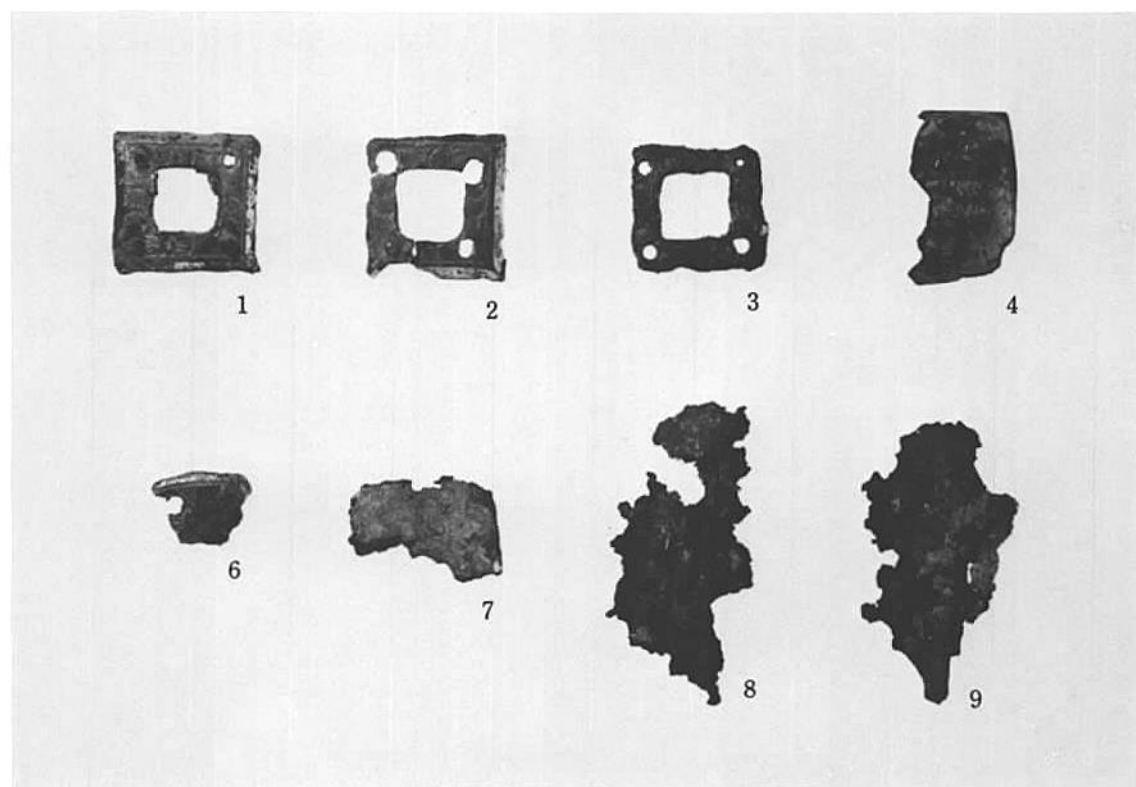
1. 仙道9号墳石室全景（補強壁除去後，南西から）



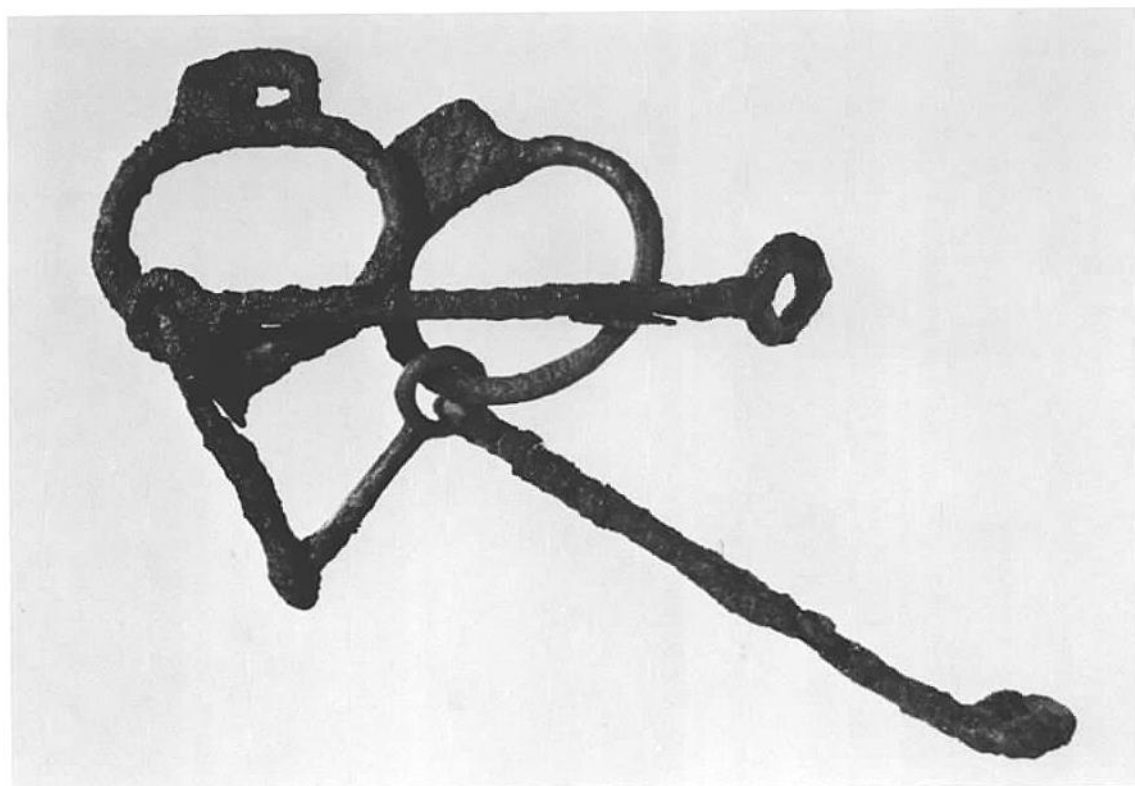
2. 同 上 第1・第2次（中央部）床面



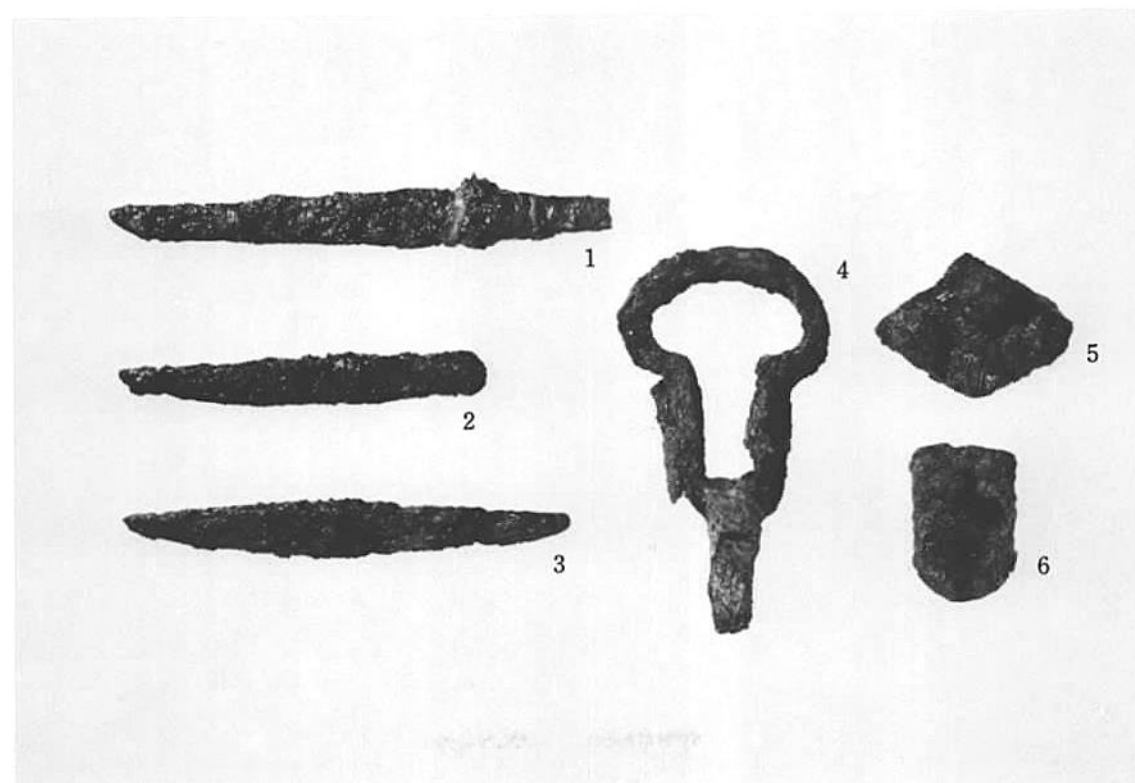
1. 仙道 2 号墳出土装身具類



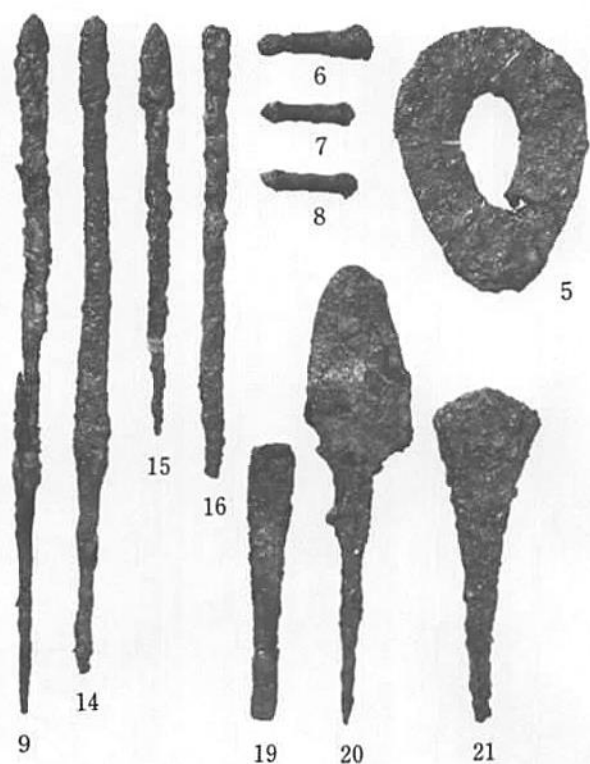
2. 仙道 2 号墳出土金銅製品



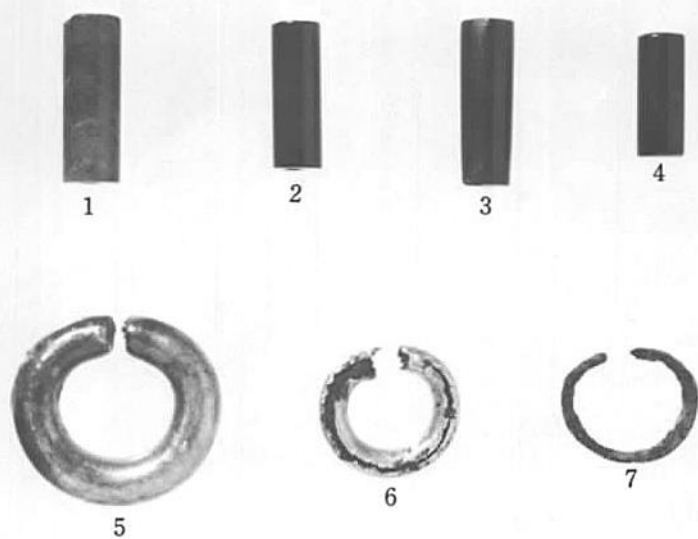
1. 仙道2号墳羨道部出土轡



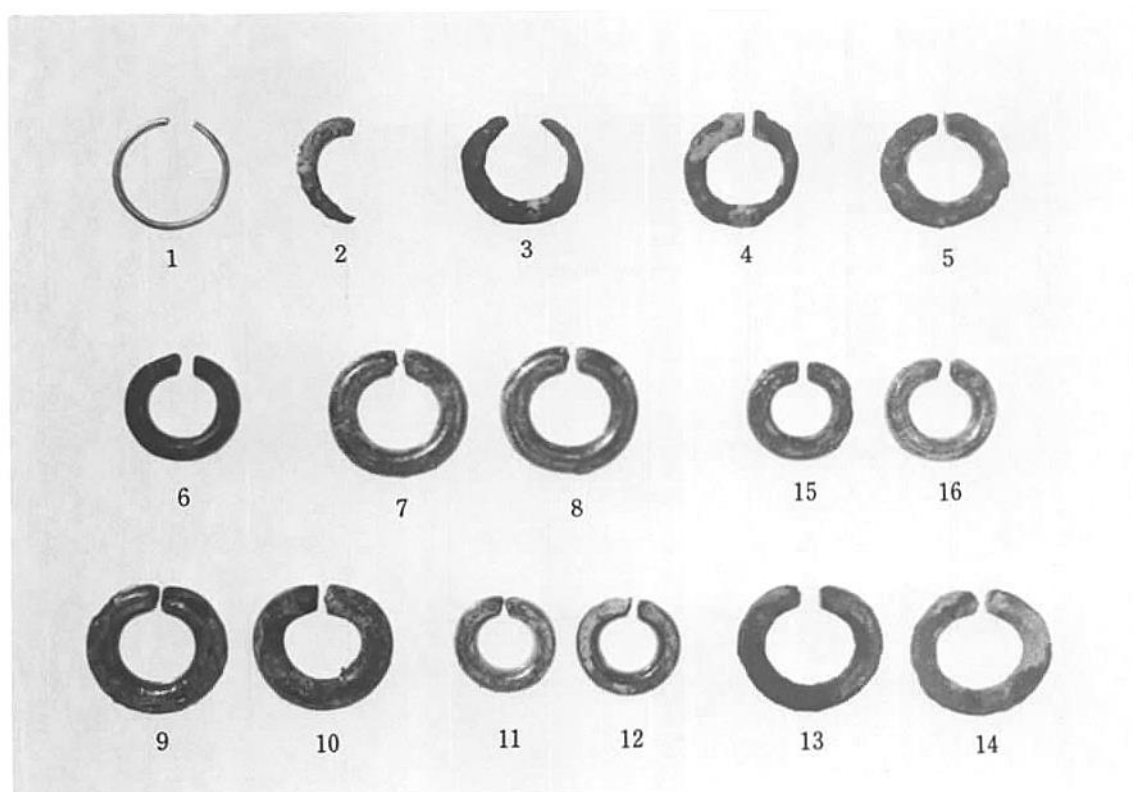
2. 仙道2号墳出土刀子・馬具



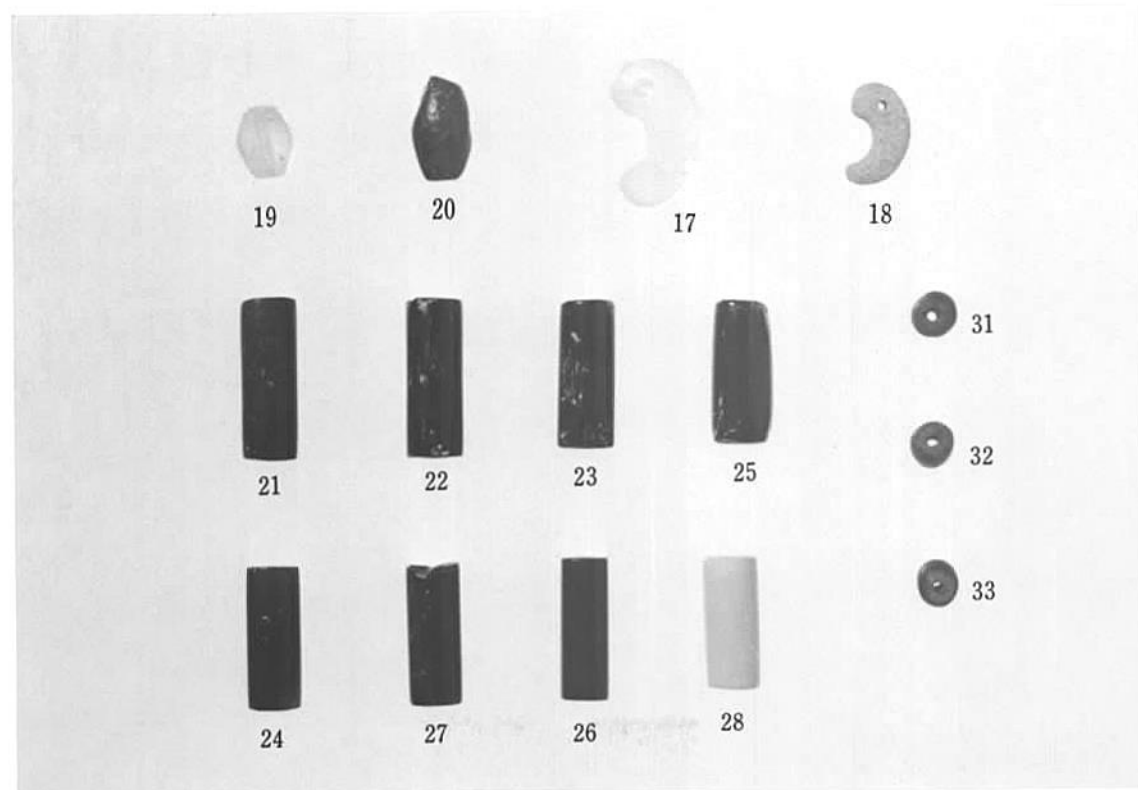
1. 仙道 2 号墳出土武器



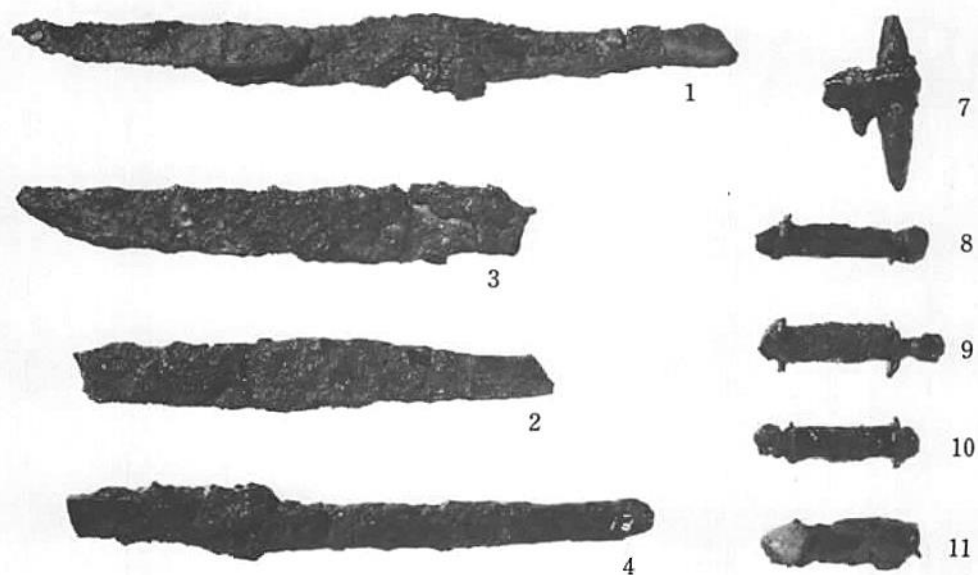
2. 仙道 4 号墳出土装身具



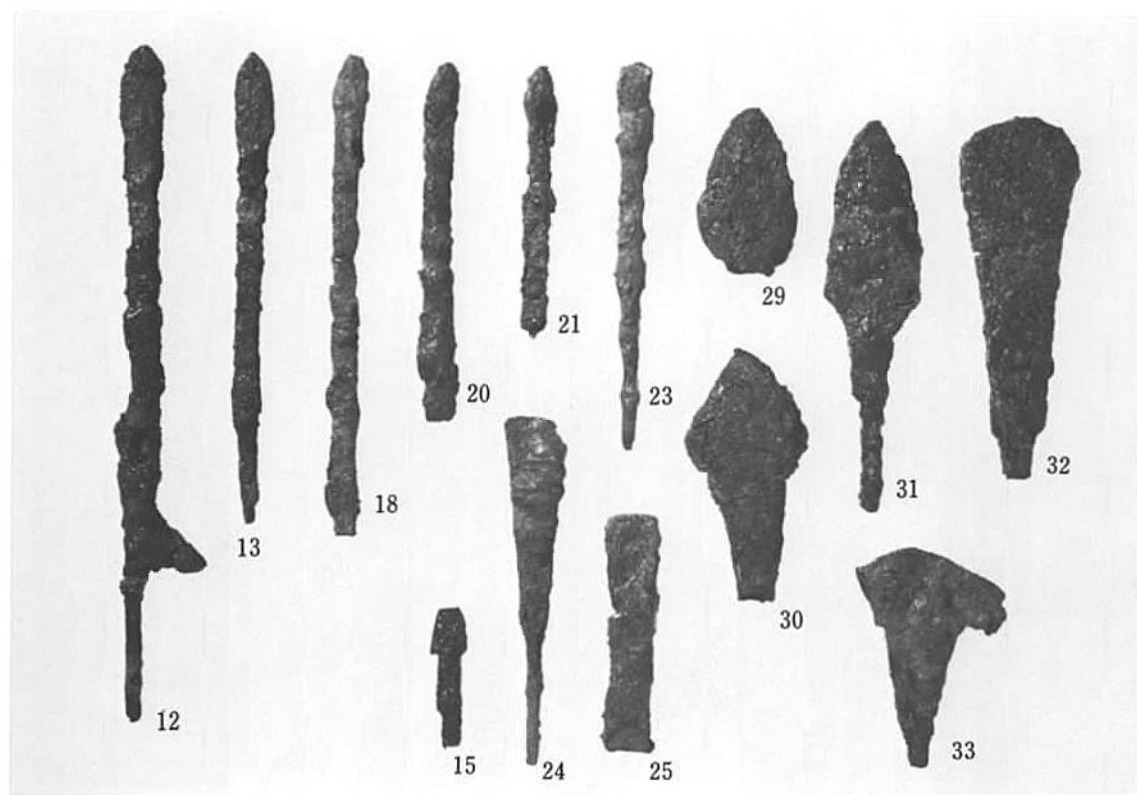
1. 仙道9号墳出土耳環



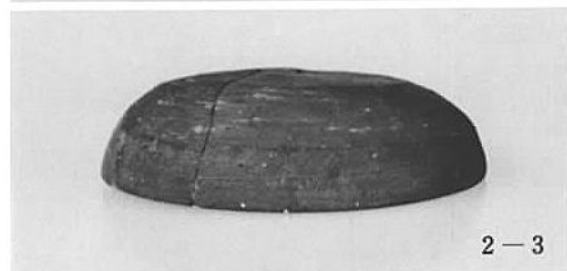
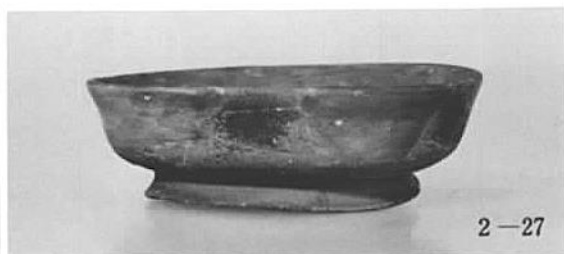
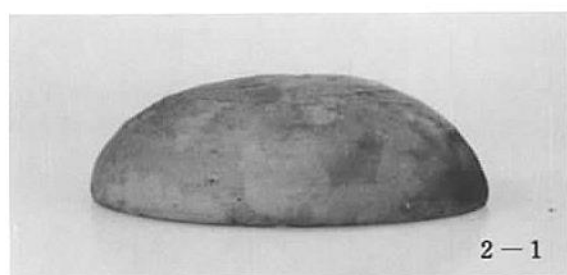
2. 仙道2・9号墳出土玉類 (31~33は2号墳出土の土玉)



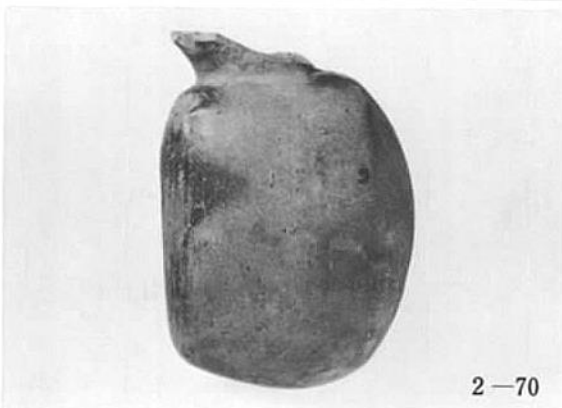
1. 仙道9号墳出土刀子・両頭金具



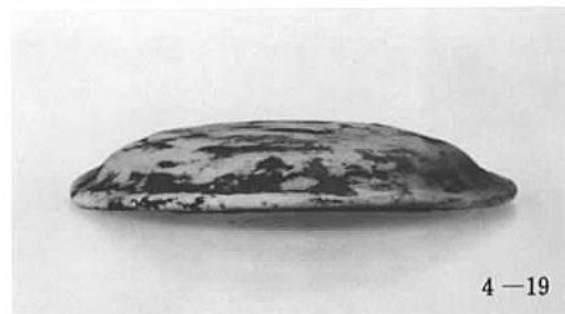
2. 仙道9号墳出土鉄鏃



仙道2号墳出土土器(1)



仙道 2 号墳出土土器 (2)

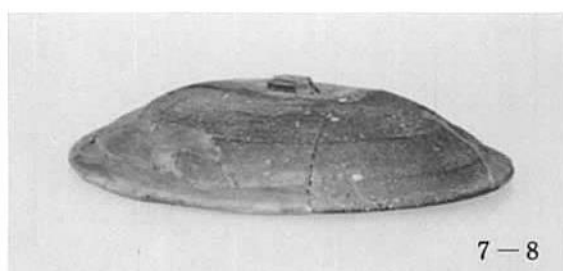


仙道2号墳出土土器(3) 仙道4号墳出土土器(1)

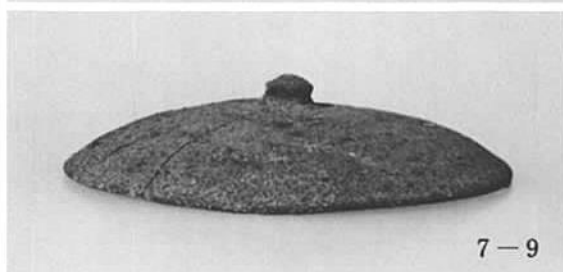


4-33

仙道4号墳出土土器(2)



7-8



7-9



7-10



7-1



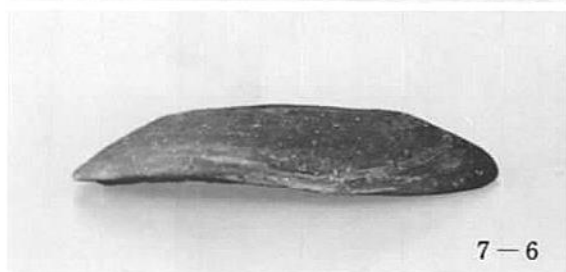
7-12



7-4



7-13

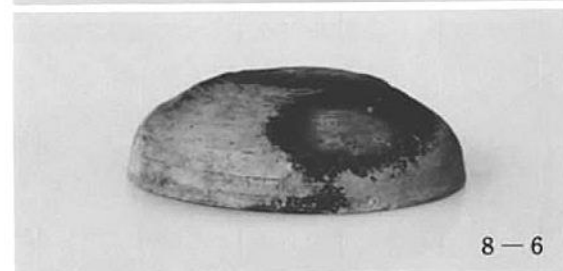
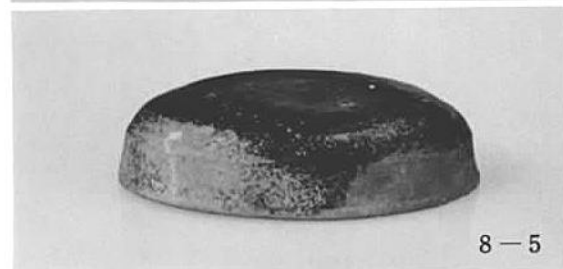


7-6

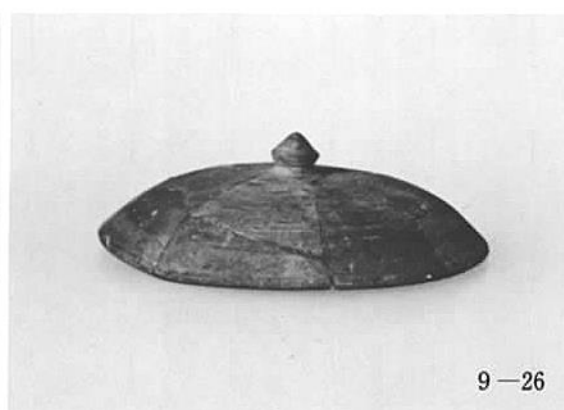


7-14

仙道7号墳出土土器



仙道 8 号墳出土土器



仙道 9 号墳出土土器 (1)



9—35



9—45



9—38



9—39

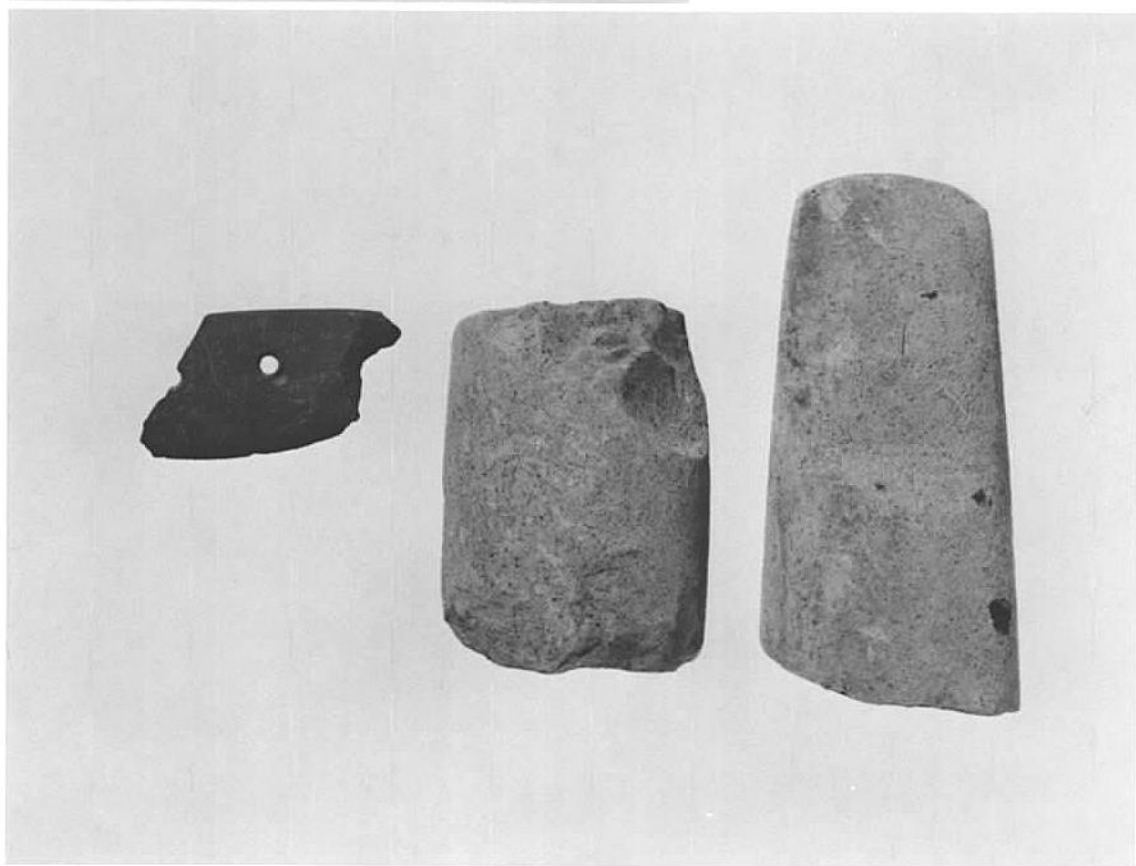


9—50





仙道 9 号墳出土土器 (3)



墳丘周辺出土石器 (左—2 号墳, 中央—7 号墳, 右—8 号墳)

仙 道 古 墳 群

福岡県文化財調査報告書第78集

昭和62年 3 月31日

発 行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 正光印刷株式会社

福岡市西区徳永877-1